岳山

第四十年
第二號

山岳

第十四年第二號　大正九年四月發行

目次

高瀬川湯俣より上河内に出る記　濱谷泰次郎……一頁
雪の乘鞍岳　小野隆義……一三
春の上河内へ　板倉勝宣……二一
針木峠を經て劍岳に登る記　村瀨圭……二七
石狩川上流の旅日記より　竹内亮……四二

圖版

○湯俣水俣の出合……對頁八
○硫黄澤乘越より西北望○湯俣に於ける湯の花……三二

○大岳山頂より望める御前山○御前山の神祠○御前山頂より大岳山……六四

雜錄

○神戸岩と御前山(承前、完結。武田)○天然林保護に就て(古家)○雜鵄峠(武田)○初冬の赤城(中村)○鹽見嶽なる名稱に就て(武田)○地形圖に就て(一)(梅澤)○二合半坂(武田)○山の謎歌(廣瀨)○机上談山(聒々兒)○諸高山の登山人員に就て(鵜殿)

雜報

○天然紀念物保存○爺岳石室竣工○岩菅石室閉鎖○四高山岳會○山岳寫眞頒布○會員通信

會報

○新會員章に就いて○會員章番號割當につきて○會員名簿○入會申込者及び紹介者に告ぐ○會費領收報告に就て○第七回小集會記事○萬國山岳大會○會務報告○交換及び寄贈圖書○本會規則抜萃○投稿規定○第十三回大會豫告

英文欄

卷末附錄として英文欄を添えたり

附錄

會員名簿(會員のみに配布す)

高瀬川湯俣より上河内に出る記

濱谷泰次郎

昨年に懲りたので、本年は豫め電報を以て對山館へ案内の事を賴んで置いたのだが、相互の電報の延着や電文の誤の爲めに、遂に要領を得なかつた。それで行けばどうにかなるだらうと思つて、大正八年七月十五日の終列車で大阪を出發する、同行者は會員の土井達雄君。

七月十六日。未明名古屋で中央線に乘換へ、美濃を經て信州に入る。天氣は思はしくないが、降る程でもないからさのみ心配もしなかつた。途中車窓から駒ヶ岳と御嶽の一部が見られた。

大阪から大町へ行くには汽車の時間の都合が頗る悪い。下關から來る東京行の混み合つた終列車に乘らなければ、どうしても途中で一泊しなければならない。夫に松本でうまく信濃鐵道に接續せず、暑い最中に費す松本市の三時間は頗る永い。漸く午後四時の汽車に乘込んだと思へば、車掌や運轉手の喫煙や雜談の爲に、二十分や三十分は平氣で遲れる、之は勿論今日に限つた譯ではない、是迄度々經驗した所である、も少し乘客の身にもなつて考えて貰ひたいものである。七時に對山館へ着くと、愼太郎君は意外の面持で、

「電報で案内者のない事を御斷りしたのですが」

といふ。勿論私は遲くとも十五日の朝迄に着く筈の返事の電報が來なかつたので、遂に待ち切れずしてやつて來たのであるから、私の方が悪いのであるがやむを得ない。私の豫定は高瀬の谿を溯り、湯俣から蓮華に出て、立山山脈を尾根傳ひに劍迄行くのであるが、案内者は如何しても都合をつける事が出來ないと云ふので、致し方がない。尤も十九日になれば、神戸の飯島福田兩氏の一行が、略私と

同じ道を五色ヶ原迄行かれるので、其案内者として又吉が行くから一緒について行つては如何との事であつた。然し山へ静かに遊びに來た私共は、始から終り迄餘り大勢で山登りをするのも本意ではないから、豫定を變更して高瀬から蓮華迄飯島氏一行の御伴をする事とし、夫から鎌尾根傳ひに槍を經て上河内へ出る事にした。湯俣から蓮華迄は又吉が居るし、夫から上河内迄は私も三四年前一度通つた道であるから、人夫が少し位へボであつても、大した暴らしにさへ出逢はなければ、大丈夫行けると云ふ自信があつた。

夫にしても十七日の半日と十八日の一日を、ボンヤリ大町で過すのもつまらないからと思つて、十七日の正午の自働車で四家に行き、白馬へ登つた。白馬登山の道は、以前に較ぶれば餘程よくなつて居る様だし、又白馬尻と頂上との小家も改築されて、防寒具や三度の食事ぐらいには不自由がないと云ふので、案内者なしに登る。始めての人でも雪辷から上て霧さへなければ、何等の心配もなしに頂上を極める事が出來るであらう。大町四家間自働車一時間强（一圓五十錢）。四家二俣間五十分。二股白馬尻間二時間半。白馬尻頂上小家間三時間强乃至四時間。

高瀬川を遡る

七月十九日。曇、雨。起きて見ると餘り思はしい天氣ではない、然し飯島氏一行が出發されると云ふので、九時過に旅裝を整へて人夫の清水、金原、吉井の三人をつれて出發する。立山や高瀬の谷へ向つて出立する客が五六組もあるので、朝の對山館の混雜は一通りではない。當日高瀬へ入る組は、我々二組と烏帽子から槍へ行かれる中山、若林二氏の一行とで、客が七人に人夫が十四人、總勢二十一人の團體が高瀬の左岸に沿ふて遡る。

雲が多いので山と云ふ山は悉く見えない、夫に妙に蒸暑くつて苦しい事夥しい、夫でも久しぶりで

鹿島川や籠川の美しい水を見て、何とも云へない爽快な氣分になる。一行は後になり先になりして、綠濃き高瀨の谷を奥へ奥へと進むだ。葛の湯迄三里の道は平且砥の如く頗る樂である。山に懸つて居る雲が薄らいで山が見えそうになるかと思ふと、忽ち前よりも濃い雲で包まれて了ふ。小雨が降り出して又間もなく霽れる。風がない爲に草いきれて相當に暑い。時々山百合かなにかの香がする。谿の水も餘り冴えて居なかつた。

「上流に硫黄澤がある爲だ」

と誰かが云ふ。葛の湯で晝食をすまして十二時過に出發した。是から四五日人間界から離れるのである。

葛の湯を出てからは道も稍悪くなつて、所々崖崩で道の壞れた所がある、そんな所には丸太が二本程渡してあるか、さもなければ上か下の藪を廻つて横切る。是で大雨があれば引返す事も出來なくなるのだ。

「危險區域の第一歩に踏込んだのだ」

と心細い呼が聞える。釣橋が二つあつて、道は右岸に移り再び左岸へ戻る。兩岸の山は可成急て狹まつて居る。流れに沿ふた森林も深い。時々激しい雨が降る、降るならば今日中にうんと降ればよい。降るでもなし晴れるでもなして、山の少しも見えない樣な天氣は、山登りには大の禁物である。不動澤の落口に在る不動瀑は、一寸した瀑ではあるが、水が濁つて居るので感じが悪い。又一しきり森を拔けると濁澤へ出る、此澤の水も名の如く濁つて居る、對岸に砂防工事の事務所がある、木造の小家で三室あつて、疊も敷いてあれば臺所もある、又便所さへもあつた。新築してあるから割合に美しい。然し誰も人は居ない。お蔭で一行二十一名は夢圓かなる一夜を過す事が出來た。葛溫泉より二里強。大町より此所迄一日の行程としては頗る容易である、私達の着いたのは午後五時十五分てあつた。高

瀬の水も餘り美くしくはないが、仕方がないので夫で飯を煮る、汁も作る。然し相當に甘かつた。

此小家は高瀬の本流と濁澤との出合の南西の臺地の上に建てゝあるので、大抵の水では流されさうもない。四方の山は高く、樹が黑き迄茂つて居る。霧雨で針葉樹の梢がボーッと霞んで見える。まるで墨繪の樣である。自分の息が白く見える、陽氣も涼しい、深山へ來たと云ふ感じがする。又一しきり雨が降つた、氣の所爲か高瀬の水の音が高くなつた樣だ。

夜はトランプや雜談に時を費して、十時過に就眠した。賑かな山の一夜であつた。

七月二十日。晴、少雨。起きて見ると快晴で、淡い霧が山に吸取られる樣に消えて行く。冷い澤水で顏を洗つて、思ふ存分山の靈氣を吸ふ、頭の中がはつきりして身體が引しまつて來る。昨日の模樣では今日は一日滯在と諦めて居つたのであるが、朝になつて拭が如き青空を見た時の嬉しさ、一同は小踊りする迄に悅んだ。

午前八時三十分出發。中山若林二氏の一行は、山毛欅立尾根を登つて烏帽子から槍へ、私達は尙も高瀨の本流に沿うて上流へ。道は割合に樂だ。所々一寸登つたり降つたりするだけで、殆ど爪先登りの一方である。流れに沿ふた森の道を十町程行くと釣橋がある、壞れては居ないが大勢一度に通ると危いと云ふので、一人宛渡つた。下はさして深くもないが、踏板が腐つて居る所もあるので、皆が渡り了る迄には相當の時間を要した。夫から流れの右岸を進むこと七八町で、傳兵衞小家に達する。こんな汚い小家に泊るよりは野宿する方がどの位清潔で心地がよいか知れない。

天氣はよし陽氣も涼しく、景色も亦惡くはないから、一行頗る元氣がよい。小家から少し行くと左へ入る道がある、東澤の方へ行く道で、中房へも出られるそうである。然し中房迄の道の有無は知らない。尙も溪流に沿ふて進むと、やがて東澤を過ぎて、幾程もなく溪畔の小さな平に達する、樹立の少ない地面には柔かな苔が生へて居て、野宿には持つて來いの場所である。傳兵衞小家から幾里程來

たか忘れてしまつたが、兎に角大町をもつと早く立つて、道草を餘りくはなければ此所迄一日で達する事が出來ると思ふ。道は又茂みに入つて行く、下草が多くて道は細いが昨日よりも樂である。兩岸の山は依然として高く、樹も亦茂つて居る。谿の屈折は割合に少なく、流れも左程急ではない。溪畔の深林は相變らず美くしい。日光が河原の石に反射して白く輝く。少し暑くなつて來た。然し休んで居ると直ぐ寒くなる。

午後十二時半湯俣水俣の出合へ着いた。今迄の樹木の茂つた美しい溪流が急に變つて、岩許りの凄い峽谷となる。右手の湯俣はすさまじい赤褐色の裸々たる谿で、左の水俣は暗褐色の凄絶な谿である。高瀨の女神の様な美しい谿から、鬼の住家にでも辿り着いた様な氣がした。濁から傳兵衞小屋迄半里。小屋から此處迄三里であるといふ。

湯俣から割物澤へ

出合で中食をすました。湯俣の水は硫黄臭いが水俣の方は美しくて甘い。午後一時半出發。水俣に架してある丸木橋を渡つて、湯俣の谿へ入つた。道は全くなく、溪畔の歩きよさそうな所を行く。少し行くと溫泉がある、湯花の大きな塊もある。此邊から奥へは七八年も來た人がないと又吉が話した。流れは急である、兩岸は絶壁で樹も頗る少ない。河原が歩けなくなると川を渡るのであるが、頗る深いので腰の邊迄濡れる。次は絶壁だ。其裾の方の岩の隙間や瘤を手がゝり足がゝりとして、辛くして通過し了ると又川の中へ追ひ下される、夫が濟むと今度は又崖へ追ひ上げられる。赤壁を宮守が這つて居る様にして岩に噛りつきながら登る。川を幾回渉つたか、絶壁に幾度噛り付いたかは覺えてゐない。一同は頗る緊張して無言の儘進んだ。又吉は先達らしい落着きを以て一行の先へと立つた。徒渉から絶壁、絶壁から徒渉と我々の行進は妨げられた。ヘボイ人夫が時々足を滑らして水づかりにな

つたり、崖から落ちたりする、幸ひ大した負傷者もなかつた。

「俺はこんな所へは二度と來ない」

と弱音を吹く奴もある。

「これ以上惡けりや通れない」

と又吉が云ふ。私達は登りであつたからまだよいが、是が降りであつたら尚一層の危險を感じたであらう。

谿が稍開けて右手から割物澤が合流する、湯俣の奥の硫黄澤の谷は、更に嶮阻らしく思はれる。此處から奥へ硫黄澤を溯るには、如何しても谷を行けない所があるので、尾根を越さなければならないといふ。

空は何日の間にか曇つてしまつた、燕から大天井へ續く尾根が見える、割物澤へ入ると直ぐ右岸の河原に二個の天幕を張つた。午後六時過ぎてゐた。

出合から地圖の上では一里位の所を、五時間近くも費してゐる。途中非常に惡い絶壁があつたが、夫を通らなくとも右手の山を越えて、割物澤のもつと上流の方へ出られるとの事である。此澤は出水の度毎に流の樣子が變るので、時には割合に樂に通れる事もあると又吉が云つた。割物澤は湯俣より水が少ないから徒涉は樂であつた。湯俣の本流は硫黄澤である。

野營の場所は狹苦しい上に、下は岩が多いから樹の葉を充分に敷いて褥とした。私達が天幕を張つた後、少雨が降つたが間もなく歇んだ。やがて日も暮れて、隣の飯島氏の天幕の明りだけが暗に浮出して見えた。

七月二十一日。晴、曇、少雨。午前七時十五分出發。直に前の川を渡つた、水は頗る冷い、谿が餘り迫つて居るから岸壁を傳ふ所が多い。尤も川も數回渡つたが、水が少ないので昨日に較べると大變樂

である。谷の色も赤褐色から漸次灰白色に變つて、河原も次第に廣くなる。山にも草木が多くなるし雪も近い。澤の傾斜は增して來るが、却つて歩きよくなる。やがて左から稍大きな澤が合する。夫から少し登つた所で早いが第一回の晝食をつかつた。

鷲羽から赤岳へ續く尾根や、眞砂岳の一角らしい所も見える、右からも一つ澤が合する、雪渓も間近くなつた。一しきり虎杖の藪を通り抜けると雪渓だ。又吉は赤岳と鷲羽岳との釣尾根に向つて居るのだと云ふ、然し磁石と地圖とを按じて考へると、どうも鷲羽から東に續く尾根に登つて居るらしい。雪渓は稍急になつて來たのでカンジキを穿く、然し鳶口だけでも登れない事はない。又吉等は兩方共無しで登つて行く。雪渓を登り切ると高山植物の草原に達する。茲で第二回の晝食をした。霧が捲き始めて近くの雪田や小さい峰が馬鹿に大きく見える。信濃金梅や白山一華が風にヒラ〳〵とゆれる、蝶が飛んで居る樣だ。大きな雪田の左手の花の咲いてゐる急斜面を登ると、間もなく尾根の上に着いた。午後二時四十五分である。尾根の上は平で、岩の配置や這松の具合が美しい天然の公園を形造つて居る。高根スミレや深山大根草なども目に入る。晩の汁のみに岩ブスマを採つた、時々霧の晴れ間から野口五郎岳、眞砂岳、赤岳、割物岳(小鷲)などが見える、又西南の方の霧が切れて鷲羽ノ池が目下に見えた。私達は今鷲羽岳から割物澤と硫黄澤との出合へ向ふ尾根の一鞍部へ達したのである。

鷲羽ノ池から槍ヶ岳迄

高瀨から割物澤迄の澤傳ひは是で漸く終つた。今度は尾根づたひをやるのだ、明日から天氣がよくなつて欲しいものである。遲れた人夫を待ち合せ約一時間許り休んで出發した。霧で鷲羽の頂上は見えないが池の附近は晴れて居る。池の上部を斜にからんで、途中から池の畔へ降りて見た、見下した時よりはずつと感じがよく、池畔の平(池の北西部)には白山一華がまばゆき迄に咲き亂れて居る。

這松の群もある、雪田も美くしい。池の東南は小さな尾根(壁)で遮られて居るから、晴れても眺望はないが、其代り風當りが弱いので暖かそうである。野營には好適地だ。私達はどうせ明日は硫黄澤乘越泊りであるからと云ふので、急に此所で泊る事にした。飯島氏等の一行は蓮華迄行くといふので、尙も鷲羽の南面を斜に鷲羽乘越へと進まれる。私も明日の方向を定めて置く必要があるので、池の西方の尾根へ登つて乘越の方を見た、然し霧で少しも見えない。時々飯島氏の一行が急なザクを降つて行くのが見える許りだ。登山道德には背いて居るかも知れないが、雷鳥を追かけ廻しながら霧の晴れるのを待つた。

突然霧が薄らいで前方に桔梗色をした蓮華、双六の連峰が雪の皺迄も鮮やかに、恐ろしき迄に大きく見えた。其刹那の印象は始めて飛驒山脈に入つて、德本峠から穗高山を仰いだ時よりも更に雄大に感ぜられた。

明日の行路も略分つたのに安心して野營地に歸つた。池の廻りは五六町位はあらう。底は泥で沼氣がブク〳〵昇つて居る。水は割合に暖いが色は紺碧で美しい。實に靜かな所だ。白山一華を祷とした心地よさ。晴れた日にこんな所で一二週間も滯在して見たい。暴風雨でさへなければ、少しぐらい霧の捲くのも惡くはない。道々採りためた岩ブスマや岳ワラビの汁で、甘い夕食を濟す。浮世からかけ離れた靜かな快い野營地だ。夕暮少雨ありて雷鳴を聞いた。

七月廿二日。半雨、半曇、後晴。目が醒めて時計を見ると八時を過ぎてゐる。一同驚いて飛び起きる。然し私の見た時計は止つて居つたので、實際は漸く午前五時を過ぎた許りであつた。人夫達は焚火をするのが頗る下手で、一時間近くもかゝる。起きてから飯になる迄が可なり長いのに呆れる。

今日は天氣が惡い、時々霧雨が降つて、岳から吹き下す朝風が冷い。空が明るくなつて來たから今に晴れるだろうと言ひ合ひながら八時四十五分に出發した。中山若林二氏の一行も昨夜は赤岳泊りであ

（濱谷泰次郎氏撮影）

湯俣水俣の出合

るから今日は何所かで一緒になるであろう、そして今夜は共に硫黄澤乘越で泊るのだ。私達が池の南方の尾根の上に達した時、西南の方の霧が晴れて蓮華の頂上が見えた。山巓に黑い者が動いて居る、飯島氏の一行であらう。微かに呼子笛を吹く音が山彥に應へる、私達も「オーイ」と叫ぶ。倏ち霧が彼我の間を遮つてしまつた。

鷲羽乘越と思ふ方向へ斜に降つて行く、大小の岩のザクで傾斜は頗る急だ。一步々々足元に氣が許せない。夫でも岩が崩れてゴロ〳〵と凄しい音を立てながら谷の方へ轉つて行く。僅許りの殘雪を横切つて漸く鷲羽と蓮華との釣尾根へ出た。夫からは踏みならした跡もあるし、又私も一度通つた所であるから心配はない。鷲羽乘越に達したのは一時間の後であつた。這松の多い平で野宿の好適地は幾つでもある。天候は頗る惡く、時々强い雨が横樣に降つて來る、休むと直ぐ寒くなる、不愉快な日だ。どうせ濡ついでだから這松の海(切開けはある)をかまわずに進む、北の方の雲が切れて祖父から雲の平の一部が見えたかと思ふと倏ちまたかき消すが如く見えなくなる。平を過ぎて蓮華の登りにかゝると間もなく頂上に達する。俄然霧が薄らいで黑部五郎岳が圓い頭を現はす、續いて祖父、鷲羽、黑岳が偉大な體軀を天空に聳やかす、呀つと思ふ瞬間に突如として元の霧の世界にかへる其遽しさ。

蓮華の頂上を辭して南蓮華(假りに北方の最尚點と區別する爲に)の頂に移る、此所で晝食にした。幸ひ雨もやんだので焚火をしながら二時間許り休む。

次は双六岳だ。此三つの山の尾根傳ひは頗る樂である。双六岳の頭かけて飛騨方面の霧が晴れると双六谷の一部が見えた、下界は晴天らしい。頂上から左に續く廣い尾根を辿つて、双六池を目ざして進むだ。途中、殘雪と岩との隙間へ降りて一寸困つた事と、樅澤岳の肩上に一瞬間槍の峰巒を仰いだことの外には、格別何の刺激もなしに双六平へ降つた。靜かなよい所だ。笠岳が一寸頭を出す。池の畔に野營の跡がある、不愉快な鑵詰の空鑵も轉つて居る。永く休むと寒いから直ぐ樅澤岳の登りに

懸る。硫黄澤乘越も近いと云ふので岳ソラビを採りながらゆつくりと行く、濃霧の中を樅澤岳、金米糖坂と過ぎて、午後五時硫黄澤乘越へ着く。中山氏等の一行は未だ見えない。雨の爲めに赤岳で滯在されたのか、遂に上河内に至る迄出逢はなかつた。

天幕を張つたり焚火をしたりして居る内に、先づ槍の方の霧が晴れる、次で穗高、燒、乘鞍、笠と順次に雲が拭ふ樣に消えて行く跡から現はれる。北の方も硫黄澤の赤茶けた凄い谷が見え始めると間もなく燕、大天井、野口五郎、赤岳、鷲羽、蓮華などが、雨後の美しい姿を現はす、鷲羽乘越の上に藥師さへも見える、此壯麗な展望に二人ながら恍惚として言葉さへも發する事が出來なかつた。「私も山が好で六甲へ何度登つた」「大峰へも登りました」と云ふ樣な連中に一度此眺めを見せ度い。靜かで雄大で美しい、下界の人達の想像さへも許さない此景色を。

此處はお定りの野陣場の事とて野宿の後が汚い。景色はよいが風當りが强いから、餘りよい場所とは云へないが、北の方から尾根傳ひに槍へ行くには此邊で泊る必要がある、夫には此處より外に場所がない。若し暴風雨の恐れのある時は、普通の野宿場の少し南手の尾根上の凹地へ避くればよい、夜に入つて又も雷鳴を聞いた。然し雨は遂に來なかつた。

七月廿三日。晴、大雷雨、晴。時鳥の鳴き聲に目を醒す、未だ夜は全く明けはなれて居ない。槍、穗高の連嶺が黑く屏風の樣に峙つてゐる。黑岳、藥師、鷲羽などが鮮明に見える。日が出るともう霧が捲き始めた。

午前六時頃に出立の豫定が遂に七時四十五分となつた。鎌尾根を上下しながら槍へと向ふ。南の方燒岳から御岳迄が朝の瀨氣に冴え渡つて居る、鎌尾根を東へ進むに從つて兩側共に恐ろしく嶮しくなつて來る、踏み占める岩も脆いが、さのみ危險を感ずる程の所もない。夫に狹い尾根の上を傳ふのであるから、霧が捲いても方向を間違へる憂はない。時々槍の峯尖が思はぬ天空に現はれる、小槍から

北の高瀬谷へ落ち込む尾根は岩壁が頗る嶮しい。

「北鎌尾根は人間業ぢや通れない」

と云つた又吉の言葉を思ひ出す。槍に近附くに從つて岩が大きくなつて、傾斜も急になつて來る。私達が槍の肩(飛騨乘越)へ達せんとした時、上から蒲田へ向つて降りて來る三人の人に出逢ふ。

漸く飛騨乘越に達した。荷物を置いて槍の穗先へ登る、十一時槍の絕巓に達した。外に上河內や中房から登つて來た人も居る。霧で眺望は少しもない、然し私達は恰も峠の頂上にでも達した樣な愉快さと輕い氣のゆるみとを感じた。

上河內と淺間溫泉

槍澤の方で一つ大きな雷が鳴る。十一時四十五分急いで槍澤に向つて降り始める。割合に立派な道がついて樂になつた。是も宮樣のお蔭である。坊主の岩小屋の下の雪溪に懸つた頃突然大雷雨に出合つたので、一行は駈る樣にして降つた。少し位滑つたつて厭つては居られない。雪溪が終つてバヾ平の槍澤の小舍(所謂アルプス旅館)に着く頃、雷雨は全くおさまつた。癪にさわる天氣だ。濡れた着物や蒲團を乾して、午後三時に上河內へ向つて出發する、道は樂だ。土井君を先頭に飛ぶ樣にして降つた。雨後の深林は美しい。薄い霧で水の畔が煙る。河原は白く銀の砂を敷きつめた樣で、其間を流れる梓川の水は水晶を溶した樣に透き通つて居る。

二ノ俣、一ノ俣、橫尾谷、木賊澤などを經、白樺や牧牛の間を縫ふて牛番の小家を過ぎ、河童橋を渡つて午後六時半上河內溫泉へ着いた。宿はお祭の樣な賑かさだ。百幾人とかの客があつて何の室も皆滿員だといふ、漸くのことで泊めて貰へる段取に迄漕ぎ付けた。所が私達の後に七高の連中が七八人來ると云ふ話をすると、急に清水屋の親爺は、「それではお前さまがたを御泊め申す事は出來ない、七高

の方から手紙を頂いてあるのだから」と、斷りをいふ。私達は思はず顔を見合せて苦笑せざるを得なかつた。假令葉書は來て居るにもせよ、若し私達が夫を云ひ出さなかつたならば私達は泊れたのである、若し私が既に座敷へ通つて旅裝を解いた後で、約束の七高の連中が來たとすれば如何するつもりだ、夫でも私達を追出すつもりであらうか、私も此所へ泊るのは始てゞはなく、是で六回目である。幾ら平凡な面でも少しは覺えて置いて貰ひたい。

裏切られた樣な不快を感じながら、再び元の道を引かへす其歩みの重さ。河童橋の畔の舊養老館たる五千尺旅舍にたどりついたのは七時過。此所も相當に滿員ではあるが快く泊めてくれた。此宿は景色は頗るよいが、湯殿や便所の不潔さ。敢て斯る山の中で設備を云々するのではないが、も少し氣をつけたら如何かと思ふ。癪にさわるが山から出て來た者の身には、清水屋の湯の有難味を思はずには居られない。

上河内の人夫は一日四圓乃至四圓五十錢であるといふ。五千尺旅舍に於ける物價は、宿泊料二圓五十錢(二汁一菜)、玉子十二錢、麥酒七十錢、草鞋十二錢。

大町の案内者は二圓五十錢、人夫二圓二十錢、夫に上河内から大町へ歸る迄二日分の日當を要求する。私達の人夫は清水と吉井とが烏帽子から槍迄來た事があるといふ、然し案内者としては尙少々物足りない感がある。金原は始めてゞあつた。尤も突然行つて無い筈の人夫を三人迄都合して貰つたことは對山館に對して寧ろ感謝しなければならない。

七月二十四日。晴、雷雨。午前六時起床。前の河原へ出て穗高を仰ぎ燒を眺めながら顔を洗ふのは少し贅澤過ぎる。これで人の來るのがもう少し少なかつたら一層快い事であらう。私は友人に逢ふ毎に山の美を說いて山登りを慫慂する。然し山へ來て見て餘り大勢の人に出逢つたり、無暗に道がよくなつたりして居ると、山の威嚴を傷つけられた樣な氣がして自分が是迄一人でも多く山登りを人にすゝめ

た事を後悔するのである。上河内も清水屋に三味線が置かれる様になればお終ひである。

八時出發、十時德本峠。岩魚止を經て午後一時半島々の清水屋着。夫から半里川下の新淵橋の南岸から自働車に乘つて松本に向つた。も二三日經つと島々迄通ずるさうである。松本で自働車を乘換へ、六時半に淺間溫泉西石川で旅裝を解いた。溫泉へ入つた時の心地よさ、座敷も清潔で、山からコロがり出た身には食物も甘い、金殿玉樓に坐して山海の珍味を味ふ思ひがあつた。此家の主人がわが山岳會會員である爲か、私達は山から出た儘の隨分汚い姿をしてゐたのであるが、取扱は極めて叮嚀で大變居心地がよかつた。

翌二十五日は滯在。二十六日から輕井澤を經て草津に到り、白根山に登り、東京、箱根を廻つて、八月一日無事歸阪した。山から出て普通の旅をすると、身體がだれてしまつて割合に愉快な事はないと云ふ事を經驗した。

雪の乘鞍岳

小野隆義

日本アルプスを含む中央山系の雄姿と其登攀の壯快なる氣分とに憧憬する事久し。偶ゝ職務の都合にて去年十二月飛驒の人となり、乘鞍岳の登山を計畫すること再三、大正八年四月二十日遂に第一回の目的を達し、夏季登山に味へぬ愉快と危險とを經驗したり、是又予が山岳會員としての最初の試なりき。雪中とはいへ海拔一萬尺に足らず、紀行を作る寧ろ餘りに冒險誇張の嫌あり。然れ共悲む中央山系の雪中登攀の未だ邦人に依りて試みられたる事の誠に尠きことを。或は好奇心に類せん、好奇心

また可なり。烏水氏の言を藉りていへば、コロンブスが絶海の大陸に航したる、スタンレーが荒漠不拓の亞弗利加に入りたる、博士ナンセンが北極の氷洋遠征を試みたる、實に皆確信上に立てる好奇心の爲にあらずや。

三月二十三日一度計畫を立てゝ發足せしも果さず。而かも二十四日獨逸人と墺國人との二人亦スキー登山を試みしも、雪の爲め山巓を極め得ざりしと。後慶應の學生若干又信州方面より登山し、中途目的を達せずして歸りしを聞けり。

山奥の飛驒にも四月といへば春は廻り來りぬ。曩の雪中登山失敗は、さらでだに雄心を唆り、花を他所に再び四月十八日船津を立つて平湯に來り、温泉に身を浸しながら、そゞろ脾肉の嘆に堪えず、豪快なる山姿を胸に描いて、地元民の無謀の譏を馬耳東風と聞流せり。

由來日本北アルプス登山の記事は多くは信濃路に因り、從つて上河内温泉などはよく紹介せられたるも、予は今飛驒に居るためにいふに非ざれども、寧ろ登山は飛驒路よりする方旅情に富めりと思ふ。先づ飛驒に入るには、岐阜を經て高山迄自働車の便をかるものと、富山より徒歩船津に入るものとの二路あり。飛驒の國は地名よりして既に神秘を帶ぶ、神通川、高原川、宮川、神岡鑛山、上賓村（日本山水論に曰く、奥飛驒に蟠結せる阿房山、硫黄嶽、穂高山、槍ヶ岳、笠ヶ岳、錫杖ヶ嶽、抜戸嶽、鷲羽嶽等低きも海抜八千尺を下らず、高きは一萬一千七百尺に至り、峻秀富士に亞げるもの兀立して天を刺すところ、その裾を繞りて摺鉢の底の如く、東に隆起して稍や西南に窪伏する一村、之を上賓村といふ、高原川一村を貫通して所謂縦谷を作れり、高原を約めてタカラと訓し、今寶字に改めたるもの、命名自ら「濃飛高原」中のもの。全村の地質概ね薄瘠にして、耕耨するも勞は他に倍して功却つて拙し）等いかにも飛驒にふさはしきを覺ゆ。

船津を立つて高原川に沿ひ、人口の稀薄なる山國の道を、原始的なる感と旅裝束の紺の香とにそゝ

られつ。日和つゞきとはいへ、しつとりと潤を帶びたる土の色、若芽の萠えたつ匂を其儘吹くといふ程にもなく送りくる微風に醉ひ、川の對岸は岩石屹立、石鏃斧壁、宛然赤壁を偲ばしめ、川狩せて石出で、振返り見る釣橋の神秘なる、水はせゝらず西に流れて、杖石の奇礁兀立し、積の延線上に噴烟漲る燒岳を望み、中央山系の連峯を凝視しつゝ、歩一歩奥に向ふとき、普通闊葉樹の林相は盡きて、白樺の純林を過ぐる頃は、洋畫に見る加奈多邊の白樺林の養狐事業など想ひ出さしめ、百合に名高き福地や一重ヶ根の溫泉を過ぎて、白谷の砂防工事を左に眺むる頃より、今宵の宿たるべき鄙の溫泉の溫美を思ふとき、身と心とピッタリ登山氣分に合致するを覺ゆ。

槍ヶ岳は蒲田より、乘鞍は平湯より、共に日歸りの登山なる事は、登山者に向つて尤も都合好き事なり。信濃路よりするものは、必ず野宿の要ありと聞く。平湯の村山旅館に着き、溫泉に浸りながら四月頃の登山の無謀なる事を再三繰返され、少なからず期待とブラウドとを裏切られ、反抗心を起して、何キットやつて見せると昂奮する。由來負け惜みは登山に禁物とは聞けど（地元の人は五月八日頃より早く登山したる事なしといふ）、吾人は積極的に登山趣味を鼓吹し、用意と自信と科學的調査とを以て、雪中登山や强健旅行を宣傳せんとするものなり。況んや雪中乘鞍登山の如き比較的容易なるに於てをや。

予は次の理由により同行者二人を誘ひ得たり。

一、行程が日歸りに可能なる事、且つ平湯より一里許の處に小なる鑛山がある事、この鑛山以上は殆んど樹木叢生せざるを以て、熊等に遭遇する虞絶對になき事、食糧の携帶等さほど心配を要せざる事。

一、乘鞍岳は參謀本部陸地測量部の地圖より判斷して、比較的地形險惡ならざる事、從つて用心すれば雪崩等に遭ふ事なき事。

只恐れたるは、寒氣と、頂上凍結の度及び風の三者なり。實は突發的（平湯へ着して初めて充分に決心したるため）の計畫にて、別段特別なる準備もせず。然し田舍の囲爐裡を圍みて、宿屋の主人其他より聞く古い登山談又は熊の話などは、旅の日記を飾る收穫の主要部分に屬せり。

宿帳の中に予の氣をひきたるは、去年の夏東京小島某氏が其令孃と宿泊せられ、死亡せられたるが宿帳の行先欄には死亡とあり、次を見るに之は全く他の人なるべきも、行先白骨と書しあり、勿論信州白骨溫泉の事なれども、皮肉の感を生ぜざるを得ざりき。明日の登山につけても、何かしらん謎の如く思はれて、春といへど玆海拔一二三三米突の平湯は一しほの冷氣を感じぬ。

明くれば十九日一天拭ふが如し。「朝テッカリはあてにならず」と知れど、折角の好日和、急ぎ溫泉を出でゝ飯を喫す。予は制服制帽にて、足にツラヌキ（之の邊の名稱、シシの皮にて拵へたる毛靴）を着裝す。內藤君は制服の上に宿屋の「袖なし」を借りて着込む、足部は予に同じ。足は神武天皇時代頭は大黑帽とて大笑す。握飯二（之は少くて閉口せり）、手拭、手袋、黑メガネ、樏、金樏、鳶（之は予の考にて凍結したる雪の上に打ち込みつゝ登るための杖代用——實行の結果到底鳶なしには半腹以上登山絕望なり）酒、仁丹、ミルクキャラメル、晴雨計の用意を忘れしため寒暖計、鉈。同行三名案內者一人、之に荷物を托し、其宿屋の主人夫婦や娘に送られ、鳶を手に午前八時出發す。宿を出るや直に雪を踏む、堅き事地上に異らず。

大瀑の邊岩燕も飛ばず、四十間の大瀑も水勢減じて壯嚴を缺く。兎の跡だに見當らず。大瀑は平湯より數町に過ぎず。已に白樺絕えて岳樺、唐檜、栂の林相となる。暫らく登るに連れて、唐檜減じ白檜之に代る。此邊にて去年鑛夫の一人が熊に出合しとの事なり。しばらくは熊の話にて賑ふ。それでも案內者の次には、予が熊に就ての智識の所有者なり。丁度四月の六、七、八日の三日間金木戶の奧に熊狩を試み、獲物はなかりしも、熊の話は最近の仕入なればなり。碧梧桐氏が上河內より槍へ登山さ

れたるとき、熊に出會ひたる記事を讀みたる事あり。熊狩りは銃の外必ず鎗を携帶する事肝心なり、出會ひたる刹那落付いて一鎗突刺して、其儘逐げて銃の裝填にかゝる、熊は鎗を抜かんとあせりながら益々體内にさし込むと聞く。然し追々熊は居なくなり、本年など熊の皮の相場滅法に高く、六尺もあると七十圓といふ。是に於てか予は野獸亂獲を制限する法律の發布を望むものなり。

國有林と民林とは甚しく林相を異にす。午前十時頃國有林に入り、次で鑛山に着す。鑛夫二人國有林を借地して、こつ〳〵坑を掘りをれり。此の邊雪の消え去るは、一年中四十日に過ぎずといふ。兎や熊の話に取り交ぜて、又今頃の登山の危險を說いて止まず。朝より氣遣はれし天氣變り、陰雲出で風脚早くなり、天候俄に險惡となる。同行の岡本君先づ弱腰となる。然し折角の是迄の苦心に誘はれて鑛山を立ち出て、更に登る。風愈々加はり、亂雲天の大部を蔽ふ。四ッ嶽の偉人の如き姿近く目前に聳ゆ。平湯鑛山の全盛の跡を見て進む。此邊樹木の雪上に出てたる部分人背に達するもの殆どなし、而かも大抵白檜のみなり。振返り見る雪上に、銀蛇の如く印する足跡、雲間を洩るゝ日光に映じて美しく麗はし。かなり空腹を覺ゆ。頂上迄四里と聞けど、已に十一時を過ぎたり、前途遼遠の感なき能はず、雲霧は已に四ッ嶽の頂を蔽ひ、風山に滿つの狀あり、遂に引返すの止を得ざるに至れり。藏王山の慘事など思ひ浮べ、中飯を披き、酒（登山に酒は禁物なれど）一盞。岳樺の皮を削つて感を記して去る。

午後二時平湯に歸着す、平湯青年團は曩に此無謀を譏りたれども、今や天候を案じて將に搜索隊を出さん準備せりと聞いて、深甚の感謝を表す。俄然天候は激變せり、歸着と共に雨至り風强く、遂に夕刻より雪に變じ、蕭條の氣天地に滿つ。

同行者も村人も登山の危險なるを說きて、明日歸船せよと促す。止ぬる哉。顏を背けて早く寢に就けば、夢は乘鞍を去來しつ。

四月二十日午前五時醒む。先づ空を仰ぐに、霧らしく雲らしく、兎角天氣晴朗ならず。然れども直覺的に天候の恢復しつゝあるを信ぜり。室に歸りて同行者を促し起せど、頗る氣乘りのせぬ顏付なり。幸にして天候は漸次晴朗に近づけり。同行者案內者を督して、兎に角危險なれば途中より引返す事を條件として再準備を承諾せしめたり。村人等しく我等の擧の頑固なるを云ふ。夜來の積雪六寸に近し。氣進まぬまゝに出發せしは纔て八時に近し。春の淡雪を踏みて行けば、今朝は珍しく兎の跡多し、鐵砲欲しやと愚痴いふも無理ならず。昨日の鑛山に休憩して、昨日中飯せし地點に至る頃は、一天鏡の如く晴れ渡り、透徹の空氣を通して淡青の天を見る。昨日は不幸にして今日は幸にして、予の天氣豫報的中し、獨り快哉を呼ぶ。雪は自由自在に道を與へ、足はツラヌキのため些の冷さを覺えず。道は最近を選び、今や急勾配の中腹を橫ぎりつゝあり。昨日迄の雪は凍結して、今朝の淡雪之を蔽ふ。吾等は左手に鳶を持ちて、この凍結せる雪中に打込み、步一步「かんじき」を雪上にふみしめ、過なからん事を注意して進めり、然るに予は誤つて足を掬はれ、四十度許りの雪溪にて滑り始め、何程鳶を打込みても其甲斐なく、鳶は雪の中に一條溝を作りながら、十六貫の體重を支ふるは愚か、矢を射る如く滑り下りぬ。予は瞬間に覺悟を極めて、うつ伏しの儘滑る途中、努力して仰向に轉回せり。何たる天佑ぞ、これがために偶然若干の方向轉換をなし、左の手はゆくりなくも栂の枯枝の尖端に觸れ、三十間ばかりにして止りたるは或は神佛の加護か、兎に角白骨となるを免かれし不思議よ。稍落付くまゝに今更に寒さのために手の自由を失ひたるを覺えたり。岡本君は遠廻して降り來り、予を援けくれぬ。予は雪を滑るとき負傷せる兩手の指を見て、又更に痛を覺えぬ。寒暖計を見るに華氏三十三度也。これ或は暴虎憑河の譏を免れざらんも、此冒險なくば所謂馬を五山の第一峰に立て、宇宙を睥睨し得ること能はざるにあらずや。遮莫これは此記事を書きし時の事にて、當時中々生色もなかりき。あとにて聞きたる事なれども、若し滑りたるときは、身體を長くするを可とすといふ。

飴と仁丹とに蘇生の思をなし、恐怖に滿ちつゝ用心を加へて、正午十二時四ッ嶽の鞍部に達し、包を解いて冷き握飯を食ひ、一杯の酒に今後の息災を祈る。此邊だけかんば多く、皆風强きため這松の如く彎曲せり。屹立せる群峯の岩塊のみは雪を頂かず。鞍部の雪は濱の眞砂の如く水氣少く、微風に吹かれて縞目を生じ、斷層面を見る心地す。氣溫は華氏の三十度に下る。長き谷間の道を過ぐれば、始めて信州の山野を左に望む、此處風のため雪なく、已に這松帶に入れり。笠ヶ嶽、槍ヶ嶽、穗高嶽の英姿を望む。只僅かに風加はり、卷雲來往し、恰も大鷲の頭上を掠めて飛來するに似たり。谷間の雪の上を登りに登り、緩斜面を眞直に直進す、されど乘鞍の頂上は未だ見えず。

風乏しき處桔梗ヶ原の邊よりツガザクラ、ヂムカデ、ツルコケモモなどの高山植物を見る、夏はいかばかり美しきか、風流ならぬ案內者しきりに其麗を說いて、更に夏季の登山を勸む。右手に恵比須嶽左手に大丹生岳を見て、大丹生池を瞰下する頃より、風少しく起る、左は遙に松本の平野を眺め、駒ヶ岳の連山は呼べば答へん許りに鮮に、右には加賀の白山を見る。淺間山の目に入らぬは遺憾なりき。夏は大丹生岳の中腹を廻りて登れども、冬は到底不可能なる儘に、雪崩を慮りつゝも庇の上をよぢて、大丹生嶽の頂上に登る。此處烈風危險の標札あり。漸次に冷氣增し、雪は凍結して「かんじき」を踏占むる事至難なり。案內者に援けられて、大丹生岳の頂上を極む、風强けれども眺望愈々勝る。鵄鳥の足跡を見る事數度。千丈ヶ原の一高原を隔てて、始めて乘鞍本岳の山容に接す。前途尙ほ遠なるの思あり、時に午後一時半也。小憩の後駈足にて千丈ヶ原を橫斷す。此邊道に迷ふて死せる者ありと聞く。先に立ちて急ぐ案內者の姿は、ゆくりなくも西比利亞の荒野を偲ばしむ。道は何處と擇ばず一直線に登り、踏めば音する雪を踏み付け〳〵、鶴ヶ池を橫切りて摩利支天に登る頃、風益々加はり、冷氣甚しく、雪は宛然鏡の如く凍結して、影もうつらん許りなり（此邊測量部の地圖を披き見れども、少々判斷し難き所あり、されど寒き儘詳しくも詮議せず）。摩利支天の中腹にて內藤君は二度予は一度

滑り落ち、特に予は曩に經驗あるために、一しほ恐しさを覺えたり。此時漸次に空腹を催し、中飯の少かりしを後悔す。午後三時五分遂に頂上と覺しき處に達す、溫度華氏十八度也。偉大なる壯嚴、海拔三〇二六米突の山嶺に雪中登蹕の快は何物か之に如かんや。

强風に吹かれ乍ら酒を汲めども味もなし、寒さに加へて、見下ろす鏡の如き雪の斜面を、如何にして降る可きかと思へば、到底酒の吟味處にあらず、駐まること數分に過ぎずして、早く安全なる地帶迄降りたしとの念頻りに起る。登りに反して降りは實に危險なり、恐らく案內者が爲を以て一步一步足場を作りくれざりしならば、如何なる危難の起りたるやも知れず、今尙想起するだに戰焉たり。唯だ斜面の安全なりと思はるゝ個所は、尻を下ろして滑るに任かせ、滑走の快を擅にせり。危險區域を離れたる後の歸路は、眞に一瀉千里の勢にて、夕陽は微光を投げて銀砂に映じ、鑛山も針葉樹林も瞬く間に過ぎ、笠ヶ嶽は我を迎ふる如く前に立ちて、飽くまで高く、硫黃嶽の噴烟信州方面に棚引いて明日の快晴を語るが如く、暮色漸く四邊を罩め、顧れば乘鞍は見えざるも、四ツ嶽巍然として別れを惜むものに似たり。

標を着けたる爲に重かりし足も、大瀑の處にてこれを脫ぎ捨てたれば愈〻輕く、午後六時五分恙なく平湯に到着し、頂上を極めたりと聞いて啞然たる村人は其儘に、急ぎ溫泉に入る。一日の中に驚く程顏は黑く焦げ、唇の邊又は額より頰へかけてビリ〳〵す。

晩飯に出來る丈の御馳走をとの註文も、徒爾に了り、罐詰を開きて煮、豆腐をつゝきながら、すべて瓶詰なれば正宗といふ白鶴の四合瓶一本を三人して盡さゞる內に、早くも睡魔に襲はれて魂は華胥の鄕に入りぬ。

會員諸君の始、乘鞍へ登山せらるゝ時は、船津小林區署又は栃尾保護區官舍へ御立寄を乞ふ、□來る丈の便利を御計ひいたすべし、殊に槍ヶ岳登山に就ては、中腹の硏伐作業所に休憩せられよ、同所主任も喜んで御說明の勞をとる事と存じ候。

（八、四、廿、船津小林區署長）

春の上河内へ

板倉勝宣

大大八年三月二十一日。信濃鐵道にゆられながら、重いリュックサックを背負つた儘腰をかけて、顎の下にアルペンストックをかつて、反對側の窓の中に刻々に移つて行く眞白な雪の山々を眺めて居ると、雪の山の不可抗な吸引力は、チットして居られない程強くなつた。しかし夜行で來た寢不足の身體は、今日山に入る事を拒んで居る。はやる心を抑へつゝ穗高驛に下車した。迎ひに來て呉れた寺島寅吉老人と、春にしては暖かすぎる田圃道を、牧に向つた。常念蝶ケ岳が雪を浴びた下に、平たくこんもり茂つた淺川山を背後に、牧の愛らしい村が點々と見える。スキーを肩に、リュックサックの重みを感じながら、汗の流れる身體を寺島方に着いた。水車がめぐつて居る。晝飯をすましてから、案内の永田小十郎が來たので萬事相談の上明朝出發と定め、小十の外に寺島政太郎、渡邊虎十の二人が來て呉れる事になつた。

三月廿二日。今日も又暖か過ぎる好天氣である。午前七時半に出發した。寅吉老人は「雪の山を見に行ける所までついて行く」と云つて、六十二才の老體を運んで來た、總勢七人となつた。荷物は大部分人夫に背負つて貰つて、今は僅か二貫餘平均となつた。松林をぬけると本澤、二ノ澤、一ノ澤を集めた、大きな谷をへだてゝ、鍋冠山が雪を被つて、屛をなした雪は、實に綺麗に積つて居た。澤を傳つて目を上に上げて行くと、蝶ケ岳の崩が白い中に見える。道は一ノ澤の左岸の中腹を可成急に登つて行く。汗はダラダラと流れる、眞白い雪の常念が、雲の中から出たり入つたりして居た。道が谷川の岸を通る樣になる時分には、雪がまだらに河原に出て來た。太陽の光線を强く反射する斑の雪の中を、

谷川の水は光の中を跳り流れた。雪は段々增して、案内は小舍の跡に入つて金樌をつけた。スキーは未だ使へない。瀧澤附近に來た時、雪のとぎれが無くなつた。スキーはやつと雪をなめる事が出來た。谷川は段々水が減じて、雪は益々谷を埋めて行つた。ハシタ澤で晝食をした、これから白樺も樅も益々太くなつて、雪の靜けさが林の中に滿ちて居る。谷川の岸の雪は谷の上を被つて、夏なれば岩のゴツゴツした所も、今はなだらかなスロープである。四時頃案内を休ませて、谷川の岸を滑つた、ザラメ雪にしては仲々いゝ。四時過に烏帽子澤が右手から雪の坂をなして落ち合ふ所を夜營地とした。小十は勇ましく崖を登つて木をきりだした。行手には明日越える筈の常念乘越が見える。谷川の兩岸は雪がうねりをなして、水は雪に段をつけて下に下りねば見えない。危ない足取て雪に段をつけて水を汲みに行くと、どの岩もどの岩も、雪がもくもくと積つて、岩の肌さへ見えて居るのは少ない。雪の中から、チョロチョロと、水が流れ出て來る。水を汲んで見上げると、乘越には雪が波の崩れの樣に被さつて居た。この靜さの中に俗なものは皆洗れて行く樣な氣持になつた。天幕は持參の油紙で雪を平にした上に張つた。雪の上には青葉を敷き、其上に毛皮をならべた。日は漸く落ちて、雪がコチコチに固くなつて行くと、一時にあたりは淋しくなつた。大きな焚火が天幕の傍で、ボーボーと雪の谷に音をたてゝ燃えた。赤い火は雪に穴をあけながら案内の顏を照し、天幕を暗にうす赤く浮し出した。自分等はすつかり防寒の用意をして、毛皮の上に寢た。手の下には、青葉の下に石の樣に氷つた雪が白く見えた。靜かだなーと思ひながら手袋を二枚もはめた。どの位ねたのか膝が馬鹿に冷いので目が覺めた。天幕にスキーの影がうつゝて居た、雪の上につさした、スキーに吊したアザラシの皮が微風にゆられて、氷つた毛が油紙をサラサラと撫でて居た。月だなと半分身體を起して、油紙を少しはづした。星が見えた。次に月が見えた。谷川の雪のうねりが月に照されて、雪の坂の上の林が影をうすく投げて居た。自分は白い息を吹いて見ながら懷爐に火をつけて、眞綿と一所に膝に卷いた。

再び寢ようとすると、閉ぢたなぶたに月の光を感じて、一寸ねられない。それにアザラシの皮がサラサラ油紙を撫でて、靜り返つた鼓膜をいぢ悪く動かす。アルコールランプを少しの間燃して暖を取つて無理にねた。

三月二十三日。四時に起きて焚火をして、夜の白むのを待つた。乘越は星の下に白く見えた。淋しい谷に、チツチロと云ふ鳥の聲を聞いたと思ふと、次第に空が白んで、飯が炊ける時分には、日がパツとあたつて來た。午前八時に夜營地を出發した。谷は全く雪に埋められて、白樺さへ脊が大變低い、水は一寸目につかない。夏の樣な暑さを感じて來た。目を燒く恐れがある。常念の乘越を眞近に見る廣い〳〵スロープで、夏シャツ一枚で滑つて遊んだ。實にいゝ雪だと、風をきりながら叫んだ。まるで滑つて呉れと今迄スキーの來るのを待つて居た樣だ。これから上は段々急に谷が狹くなつて、分れて行くと谷がそつて來る樣に思はれる。上窪下から乘越を仰いで、夏の針ノ木を思ひ浮べた。初めはウェンデをしながら、電光形に登つたが、遂にはそれも出來なくなつた。雪は波形をして、固くなつて來た。急な所を横登行をやりながらしばしば休んだ。途中で菓子を食ひながら、一本の支える木もない急な斜面を下まで見渡すと、自から愼み深い心になる。雪巡禮の一歩一歩は、乘越に近づいて行つた。常念の頂上への斜面は、雪が飛ばされて仕舞つて、岩が露れて居た。十一時の豫定が遲れて十二時に乘越に着いた。上窪下から一時間以上掛つて居る。スキーを偃松の上に置いて、岩に腰を下した。赤岩嶽から穗高まで眞白だ、唯槍ケ岳のみ其中にポツリと黑い。音もない。風もない。云ふ事も無ければ考へる事もない。案内が「美しい」と云ふのが聞えた。偃松を焚いてパンを噛つた。今登つて來た方には淺間小淺間や、眞白な戸隱が見えた。靜かに話をしながらパンを火にあぶつては食つた。スキーから雪がとけて岩の上に流れて居る。尾根は總て雪がない。スキーで中房へ越えるのは、駄目だと思つた。再びスキーをつけて、槍ケ岳を右に見て一の俣に降る。大きなボーゲンを畫いて木の間

を縫ひながら十分許りで降りた。雪は一丈餘もあらう、河は殆んど埋つて居る。針葉樹の下を通つて行くとハラハラと雪が木から落ちて來る。中山の登りは、スキーをぬいで鑢の跡を登つた。上に着いて休むと、一時に汗が引込んで、風が木々を渡つて行つた。中山の下りは急で、雪は實に好い。プルッフルシュネーに近い。スキーから雪煙が上つて、音の無い谷にシュー〳〵と云ふ心よい音をたて〳〵風をきつて下りた。初めはステンボーゲンを猛烈にやらねばならなかつたが、途中から直滑降にうつつて、木が後に飛んで行く樣に見えた。二俣の池で焚火をして飯を食つた。水を探すに骨を折る位、一面の雪の原である。これからはスキーは、雪の小山を上つたり下つたり、殆んど默つて居ても滑つて行く、夏の事を思ふと其道と云ひ骨折と云ひ、馬鹿氣たものだと思ふ。案内は上の方に見える棧道をさして笑つた。二俣のドーの小舍の中は、池の樣に水が溜つて居た。道がにこゝは谷川が流れて居る、いよいよ赤澤も近い。川の兩岸には雪の大だんご小だんごが一面に竝んで居る、一寸スキーは困難を感じた。やがて、赤澤の岩小舍が右手に見えた。勿論スキーは谷の上を歩いて居る。夏來てはこれが雪で埋ろうとは想像もつかない、驚く程平坦な坂である。谷の兩側は段々高くなつて、ボーゲンを盡いたら、さぞいゝだろうと思ふスロープが谷を埋めて居る。しかし今の雪では固過ぎる。日は漸く暮れて忽ち雪は氷の樣にかたくなつた。六時に全く雪に埋つたアルプス旅館を掘つてはい込んだ。幸に雪は入つて居ない。蠟燭をともして、焚火をした。これだけ雪に埋つて居れば、中で焚火をしても、大丈夫だと安心した。煙の出口がないのでポロポロ涙をながしながら、雪を溶して湯をつくつた。米もあつた。ふとんもあつた。今晩は天國へ行つた樣だと、思ひきり足を延してねた。

三月二十四日。目を覺すと曇つて居ると云ふ聲がする。小十が天候を見に出たが、危いと云ふ。がつかりしながら、雪の上に這ひ出した。槍澤は曇つた空の下に靜り返つて居る。早い雲の往來を見てこれは駄目だと思つた。無理をしてはいけないと第一に考へた。案内の樣をはいて、槍澤を登つて行

つた。鑽の歯はザクリザクリと雪に音をたてゝ喰ひ込んだ。何だか自分が蟻の様に小さい様に思ひながら、急いて登つた。一箇所熊の足跡が谷を横ぎつて居た。槍が一寸見えた。成程雪がない。天氣さへ好ければ、一日かければ槍は樂に登れそうだ。虚榮心で來る連中でなく、心から槍の眺めを拜しに來る人なら、きつと莊嚴な景色が見られる。僕等は又來るとしようと口惜しがりながら、顔だけは平氣を裝つて、すた〳〵と大股に引返した。遠くに小舍の頭が一寸雪の上に見えた。小舍に歸ると皆待つて居て呉れた。飯を濟して午前九時に出發した。スキーをはいて忽ち小舍を後に滑つた。谷を降りながらヤーホーと聲をかけると上の方からヤーホーと應じて、スキーが雪をする音が聞えて來る。休んで木を見あげると、木鼠がガサ〳〵と木を登つて遊んで居た。二俣のドーへ來て、顔を洗つて居るうちに案内がやつて來た、横尾の屏風岩を見る頃雨が降つて來た、雪がザラメの爲にスキーに少しも附着しない。段々廣い原に出て來た、今は廣い雪の原の上を、遙か彼方に目標を撰んで、一歩に一間位づゝ滑走して行く、右手には凄い様に奇麗な穗高を眺め、行手に霞澤、六百、德本の山々が上の方は雪と見えて白く霞んでゐる。柳はもう赤い芽を吹いて居た。宮川の池の可成手前の木蔭で晝食をつかつた。雨などは眼中に無くなつて、焚火にあたりながらゆつくり飯を食つた。宮川の池を訪問して馬小舍の所へ出ると、スキーの跡があつた。かねて知合ひのウィンクレル氏だと直ぐ思つて、會へるかも知れないと道を急いだ。雪は非常な減じ方で、此處だけならスキーは無用の長物だと思つた。スキーをする雪ではない。鑽の雪だ。溫泉は雨の中に固く戸を閉して居た。傍の小舍で犬が吠える。入つて見ると常さんが居た。「これは珍らしい人が來た」と心よく迎えて呉れた。ウ氏は今朝平湯へ行つたそうだ。乘鞍へ行つたのだ。時刻は未だ午後四時前だ。爐を圍んで盛んに話がはづんだ。犬がおびえて居る。

三月廿五日。今日は、こゝて遊ぶ事にした。湯の元へ行つて岩の中の溫泉に浴すると、ぬるくて出

る事が出來ない。晴れ渡つた朝の空氣を吸ひながら、河の流れを聞きながら、岩の浴槽で一時間もつかつて居た。十時頃から燒岳へ散歩に行つた。燒の方から見た霞澤や六百山は仲々奇麗だ、殊に木の間から見た大正池と雪の霞澤の谷は美しい。晝めしにビスケットを噛つて居ると雨になつた。燒のラバーの跡には、雪が層をなして見える。小舍に歸つて常さんと小十の獵の話を聞いて居ると、一寸もあきない。夜に入つて雨は吹雪に變つた。戸を打つ吹雪の音がサラ〳〵と聞える。爐には大きな木がもえさかつて、話はそれからそれへと絶えやうともしなかつた。

三月廿六日。吹雪は大分強い。充分用意をして午前七時半に出發した。いゝ雪だ。本當に粒の細い水氣のない雪だ。理想的のプルッフルシュネーだと感じながら、吹雪の中を德本に向つた。すつかり用意をして吹雪の中を歩くのは、氣持のいゝもので且痛快なものだ。德本の下で焚火をした。時々パット日があたると、木々の影が雪の上にうつす、何と云ふ美しさであろう。スキーは例の通り谷を一直線に登つて行く、夏の道は左にある。頂上近くでいよ〳〵風が烈しくなる、溫度は大したものでなく、露氏の零下四度を示して居た。まつ毛は氷つて白い。德本の頂上の道より一寸南に出た。東側には雪が二間も被つて居た。下りは非常に滑りにくかつた。古い雪の上に新しい雪が乘つて居るので、皆なだれて仕舞ふ。途中吹雪の中で焚火をしたが少しも暖くなかつた。手袋を一寸ぬぐともう氷つて入らなくなる。岩魚留に近くなつたら大變暖くなつた、岩魚留で晝をつかつてすつかり休んだ。もうスキーは用ひられない。午後三時に岩魚留を出發して清水屋に着いた。

針ノ木峠を經て劍岳に登る

村瀬圭

一　大澤小舍へ

暑い、たまらなく暑い、行つても行つても息ふべき樹の蔭とてもない。見渡す限り一面の稻田許りだ。靑い浪がゆらり〳〵と打つて居る、併し其の上を吹いて來る風はムイ〳〵とする。行手には鹿島槍續きの峯々が屛風のやうに連なり立つて居る、其頂には鼠色した雲の幕がおりて居る、それが今山に入らうとする私達の心を少なからず焦々(いら〳〵)させる。

『旦那、天氣はへいかたまつたゞ案じることはねえだ』

先達の北澤はさう云つて請合つてくれた、まあ安心して居よう。

重い荷物を脊負つた人夫達の足はのろい、祖父江さんと私は彼等を遙か後に見捨てて、スタ〳〵と歩き出した。

面白い姿をした道祖神の石像が道ばたに立つて居る、祖父江さんが早速にカメラを向ける。

野口の村を過ぎると間もなく鹿島川に架せられた長い橋を渡る、磧には白い丸石がゴロ〳〵して、それに日がかん〳〵と照り付けて見るからにまぶしい。

私達はズン〳〵と進んで行つた。いつの間にやら松林の續いた山路になる。

『旦那方どちらへ行くんだネ』

突然、路傍の木の蔭に腰をおろして休んでゐた村人らしいものが聞いた。

『針木の方へ』と私は何のこだはりもなしに答へて行きかけた。

『旦那、それぢや路が違ふだ、これは高瀬入ぢや』

おや〳〵、知らぬ間に籠川入へ別れて行く所から四五町も來過ぎて仕舞つてゐた。其くせあの別れ途の木標の字は確かに讀んで來たのであつたのに！再び暑い路をスタコラと引き返して行つた時には遲れた人夫達も早ややつて來た。

村の出端づれに辻堂がある。其處に一寸休憩する。黒部の「主（ヌシ）」と云はれた品右衛門老人は今は山入をやめて此處に茶店を出してゐる。私達の休んでゐた時息子の兵三郎が平の小舍の修繕に行くとて出掛けるところであつた。あの力士のやうにデップリとした——イヤ一時は村角力の關取をして居たさうだ——身體でよく山に行けたものだ、馴れはえらいものである。

三十分も休んでから出發、愈々籠川入の路へ進んだ。

針木峠は天下の險路と誰かが云つたのはいつの昔のことやら、今では峠下の雪渓の入口まで立派な林道が出來てやす〳〵と行ける。昔は籠川磧の路もないところをやみくもに遡つて行つたもので、大きな石の磊々（ゴロ〳〵）した間を歩いたり、絶壁の裾を傳つたり、又膝を沒するやうな深い早瀬を幾度となく横切つたものだ。それに較べると今は昔の面影もない位樂な路だ、從つて眞の登山客（マウンテニーア）には興味索然たる感がないでもない。

併し樂になつたとはいへ、急峻胸を突くやうな針木の大雪渓や、岩を噛んで矢のやうに流るる黒部川の激流や、さては其處に危く架せられた原始的な籠渡などは、まだ〳〵馴れぬ旅人を脅やかし心膽を寒からしむべく充分であらう。イヤ話がとんだ先まで行つてしまつた。後戻りをせねばならぬ。

辻堂を出ると間もなく路は松疎ばらな高原の中に入つて行く、鳴澤岳や岩小屋澤岳が行く手に城壁のやうに立塞がつてゐる。早やあちらこちらに白樺が見え出す、やつと高い山に入つて來たなと云ふ感

じがした。

松原盡きて一面の草原、薄や萱が生ひ繁つた中を分けて行く。草いきれて氣息が苦しい汗がたら〳〵流れ出す。その内に路は次第に籠川の縁に出た、美しい水晶のやうな水が旋律的な音を立てて亂石の間を走つて居る。

私達は乾き切つた咽喉をこの氷のやうな冷たい水で濕した。一息入れると汗はすつかり引いてしまつて、始めてすがすがしい心持になることが出來た。

此處から路は山の根を廻つて次第々々と奥深く入つて行く、いくつもいくつも澤を渡る。どこかで玉作の一行に追ひ附いた、彼は東京の客を案内して扇澤から祖父ヶ岳に登り鹿島槍から八峯の縦走をするのださうな。其扇澤の「ドウ」に來たのは午後三時頃でもあつたらうか。其處で御互に無事の登山を祈りつゝ玉作等は瀧のやうな瀬を作つて漲り落つる澤の右岸をグン〳〵と登つて行つた。私達も木立の繁つた籠川路を進んで行くと、いつしか川は遙か脚下になつて、路は高く登つて行く。谷は次第に狹まつて、密樹頭上を蓋ふやうになつた、もう日は山の彼方に落ちて暮色蒼然としてあたりに迫つて來た頃、やう〳〵豫定の大澤小舍に着いた。

對岸には蓮華岳が頭を壓するやうに聳えて居る山腹には白い綿のやうな雲がふわり〳〵と心ありげに動いてゐる。大澤は澤と云ふより細い瀧のやうな斜面をして籠川に落ちて居る。

行手にはスバリや針木が其奇怪なる峯頭を美しい夕空にくつきりともたげて、針木の雪渓もマヤクボ澤のあたりが銀の布をかけたやうに輝いて見える。明日の天氣も先達の請合つた通り大丈夫らしい。

大澤の小舍は水に不便で、一々ズツト崖下の磧まで汲みに下りて行かねばならぬ。が、以前磧の石の間に露營したことを思へば丸で御殿のやうなものだ、四方は石で疊んだ壁、屋根と床とは厚い板張

り、山の小舍として申分なからう。

この日人夫の一人が途中で大變なことを仕出來かした、乳茸とかいふ菌を生食して中毒を起し、岩小屋澤のほとりでへたばつてしまつたさうな。て、夕食後闇の山路を迎ひに行かねばならなかつた。八時頃になつてやつと連れては來たが、明日の同行はとても六ケ敷いといふので、已むを得ず先達を附けて大町に送り歸へし、代りの者を連れて來させることにした、おかげで其翌日は空しく小舍に滯在せねばならぬことになつた。

二　針木峠の雪渓

『美しい』

『立派な眺めですネ』

私達はなつかしい針木峠の雪渓にカンジキを踏みこんで、峻嶮な雪路を登りながら時々後を振り返つて見た時、眼下に開展して來る籠川の深い谷や、其向ふに聳えて居る祖父ケ岳續きの連嶂を見てかう叫んだ。

雪渓は次第に勾配が急になつて來た。

『峠はどこなんですか』

祖父江さんは虹のやうな氣息を吐きながら尋ねた。

『あの上の雪が棚のやうになつた處が見えるでせう、あそこが峠です、あッ御覽なさい、雪の上に人が居ます、さあ、もう一奮發です』と私は雪をつかんで頬張りながら答へるのであつた。幾度も幾度も立ち止まつて息を入れながら私達はとう〳〵雪渓を登り了ふせて峠の頂上に立つことが出來た。其處には金澤七高の職員生徒が二十名許り越中の方から登つて來て休んで居た。

『ヤー先生ぢやありませんか』

突然叫ぶものがあつた、私は其聲の主を見るとそれは越中の平藏であつた。彼はこの人達の先達をして來たのであつた、相變らず頑丈で元氣に滿ち〳〵た顏色をしてゐる。

雪田の一端に立つて今登つて來た方を見ると、脚下眼もはるかに銀の瀧を懸けてゐるのは大雪溪、ずつと下の方に黑い豆のやうに動いてゐるのは私達の人夫であらう。

『よくこんな所を登つて來たものだなー』

私達は今更驚嘆の眼を見張つて雪溪を見下してゐるのであつた。

當面の針木岳からスバリ、赤澤、岩小屋澤に續く大巖壁の向ふには、鹿島槍以北白馬連峯に至る山々が鮮やかに日を受けた姿を見せて居る。

私は祖父江さんを促して峠の向ふ側に登つて行つた。

何たる壯觀！眼前にひろげ出されたる名山大岳の一大パノラマ！南方は槍、穗高から北は藥師岳に至る日本北アルプス中心の山々は、今正に夏の眞晝の陽を受けて水色のヴェイルを通して見るやうに淡く光つて居る。

O dread and silent mount! I gazed upon thee,
Till thou, still present to the bodily sense,
Didst vanish from my thought: entranced in prayer
I worshipped the Invisible alone.

（あはれ凄くも靜けき山よ、われはしも汝が
姿を眼に見つゝも心より消ゆるまで
汝を見つめて恍惚の祈り

われはひとり大御神を讃へまつる）

峠の端の草の山に腰をおろし、脚下に無聲の濤を打つて近く又遠くうねる山々の景色を眺めながら我を忘れて恍惚（うっとり）してゐた。

不意に人聲がして來たのでわれに歸ると、私達の人夫もやうやく今登つて來て平藏等と挨拶を交換して居る所であつた。

彼此して一時間程經過した、七高の連中は平藏等と針木の雪を轉ぶやうにして信州側に下つてしまふし、私達も今夜の露營地指して灌木や草の間にジグザグに隱現してゐる針木澤の路を降り始めた。

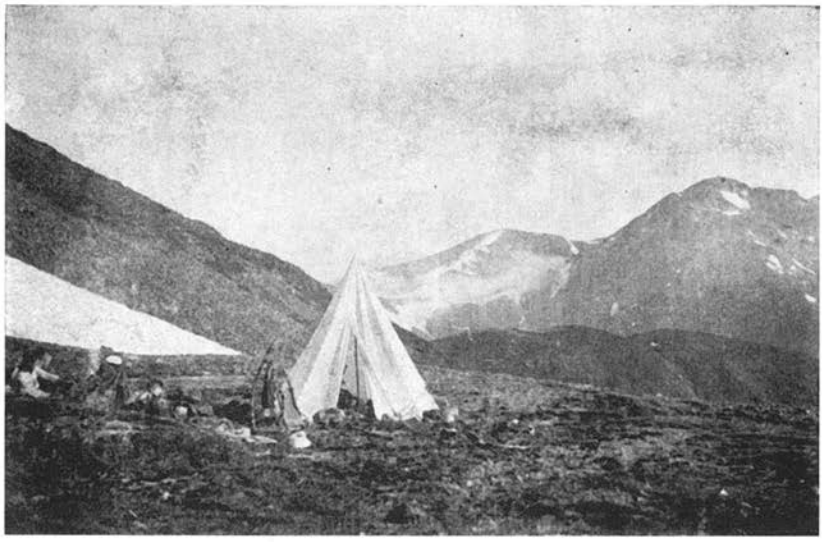
『旦那、さあ來ましたに』と云つて先頭の人夫がどつかと其の荷を卸ろしたのは針木澤のほとり、十坪程の砂礫地、四方には樹の繁つた高い山の裾が鼻先を壓するやうに迫つて來て居る袋のやうな地であつた。澤の水も何時とはなしに大分太くなつて、すぐ側を潺湲の音を立てて流れてゐる、此處を大澤の野營地と云ふさうな。

夕飯の仕度をする煙が、狹い谷間から鐵蒼色した夕空にスイ〳〵と立のぼるかたへ、ピラミッド形の天幕がほのじろう河原の灌木の間に張られたのは、それから間もない事であつた。

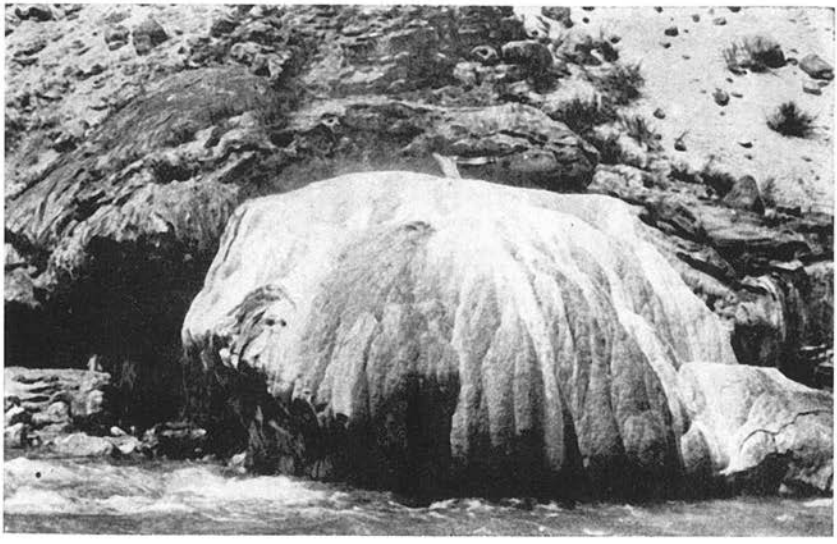
三　黑部川を越ゆ

夜が明けた、狹い谷間の夜が明けた。澤を走る水の上には朝靄がぼーつと湯氣のやうに立つてゐる。畫室（アトリエ）のスカイラインを見るやうな空は美しくも澄みわたつて、今日も亦天氣の好いことを知らせてゐる。溪谷の冷い朝の空氣はひし〳〵と身に迫つて來る。小鳥が何處かで美しい音をたてて囀つてゐる。實にすがすがしい氣持がする。朝飯をすまして急いて出發。

今日も暫くは澤傳ひだ、針木澤の岸をあちらこちらに移り渉つて行く。下るに連れて谷は次第に開



硫黄澤乘越より西北望　（濱谷泰次郎氏撮影）



花の湯より於ける俣湯　（濱谷泰次郎氏撮影）

豁になる。

牛小屋澤に近い處て右手の高い峰の巓から澤まて一氣に押し出した大崩れの跡は見るからに物凄いものてあつた。人夫は此處を「空澤」と教へて呉れた、水の破壞力の恐ろしさがまざ〳〵と見られる。大南澤の合流するあたり磧は餘程廣くなつて此處彼處に枯れた針葉樹が骨のやうに白くさらされて立つて居る。振り返ると連華岳續きの峰々が青い空に鮮明な輪廓を表はしてゐる。向ふの山間には立山連峰が間近に仰がれる、併し其偉大なる山容も此處からは甚だ平凡に見えた。

俄に眼界が開けて一大深谷が前に表はれて來た。蓼々の水聲が耳に聞えて來る。

『とうどう黒部に出たね、もう澤傳ひもお仕舞ひだ』

『どうもへい黒部は恐ッかねえ川て、まだ水上を探ぐつたものもねえだ、とても深い谷てへい』

大きな虎杖の叢を通り抜けると、そこは高い岨を成して脚下には黒部の本流が石を流し岩を動かしつゝ矢を射るやうに流れてある。

何といふ大きな深い谷であらう、どちらを見ても樹の繁つた大きい山の裾が幾つも〳〵一齊にこの谿目がけて扇の骨のやうに放射して居る。

『昔は黒部を越すと岩魚が脚につきあたつた程ゐたといふじやねえか』

『今てもずつと上手の方にはそんな所があるげな』

私達はあぶなつかしい籠渡を避けて其の少し下流の水の淺い箇所を撰つて徒渉しかけた時人夫達はそんなことを云ひ〳〵して居た。

ともすると早い瀬に足をとられさうになるのを力杖でやつと支へながら辛くも渉り了ふせて登りついたところは名高い平の小舍であつた。

黒部の「主」の品石衛門老人が四十幾年の間毎年只の一度もかゝしたことなく山入をして岩魚釣に暮

したといふ其の平の小舍も彼が隱退と共に荒れ果てゝしまつた。あたりには丈なす笹や虎杖が繁つて籔のやうだ。そして大きい方の小舍はグッシャリと壓し潰ぶされて倒れて居る。昨年はこの附近に羚羊の骨や腐肉がうづ高く積まれてあつて寄り附きも出來ない位惡臭を放つて居たが今年はそんなことはなかつた。

今一つの小舍には兵三郎が二人の岩魚釣りと共に來て居た。彼等の話によると岩魚も以前程とれなくなつたさうだ。私達は在り合せの岩魚を燒いて貰つて中食を濟まし少し休憩の後小舍を辭して前進を續けた。

蟬時雨降るブナ林の下につけられた樂な道を越中澤に沿ふて溫谷峠を越え「慶應谷」などと僭越な名を冠らされた五色原に續く雪溪を脚下に見つつ佐良峠下の露營地に著いたのは日暮れに程もない頃であつた。

其夜天幕の中は流石に身に浸みるやうな寒さで、短い夢は屢〻破られた。私はふとその昔佐々成政が數名の從者を連れて雪にこの峠路を越した光景を想像して見た。

只見る山も谷も一面に白皚々たる雪で蓋はれて路もない處を遙か高い峠の峯を目標に篠笠や雪かんじきで身を固めた一團の武士がザク〳〵と雪を踏んで行つた光景はどんなに勇壯なものであつたであらう。

四　五色原の曉色

翌日は出發前に露營地の直ぐ上にあたる五色原の曉色を探るべく早起した。

夢の逍遊！　五色原の朝景色は全くそれであつた。

日本北アルプスの高い峯々に取り圍まれて、海拔九千尺に近い高所にあるこの大原は方二里もある

であらうか、佐良峠の峯續き南方に高まつて西から東へなだらかな傾斜で廣がつて其末は黒部の深い谷に落ちて行つて居る。

原は一面に偃松の濃綠と、殘雪の純白と、そして高山植物の美しい色彩とで點綴されたさながら神仙の遊樂地である。五色ヶ原とは何人が名づけたか知らぬが、如何にも相應はしい名である。

佐良峠から南の方に登つて行くと間もなく此處に達する、西の方は削り取つたやうな恐ろしい絶壁を成して遙か下には湯川や立山溫泉の新湯が樹の繁みの中に見える。

私達が此處に著いた時は朝霧が原の上一面にかゝつて居た。やがて日が登つて朝の最初の光を浴びせかくると霧は次第に薄らいで行つて美しい原がぼーつと現はれ出した。

斑々たる殘雪からは水蒸氣がもや〳〵と立ち昇りこれに陽が美しく反射して虹のやうな色彩を呈した。

秋の空を見るやうな澄み切つた大空は刻々に桃色からヴァイオレットに變つて行く。

すぐ間近の藥師岳や赤牛岳は今正面に曙光を受けて深い眠から醒めたやう。東方の針木や蓮華の嶺には銀色に緣取られた雲がフーワリと浮いて居る、藥師の左には黒部五郎が其端麗な姿を表はして、雲の平のテーブルランドが堤防のやうに一文字を引いてゐる。其向ふに美しいコバルト色して悠々迫らざる態度で聳えて居るのは笠ヶ岳だ。

野口五郎や三ッ岳から烏帽子に至る山々は光線の工合で黒とも紫ともつかぬ色をして其の裾の方には淡黄色の薄靄が刷毛でぼかしたやうにサーッと棚引いて居る。其の連嶂の上から頭をニュッともたげてゐるのは日本北アルプスの重鎭槍ヶ岳！　その鋭い穗先に日がチラと射した。「わが行く處かの巨人あり」の句を思ひ出させる。

何處かの谷間で鶯がのどかに囀づる聲が聞えて來た。

五　別山へ

それから一時間程して私達の姿は佐良峠の北に聳ゆる急峻な岩峯――鬼ヶ岳――を龍王岳に向つて攀ぢつゝあるのが見出された。顧みると五色原は遙か眼下に青い絨氈を布いたやうに見えた。

鬼ヶ岳を越して向ふに下ると龍王岳はすぐ目の前に頭の上からのしかゝるやうに聳え立つて居る、其形は丁度露西亞のモスクヴにあると云ふ世界一の大鐘のやうだ。そして龍王の右には御山澤を距てて立山の雄山がピラミッド形してざく〳〵石の荒い肌を表はして天そゝり立つて居る、絶頂の社殿は白ペンキでぬり塗つたやうに光つて居る。

龍王岳の斜面は峻直削つたやうな奇怪なる岩石の一大堆積である。私達はそこを目がけてひた登りに登つて行くのであつた。やがて其の肩部に達しそこから左にからんで行くと浄土山に續く鞍部に出た。

今夜は浄土と雄山の間の鞍部なる一の越あたりで夜營する豫定であつたのを急に變更して浄土から直に室堂に下りて其處に一泊することゝした。

室堂の一夜は例によつて不愉快なる一夜であつた。騒々しい道者の群れと蚤とに安眠を妨げられてまんじりとも出來なかつた。

翌日の午後三時頃私達は別山の絶頂、殘雪に封じられた硯池の近くの凹地に天幕を張つた。劍の恐ろしい姿はこゝから手に取るやうに見える。

この日は午前六時に室堂を出て雄山に參拜し大汝、富士折立を縱走してこゝまで來たので、天氣は昨日と同じやうな快晴で、空には眺望を阻む程の雲とてもない。北アルプスの峯々は云ふに及ばず遠く赤石、白峯、駒、八ヶ岳から淺間戸隱妙高に至るまで山々は歷々と指呼することが出來た。三國一

の富士の山も亦其秀麗な姿を雲際に見せて居たし、又西方には加賀の白山が其殘雪の條理多い瑠璃色の肌を巨鯨のやうに横へて居た。

夕方になつて東京の人が三人やつて來て私達の隣りに天幕を張つた。私等と同じやうに大町から針木越をして來たので、明日は平藏谷から劍岳に登るのだといふ。海拔九千尺の高所にある一軒屋は俄にお隣りが出來てしまつた。私は砂漠を横斷する隊商が「オーアシス」で夜營して居る時に又一組の隊商が來合せて御互に抱くてあらうやうななつかしみを覺ゆるを禁じ得なかつた。

夕方天幕の外に立ちて高山落日の景色を見た。

富山の平原は今薄い夕靄のヴェイルに包まれてゐる。それを透して神通川や常願寺川の水が銀のリボンのやうにうねつて見える。

先っきまで大空と見境もつかぬやうな藍色をしてゐた日本海は夕映に空が輝き出すと同時に水平線が明瞭として來た。そして海の色は刻々青黒く變つて行つた。

遠く微かに横つて居る山影は能登半島さうな。富山灣の浪打際が白く光つて居る。

更に眼を轉じてすぐ前の深い〳〵谷を見ると劍澤の大雪渓を距てゝそこに天そゝり立つ劍岳の姿こそ觀物である。只見る險惡醜怪な岩石の一集團が谷一面に根を張つてのさばつてゐる。

絶頂は稍圓みを持つてゐるが、其左右に張つた山稜は劍を植えたやうな鋭い岩峯が鋸齒狀をして嶮々天に冲してゐる。その樣嚴肅峻烈容易に人の近づくを許さぬ、正にこれ偉力其のものゝ表現である。

今夕日が斜めに其光りをこれに向つて沐びせかけると醜怪なる岩石は無氣味な赭黒い色をして愈々恐ろしく見える。只長次郎谷や平藏谷の雪のみが美しい紫色に輝いて居た。

突然毛勝岳の方の谷間から灰色の霧が盛んなに起つて來て山頂めがけて吹きあがつて行くと、鋭い岩峯は霧の中に隱現して怒濤が岩に激するやうな壯觀さを見せる。

私達は日が全く暮れ果てゝ闇があたりを包んでしまふのを忘れてこの大觀をじつと見入つた。

六　劍岳に登る

昨日人夫等は淺間山の噴煙が南の方に流れて居たので天氣が變ると話し合つて居たが、其豫想を裏切つて今日も亦相變らずの上々天氣であつた。私達は幸運を喜びつゝ早朝夜營地を出發して別山尾根を縱走して劍へと向つた。

東京の人達は私等より先きに出發して劍澤の雪渓を下つて行つたのが下の方に小さく見える。私達と平藏谷の頭で一所に出會ふと云つて居た。

尾根を西に傳つて別山乘越に來ると三角點の櫓の立つた一峯がある。地圖に鶴ヶ御前とか西五稜とか記してあるのは此處であらう。脚下には劍澤の雪渓がはるか東の方に果てもなく走つて居る。其の上には黑部別山を前景として鹿島槍から針木あたりの連嶂が一目に見はるかされる。雄大なる眺だ。

この峯の西手を捲んで行つて偃松や岳樺や深山はんの木が生ひ繁つた中を降りて行くと劍岳のすぐ下にあたる靑い草原の斜面に出た。まるで靑絨氈でも布いたやうな美しい地で、眼前にそゝり立つた岩兀々の恐ろしい劍とは妙なコントラストを呈して居る。

それから鶴ヶ御前と劍の本岳とを結び付くる鞍部のやうな尾根に取り付いて今にも崩れ落ちさうな岩の上を傳つて行くと平藏谷の頭の左方にあたる大きな岩峯の下に出た。仰げば岩壁は刀して削つたやう、こんな所がどうして登れるかとあきれて見上げてゐると「旦那、これからが一寸骨の折れる處だ」と云ひながら先達はその岩角を銳く西の方に廻つて裏手に姿を隱くして行つた。私達も其後を追つて岩角まで登つて行つたが、思はず其處に立ちすくんで、恐怖の眼を見張らねばならなかつた。其處は見るからに恐ろしい斷崖の縁で、私達の前に深い深い谷が口を開いてゐるのであつた。

谷を距てた向ふには劍岳の西方に張つた尾根の一部が鋸の齒のやうな姿して截然として屹立し人を脅かしてゐる。先達は今其の斷崖の上部に沿つて蟻の戸渡りと云つたやうな箇所を岩角につかまりつつ横切つて居た。足許から崩れ落つる岩片はガラ〳〵と音を立てゝ底も知れぬ谷に落ちて行く。頭のすぐ上には大きな岩が出張つて、うつかりすると頭をぶつ付けて其反動で飛ばされさうだ。

其處を通る時には流石に私達の顏色は頗る緊張したものであつた。やつとの思ひで無事に通り越して少し攀ぢると先刻の削つたやうな岩巖の上部に出た。つまりその裏手を廻つた譯になる。そして其處は早や平藏谷の頭であつた。傍の黑い岩の表面には

「富山師範、同行十八名、大正四年七月廿八日」

と大きな文字が白く削られてあつたのが目に付いた。

今朝一足先きに出發した東京の人達も私達の著く少し前にやつと平藏谷を登り了ふせゝ其處に休息してゐた。もう季節が少し遲いので雪溪の諸處にクレヴァスが出來てゐて幾度も膽を冷やさせたさうである。

平藏谷の上からは狹い岩の間を遮二無二に攀ぢて行くと其向ふに一寸足がかりもなさゝうな一枚岩がある。それを橫傳ひせねばならぬ。以前は綱を用ゐて通過したさうだが今は岩面にあゝ僅かの裂目へ足をかけて全身の重みを其斜面に托して、丁度宮守が壁に取りついたやうな姿で傳つて行くのであつた。其距離はほんの二間もあつただらうか。しかし渡り終つて振り返ると其一枚岩は十數丈下の雪溪の上までまツすぐに壁を立てたやうに續いてゐた。よくあんな處を越したものだと今更戰慄を覺ゆるを禁じ得なかつた。

ふり仰げば劍の絕頂にもう手の屆きさうな處にある。こゝからは只崔嵬たる岩石を上へ上へと移つて行けばよかつた、只岩の中にはグラ〳〵と動く奴があるので、うつかりすると後續者に飛んだ危難

を與へないとも限らぬ。

もう偃松も跡を絶つて青いものは殆んどない、只岩ぶすまがこびり付いた鼠色の岩がある許りだ。大きな岩屋らしいもの丶傍を通り過ぎると間もなく頂上三角標柱の下に達した。時に正午を過ぐる十分、別山から實に六時間以上を費したのはあまり早い方ではなかつた。

頂上からの眺めは今更くだ〳〵しく云ふに及ばぬ、大空には一片の雲影もなかつたので見得る限りの山々は悉く双眸の中に收められたと云へば充分であらう。

私は岩角の一端に腰掛けてこの雄大なる景色を心ゆくまで見入つた。

其處には煤煙と塵埃とで汚れた空氣はない、自働車や電車の走る騒々しいどよめきもない、只清新な大氣の浮動する許りだ、そして「嚴肅」と「沈靜」とが一切を支配する。眞の自由、快活、眞實を求めんとするには高山の頂を措いて何處にあらう。

'Then first and chief sole of Sovran of the vale!
Oh, struggling with the darkness all the night,
And visited all night by troops of stars,
Or when they climb the sky or when they sink:
Companion of the morning-star at dawn,
Thyself earth's Rosy Star, and of the dawn
Co-herald! wake, oh wake, and utter prais!
Who sank thy sunless pillars deep in earth?
Who filled thy countenance with rosy light?
Who make thee parent of perpetual streams?

（汝こそは谷の大君、無上、無比、無双なれ。
あはれ夜もすがら闇と戰ひつ
また夜もすがら星の群に訪づれられて
空を星の攀づるとき、或は沈む時
曉にはみ空に明星の友となり
地上にては汝自ら薔薇星、又夜明けには
曉の先驅者。醒めよあゝ而して讃へよ！
誰か汝が日光受けぬ柱を深く地底に沈めしぞ
誰か汝の面を薔薇の光澤もて充たせしぞ
誰か汝を盡きぬ流れの父母たらしめしぞ。）

× × × × × × × × ×

今日は室堂まで歸る豫定であるからあまり遲くなつてはと先達に促がされて、一同頂上を辭し、歸路を長次郎谷の方にとつて下り出したのは二時に近かゝつた。

急峻な雪渓をカンジキの助けて一瀉千里の勢もて驅け下り、劔澤の出合まで來るには一時間程しかゝらなかつた。長い〳〵劔澤を登り詰めて夜營地へ歸つた時ははや四時に間もない頃であつた。急いで後片付をして直に室堂に向つた。

さらばよ、わが劔岳！私達がお前の峯頭に再び草鞋の痕を印するのはまた何時の日であらう。永遠に健全てあれ。（大正七年）

石狩川上流の旅日記より

竹内亮

一　雪の北見峠及チトカニウシ

知來別（チカルベツ、チクルベツ）山小屋の生活も四月に入つては、雪こそ深けれさすがに春らしい氣分に滿ちて來た。流れに張りつめた越年の厚氷も跡方なくなつて暖かさうな水が悠然と流れて行く。川邊に立つハンノキの花穗も目立つて來たし、ガンピの梢も際立つて紅色さして來た。日當りのいいせゝらぎには最早エゾノリウキンクヽが軟かな綠葉に黃綠色の蕾を抱き、アイヌワサビの粟粒の様な蕾も、日一日と目に立つて來た。流れにはきつと寂しい黑羽のカハガラスが水沫を浴びながら石から石へピイ〳〵囀づり乍ら飛び歩いて居る。

四月四日。快晴。例によつて前の馬小屋に群がるキバシリやシジウカラの囀づりに呼び起されて外に出たが、今朝の寒氣は又格別で、樹枝は美しく木花し、雪の面には神秘な靄が重苦しさうに匐つて居た。空はカラリと晴れ渡つて、知來別の奥を塞ぐニセイカウシペの大坊主見たいな頂は、カッキリ空と分たれて、左手が眼も痛い位に朝日に輝いて居る。雪面は堅くなつて居るし、この好晴でもあるしするので、前から目論見て居た雪の北見峠突破と、猶餘裕があつたらチトカニウシの頂をも極めて來やうと心に決めて、單身小屋を出たのが午前八時四十分であつた。

谷全體の眼も痛くなる程な雪の反射を浴びて、疎林から燒木のニョキ〳〵立つた開墾地に拔け、一直線にアツルペシュペの俗稱「四の橋」を渡つて右岸の北見峠道を上流へ辿つた。夏でさへ餘り通る人も

ないこの道は、只電柱沿ひに樹林の間隙を行くより策のない處である。シビナイの橋を渡り、舊中越驛逓の廢屋を左に見て、心地のよい堅雪の上を辿つた。(中越驛逓は大正七年秋約十町下流の知來別澤口に移轉した)。

道の兩側にはガンピ、ヤチダモ、ヤマハンノキ等の若木が並木の樣に密生して、枝と枝とは双方からからみ合つて居る。夏ならば長い〳〵綠のトンネルが心地よく續くことだらう。兩岸の高い峯續きには針葉樹の綠が濃い。何鳥か空高くカーン〳〵と鳴き過ぎた。餘り好い日和なので最早雪の面はとけ初めて輪カンジキを着けなかつた足は、一歩〳〵めり込むので可成骨の折れる前進を續けた。額からは汗が滲む。

チュクニウシュベツを右に見る邊からは、森林が可成深くなつて來た。深く浸蝕された溪流は、薄闇から薄闇に水が喚き續けて下つて行く。柱狀節理鮮かな安山岩の壯大な岩壁、辛うじて横過した雪の急斜面、古い伐木小屋の殘骸、こんな物を後にして、十一時半ポンルペシュベの出合の橋迄來た。これ迄の道は川の右岸で、登りらしい登りもなかつたけれども、こゝからは川の左岸を山の中腹に沿うて、ダラダラ坂の上りになつた。對岸は黒い針葉樹林の茂つた切立つた尾根であるに反して、今上つてゐる側はユッタリした疎林の斜面で、道の兩側には闊葉樹の若木が密生して並木狀をなしてゐる。一歩〳〵下に遠ざかつて行く溪流は、何時の間にか水は見えなくなつて、一面に厚い雪に被はれて來た。この邊の雪の深さは電柱の横木迄とゞいて、處によつては電線迄も埋めてゐるので、如何に深いかゞ想像出來る。一寸とした谷を迂回してヒョイと段階を上ると、前方にチトカニウシの氷塊を見る樣な尖頂が、黒い針葉樹林の上に頭をもたげた。

電柱沿ひの道は一度谷に下りて、又ユッタリと上つて居たが、自分は谷で右に登る足跡らしいものが樹林に吸込まれてゐるのを見つけたので、電柱と別れて薄暗い木の下道をとつた。樹下の雪の斷間に

石狩川上流之一部略圖

北海道廳林務課実測ノ原圖ニ據ル山名ニハ新称少ナカラズ

竹内

見出した清流は、乾き切つた喉には大きな慰安であつた。

登り切るとガンビの林の小平で、前方にはチトカニウシの白銀の尖頂が手に取る様に聳えて居た。平が盡きて針葉樹の尾根にかゝつた、自分の前方には始終チトカニウシの尖峯が立塞つてゐた。自分はあのスッキリした優美な山容に、盲目的に引きつけられて行つたが、ヒョイと後を見返つた眼が天鹽岳の白雪の連嶺の、前者とは全然異つた山容にぶつつかつたのは全く思ひがけない眺めであつた。自分は最早無性に嬉しくなつて、今一段高い處から見る山々の壯觀を樂しく想像して、一氣に樹木のない斜面を下り、又針葉樹林の尾根に上つた時は、想像以外の景觀に對する輕い驚きがあつた。それは眼下はユッタリした雪の針葉樹林の斜面をバックにして、北見峠の驛遞の建物があつたことだ。軒迄雪に埋もれて、それでも長閑に青い烟が昇つて、兎に角寂しい乍ら人間の存在を知らして居た。急斜面を家の前迄下つたが中はがヒッソリして、最早何年か書き換へたことのない標札に「苅別驛遞所」の文字を見分けるのは輕い骨折だつた。

白瀧と知來別との間にあつて、いづれにも無人の山路を三里以上も行かなければならないこの家の人々は、冬は牛馬の食ふ燕麥に饑をしのぐことさへあるといふ。それて稀に通行の旅人が一夜の宿りを請ふことがあつても、いつも定つて向ふから斷りを云ふさうだ。それに忌はしい病氣もあるとかいふ噂もあるしするので、滅多に立寄る人も無いと聞いて居る。

勿論自分も訪づれる氣もなかつたので、前を素通してユルヤカな斜面を眞一文字に尾根へ上つた。針葉樹林を拔けると眼前にガンビの疎林を乘せたユッタリした雪の大斜面が北見側に展開した。遠くには白瀧の丘陵が黑い樹林の山をバックにして望まれた。尾根は南に高まつて居てこの位置からては心當てにして居たニセイカウシペは望見することが出來なかつたが、チトカニウシは深い湧別川の水源に根を張つて、白銀に輝く尖頂の三角點の櫓さへ手に取る許り。西には天鹽岳の連嶺が澄み切つた空

に明瞭過ぎたスカイラインを劃して、存在の強硬な主張を體現して居る。最早午后二時である。チトカニウシ登山等は勿論思ひもよらぬことだつた。自分は出來る丈彼女に近よつた位置に立つて觀賞のタイムを貪つた。然しそれも長くは許されなかつた。未だ短かい春の日足は自分を追立てた。驛遞所の前には思ひ懸なく男の子が二人と女の子が一人、絶えて久しい人の通行を驚き顏に目送して居た。

歸路は下になる程甚しく滑るので少しも歩みがはかどらなかつた。オタツニタイオマップの出合に行きつく前に夕暗は迫つた。チトカニウシが夕陽に紅く映えたのも束の間で、最早西には上弦の月がさびしい光をかけ、シビナイの出合でポー〳〵と春の夜らしい梟の鳴聲を聞いた。空腹と疲勞とでグタグタになつた身體を小屋迄運んだのは午後八時半であつた。

四月十日。曇。豫期しなかつた北見峠行きの機會を再び捉へ得た。それも北見白瀧へ越すこと、も一つ是非先に果さなかつたチトカニウシ登等を決行することゝは、この旅行の主要目的であつた。事によつたら露營もするつもりで、防寒具や食料やらでルックサックは可成重くなつた。

午前八時知來別の小屋を出て、又例の電柱沿ひの雪路を行く。この數日の好晴にチヨイ〳〵堅雪を利用して、北見へ越す人もあるらしく、今日は可成の道形がふみつけられて居たので、呑氣な歩みがはかどつたが、ドンヨリ曇つてゐた故もあるかして、先の旅行の時の樣に晴れ〳〵した氣分にはなれなかつた。途中で流に突き出した崖に石楠が、光澤のある濃綠の葉を勢一杯擴げた枝をノビ〳〵とさし出して居るのを見た時は、痛切に春らしい氣分を感じた。

雪面に新らしい杖跡があるのに氣付かないでもなかつたが、ポンルペシュペの橋の先で二人の職人體の男に追ひ付いたことは、この山中では多少豫期しなかつた事件であつた。これから白瀧へ越すのだと云つて居たが、ナマジッカ道伴れのあるよりはと思つて、一寸挨拶してサッサと追ひ越して行く。今度はどこ迄も電柱沿ひのまゝ大迂回をして行つたので、山中の一軒家苅別驛遞所の建物は大分離れて

素通りした。

峠の頂に出たのが正午、實際意外に早着した。何の標杭か深雪に頭丈け出し居る。少し上方のエゾマツの樹下は雪が大分吹き拂はれて、笹の黄色な枯葉が、可成寒い風に音を立てゝイヤ〳〵をして居たのはさびしい景趣であつた。これは後で白瀧で聞いた話だつたが、數年前の春こゝで恐ろしい吹雪に冷たく埋もれて、命を落した可哀さうな旅人の死骸が見出された。檢死の役人は北見側からも、石狩側からも、エッチラオッチラ上つて來た。死骸に惡戲氣があつた譯でもなかつたらうが、丁度國境線に横はつて居て、頭丈北見側に突き入れて居たさうだ。それで兎角の議論はあつたけれど、遂に北見側の役人が引取つて行つたといふことである。

朝からドンヨリした日ではあつたが、今峠の上に立つた時は、チトカニウシの頂には、灰色の吹雪雲が魔の吹息の様に去來して居た。この尾根の堅雪を北へ〳〵へと登れば、あの頂迄は何でもないことは兼ね〳〵聞いても居たし、先の旅行の時に充分の見當もつけて置いたが、この模様ではどこか薄氣味が惡くなつて、今日は登山を見合はせて兎に角白瀧迄下ることにした。

可成樹林の深い間を又電柱傳ひに、雪で足場の危險な山腹を傳つて行く。下は湧別川の深い〳〵溪谷で、針葉樹林の厚い故もあらうが、石狩側に比しては遙かに不氣味な暗い氣分の景觀であつた。その内道の大迂回點に來たが、自分は電柱傳ひに急斜面を眞一文字に辷り落ちて谷底に下り、又小高く登つて山腹を行く内、いつの間にか小道が盡きて平坦な道になつて來た。樹木も闊葉樹の若木が多くなつて、人里も近づいたらしいのに安心して、それでも可成はさびしい林の路を過ぎて、行手に燒木のニヨキ〳〵立つた開墾地を見た時は嬉しかつた。その内に農家もチラホラ見えて來る、長いこと憧憬して居た白瀧の高原村は思つたよりはよく開けた處であつた。或るやる瀨ない様でさびしさをこの高原に求めて居て餘りに人間的氣分が多かつたのに輕い失望がないでもなかつたが、雪のない道路に出て半

年振りて土を踏んだ時は極度の喜悦があつた。廣い平坦な谷を挟んで右は闊葉樹林の深い平坦な丘陵て、地味は劣等であるらしいが、三四の開墾小屋からは炊烟のユルク上るのを見た。左は明治四十三年かの大山火事に坊主にされた丘陵で、日當りが好い丈に雪は八分通り消えて、斑な殘雪の有樣が何とも云へなく氣に入つた。チトカニウシは左手に深い谷を開いて、勿論頂は晴れては居らなかつたけれども近い丈に驚くべき仰角で聳えて居たが、餘り見榮えのする眺めではなかつた。が行手を遮ぎつて續く霧里山脈は初めての見參でもあり、山相に何となく高山型な趣のあるのがスッカリ氣に入つてしまつて引きつけられる樣に足を運んだ。左に小學校の校舍を見て、可成家並のある所に來たので、旅舍でもあるかと思つたが、それらしいものは見付からなかつた。しかし日のある間歩けばどこかへ行き着くだらう位に考へて、ブラ〳〵歩いて行つた。

顧ればチトカニウシは全く雲に入つたが、冬枯の闊葉樹林を載せた低丘を前景に、トイマルクシュペッ山の東峯が複雜な地形で聳えて居るのは、見逃し得ない景觀であつた。小泉氏の所謂白瀧山なる高山は、白瀧の瀧ノ上驛遞迄の間では望見し得なかつたが、あゝした顯著な山が此方面にあるか否か、自分は疑問に思つて居る。それからニセイカウシペをこの方面から仰ぎ得るかと期待して居たけれども谷からでは遂々望見し得なかつた。

又可成な家並に來た。數戸の雜貨店も見當つたが、店はガランとして居て火の消えた樣にさびしい市街地であつた。今年は木材業者の入り込み方が少ないのと、雜穀の値段が安いのとで、非常な不景氣さであるとは、後に驛遞の主人に聞いた。

午後四時驛遞に着き表から案內を請ふた處、素敵にお愛想の好い主婦（かみ）さんが出て來て、臺所から上つて呉れと云ふ。成程そこにはストーヴが眞赤に燃えて居た。通された六疊の間は貧弱だつたけれど御馳走は素よりなかつたけれど、窓一杯に霧里山脈が見られるのは總てを償つて餘りがあつた。その夜は

月が雲間から明るく洩れて鼻の浮かれ鳴きも聞かれた。

四月十一日。曇。靜かな昨夜の月明には大分霜が降りたらしく、枯草原は白かつた。しかし今朝はドンヨリ曇つて居る。驛遞を出たのが午前八時。屏風の様に連なる霧里山脈を後にして、昨日來た道を遙か行手に續く森林の尾根に向つて歩んだ。

半里も來た頃左側に老人夫婦の小さな雜貨店を見つけて、食料の足しにもと少し許りの駄菓子を購つた時、爐傍に十勝石の置物が幾つも並べてあつたのが眼に付いたので、一寸腰かけて小半時も話し込んだ。大分山氣のある爺さんらしく、この邊の溪谷を鑛石探求に可成歩いて居るらしい。十勝石はチトカニウシの溪谷で得たといふが多少疑問にならないでもない。立つ時に十勝石の大形の奴を二つ背負ひ込んだ。爺さんの名は高瀨豐吉といつて、地名等は皆目不得要領であるけれども、チトカニウシは可成跋渉してるらしかつた。

山道にかゝつてから天候は刻々に不良になつて來て、チトカニウシの頂には不穩な雲が懸つて居た。下りには左程とも思はなかつた雪路も、上りは非常な骨折りであつたが、谷が深まつてチトカニウシの頂が近づくうれしさに比しては、何でもないと思つた。殊に昨日電柱傳ひに下つた急傾斜を一氣に攀ぢてヒョイと後を見返つた時、霧里山脈一帶が素派らしい高さに雄々しい連脈を見せた時は、思はず踊り上つた。

大分登つてから電柱を離れて、急傾斜を一直線に森林中に上つて行くと廣い尾根に出た。南にはニセイカウシペの峻峰が頂に灰色の雲を冠つて聳え、其左にはトイマルクシュペツ山の二峰が續き、北には獨りチトカニウシの尖峰が手に取る様に仰がれた。

空合は益〻惡くなる許り、灰色の雲が非常な速さで南西へ南西へとつめかけて行く。今日こそはチトカニウシの頂上をと思ひ込んで居たのだが、この空合では何だか氣が進まない。空と山とを見較べ

て考へながら尾根を北へ下つて行つた。其内にニセイカウシペは樹林に隠れて見えなくなつたが、西に離れて白雲の亂舞せる隙間から、天鹽岳の雄大な姿が覗かれた。峠の頂に出たのは正午であつた。こゝで自分は暫くチトカニウシの頂を見上げながら立ち停つた。心の内では登る登らないの爭闘が可成續いた。そして愈〻登ると決した時は心臟は高鳴つた。

荷物は大部分此處に殘して、輕裝して辨當の飯を食ひ乍ら尾根を北へ〳〵と傳つた。北見側は樹木の少ない雪の緩斜面であるが、石狩側は樹林が深く茂つて、その一寸とした隙間から吹き越す風に、雪が扇狀に吹き拂はれて北見側の斜面に堆積して居る、尾根は末廣がりな凹所が先へ〳〵と續くので、堅雪ではあつたけれど歩き惡くかつた。

急傾斜を登つて頂に出ると、雪が吹き上げられて數丈に堆積し、北見側に懸崖狀をなして居るのは一種の奇觀であつた。ニセイカウシペ、トイマルクシュペツ山、霧里山脈一帶が灰黑色の雲を背負つて高く望まれる。ヌタクカムシュペは中腹以上全く雲に入つてしまつて居た。第二の急斜面の森林を登り切ると、廣い雪の平で、周圍を針葉樹林にとりまかれ、中にポツ〳〵とヲガラバナが雪から頭を出して居た。この雪の平は又針闊混交林の平に續いて、登るともなく第三の頂點に導かれた。是からは愈〻山らしい登りになつて、樹林の間を縫つて行く。景觀は次第に高山性を帶びて、曲りくねつたガンピと、背丈の低いアカエゾマツの疎な混交林になつた。傾斜も一歩は一歩より急に、最早到底草鞋のまゝでは登れなくなつたので、金カンジキをつけたが、凍結した雪の急斜面は少しの油斷も許されなかつた。頂は愈〻近づいて三角點の櫓も手に取る許り、樹林は益〻疎になつて、奇形なガンピの矮樹許りになつた。一しきり急な斜面に差しかゝると、殆んど四ツ這ひになつて馬背狀の第四峯の尾根迄登りついた。樹木は最早一本も見られない、叩き付けられさうな強い風が石狩側から吹き上げて來て、糠の樣な粉雪が舞ひ上るので眼も開けられない。最早白雲の天鹽岳を除いては、どの山もどの山

チトカニウシ岳の頂上

も灰色の雲に被はれて、眞に雲を被らないのは我チトカニウシ丈であつたが、それも束の間で、粉雪を飛ばす風に連れて、薄雲が頂を掠め出した。

強い風と寒さとに可成困惑しながら愈〻主峯にかゝつて、氷盤の様に凍結した淡褐色の雪（三月二十一日知來別、ルベシベ一帶には褐色の雪が積つた。勿論或種の細塵によつて出た色であつたが、その源因が何處にあつたかは不明であつた）の中から頭を擡げてゐる偃松の群叢を渡るのは少からず困難であつた。眼を惹いたものはアカエゾマツ、トドマツの丈低い老幹が散生してゐることで、自分にはこの一事はこの二種の樹木の垂直的分布に關する新しい觀察であつた（後にニセイカウシペに登つた時も同樣の狀態を觀察した。猶偃松の間に見出された植物は、シロバナシャクナゲ、キバナシャクナゲ、イソツヽジ、コケモヽ、ガンカウラン等であつた。

主峯の頂なる三角點の櫓に取付いたのは午後一時五十分。こゝ丈に特別に吹くかの樣な冷たい強い風は、櫓の柱に恐ろしい唸りを立てゝ、粉雪が白雲と共に石狩側から北見側へ飛んで行く。自分は一生懸命に柱にしがみついて、限りない喜悦に氣狂ひじみた萬歳を聲限り叫んで見たが、荒れ廻る風は用捨なく語尾を引きちぎつた。雲の間から東と北とに突出した峯が見える。殊に東の峯には恐ろしい絶壁が、深い〳〵谷にさし出て居た。兎に角この山の頂は概して急な傾斜で、一氣に四方の深谷に降下して居る。こんな模樣丈に遠望は全く失望であつたけれども、雲の斷

間からチョイ〳〵と覗く天鹽岳の山容は、ついぞ望んだことのない雄大さであつた。

風は益〻荒れまさる一方で、迂闊に止まつて居ては吹き飛ばされさうであるから、殆んど四ツ這ひで櫓から離れて、登つた時の足場を辿つて、大急ぎで下山の途についた。第四峯の急傾斜は雪面を一氣に辷り下りて、勿體ない程雜作なく午後三時には峠迄下りてしまつた。そして最早灰色の雲に包まれて了つたチトカニウシの頂上をやをら振り仰いだ時は、登攀の誇りと喜びとに胸は一杯になつた。それから知來別の小屋に歸り着いたのは午後八時であつた。（大正八年八月十八日稿）

行程表

地名	月日	距離	備考
知來別小屋	四月四日 前八・四〇發 後八・三〇歸		
ニセイオマプ	四月十日 前八・〇〇發		
オタツニタイオマプ	前九・四〇着	二五町	
ポンルペシュペ	一〇・三五着	一里	
北見峠	一一・一〇着	二里	
白瀧ノ上	後二・〇〇着	一二・〇〇着（チトカニより）	距離は里人の言と予の踏査とによりて暗算せり
チトカニウシ	後四・〇〇着	後三・〇〇着	三里半
		前九・〇〇發	三里
	後一・五〇着	北見峠より、三里	

二　ニセイカウシベ及國澤溫泉

知來別の或吹雪の夜語りに、若い人夫の口から層雲別（曳雲別）溫泉や、其の途中の兩岸の雄大なガンケ（岩壁）の話がポツ〳〵と語られた。兼ねて承知して居た處でもあり、又時々所要があつて曳雲別の

天幕澤の小屋へ出かけて來た時などに、レコマンベツ（烈古滿別）の澤口から大岩壁が屏風を立て並べた様に上流へ續いてゐる靈山碧水峽の雄大な景觀を望み見て、幾度か遊意が動いた。天幕澤の小屋の前アカダモの大木下に立つて、大石狩川の對岸に瞳をやる時、ニセイカウシペが間近くそゝり立つて、樹林の黑い長峯尾根（新稱）の後に、本岳（新稱）と奥笠（新稱）との眞白な頂や、寫眞で見たマッテルホルンを眼のあたり見る様な劍岩の奇峯を仰いだ時には自分の心は益々踊つた。

四月十三日。自分は約四ヶ月を送つた懷しい知來別の伐木小屋を引拂つて、雪路七里、天幕澤の伐木小屋に移つた。十四日の午後は車軸を流す様な大雨で、天幕澤の急湍は濁水が奔馬の様に流れて、その日の夕飯は土臭かつた。それからは拭つた様な快晴が續いて、ニセイカウシペの頂は日一日と黑い斑が太つて行つた。

四月十九日。曇。この數日餘り快晴が續いた故か、今日は朝からドンヨリ曇つた日であつた。しかし雲は高く、この邊の高山の頂はどれも不穩らしい様子はなかつた。昨夜急に思ひ立つて今日ニセイカウシペに登ることにしたのであるが、早朝六時頃出發する豫定が朝寢の爲に遲くなつて、八時過ぎにやつと小屋を出た。自分にとつては非常に大きな冒險的試みであるにもかゝはらず、その日は餘り心が緊張してゐなかつたと云ふのは、大分登路は研究したものゝ、未だ徹底して居なかつたので、實は今日は一寸何處かそこいらで、歸らなければならない様なことになるらしい懸念の方が多かつたからである。

石狩川に架した假橋は此頃の雪消へに壞れかゝつてゐて、多少白濁した、恐ろしい程に水量の豐富な春の河に渡されたものとしては可成脅かされた。デルタに立つヤナギやヤマハンノキの梢には未だ樹氷が美しい。小屋の前の伐出丸太の土場では、一番馬の勇ましい嘶が聞えて、丸太捲の賑かな音頭が川面を流れる。近く左岸に聳え立つヌタクカムシュペの森嚴な峯々は、永久の自然力に對する苦鬪

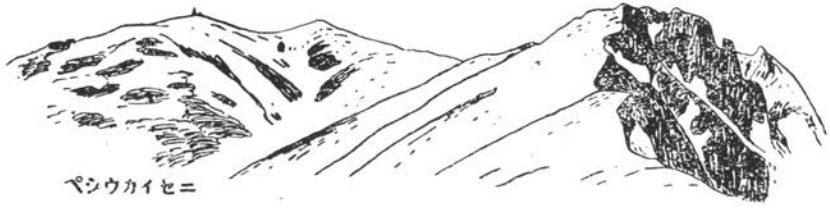
の跡を一つ一つ深刻に表はした老戰士の如く沈默してゐて、自分は何時も其姿を飽かず眺めるのであつた。殊に今日の樣に灰色の調子の好く出た山の姿を仰いだのは初めてゞあつた。總じて北國の自然は萬象皆灰色に支配されて居て、それが殊に冬に於て悲壯、沈痛、靜寂、森嚴といふものゝ極致に達するのである。自分はこの石狩川の上流へ初めて入つた時、友人に次の樣に書いた。

「實際冬のこの邊の色彩は白色及黑色の二色のみで、それ等が種々の濃淡度に於てモザイクを形成してゐると見ることが出來ますが、最一つこれを徹底的に考へますと、白色も勿論眞の白色は殆んど見ることが出來なくつて、要するに灰色味の加はつた白色です。それで萬象の色彩は黑色と白色とに還元され、更にそれ等は灰色の一色彩に歸せしめ得るかと思はれます。」

ヌタクカムシュペの峯々の中でも、自分はいつも黑岳の剛壯な尖峯に憧憬して居る。それに比しては最高點の北鎭岳は、不幸にして餘りに線も色彩も軟か過ぎて居る。

アカダモ、カツラ、ヤチダモ、オニグルミ等の巨樹の立つたこの河岸の平地は、可成耕作されて、高い切株がニヨキ〳〵と行列してゐる。その耕地の堅雪の上を一直線に突き拔けて山裾にかゝつた。其處は南西を受けた急斜地なので、雪はスッカリ消えて、疎林の下丈低いネマガリダケが青々と生ひ茂つて居た。急であるが短いこの斜面は、一氣に駈上つて狹い尾根に出た。その裏は直ぐ深い溪流に臨んで居る。最初は此尾根傳ひに登る積りであつたが、堅雪で大丈夫だと思つて今日もワカンジキを用意しなかつた爲に、一步一步膝迄も沒する程雪が軟いので、何とかなる位な考へで溪流に辿り下りて、樹林と急崖とに日の眼も拜めない薄暗い溪流の雪面を上つた。

流れはスッカリ堅雪の下になつて、足下にコトコト忍び音を立てゝ居る。何だか落ち込みさうなので一足一足杖で突ついて行つたが、それでも二度許り踏み拔いてしまつた。その內に谷は愈〻迫つて傾斜も驚く程急になつて來た、殊に本流らしい谷筋の雪面は到底登れさうにもないので、右の谷を登



ることにする。これも傾斜は可成急なので、小さくヂッグザッグに上つたが、上になつては愈〻急斜の度を加へた許りでなく、雪が軟かになつたので一時は進退谷はまつてしまつたが、どうにかしてやつと左の小尾根に移つて、猶非常な努力の後兎に角本尾根迄這ひ上つた。此處は雪は堅いので一安心であつたが、針葉樹の風倒木が多く、それをくぐつたりはね越えたりするのに暫くは非常に苦んだ。

尾根は次第に廣く成り樹林も益〻厚くなつて行くので、眺望等は全く無く、唯暗い針葉樹林が涯もなく續く。その間を雪を踏み碎く音を木魂させながら一人て登つて行くのは、堪え切れない寂しさであつた。そしてヤケに熊除けラッパを吹き立てた。

やがてニセイカウシペの一峯黒斑山(新稱)があの黒い岩壁を突き出して、樹林を壓して見えて來た。ヌタクカムシュペも樹林の隙間から輪廓丈は捉へ得たが、間もなく又眺望の總ては樹林に遮ぎられてしまつた。そしてその樹林は最も壯嚴なアカエゾマツの純林で、三十度以上の急斜面を上へ上へと續いて居る。樹下は雪が割合に少なく、石楠、アカミノイヌツゲ、ツルツゲ、ミツバワウレン等の群叢も處々に露はれてゐる。これは層雲別山(新稱)の斜面で、一時間も大汗になつて登つて、やつと中凹の尾根迄辿りついたのである。左に少し登れば最早層雲別の平な頂の一部であるが、密林に被はれて居るのでニセイカウシペ本岳の頂が少しく仰がれたのみである。

最早十二時である、ニセイカウシペの頂迄はまだ可成ある。圖飯をたべながら幾度か此處から下山しやうかと思つたが、思ひ直して兎に角行ける處迄登ることにした。

一寸下つて今度はなだらかな斜面を登る、アカエゾマツの純林は次第にガンピの

多い林に移つて、白茶けた樹幹の群はどこ迄も續く。そこには物悽い寂しさがある。沈默と寂寥とは全山の支配者であつた。この際限もなさゝうであつた樹林も、いつとはなしに木立が疎になつて、深い谷が兩側に露はれて來た。左はチクルベツの一源流で、右はニセイケシュオマプの谷である。左の谷の向側は最早直ぐニセイカウシペの主要部で、左から笠ヶ峯(新稱)奥笠(新稱)本岳(新稱)奥岳(新稱)が續いて、廣大な偃松の群叢が暗綠の斑を入れて居る。奥岳の右には牙ヶ峯(新稱)の奇峭が聳え立ち、西には深い石狩川本流の溪谷を距てゝ、ヌタクカムシュペの全容を望み見る。笠ヶ峯の左に遠くつゝましやかに尖頂をもたげた優美な山は、つひこの間登つた許りの懷しいチトカニウシで、天鹽岳は獨り北東の一角に悠然として、美しい然し何處か專制者然たるスカイラインを劃して居る。

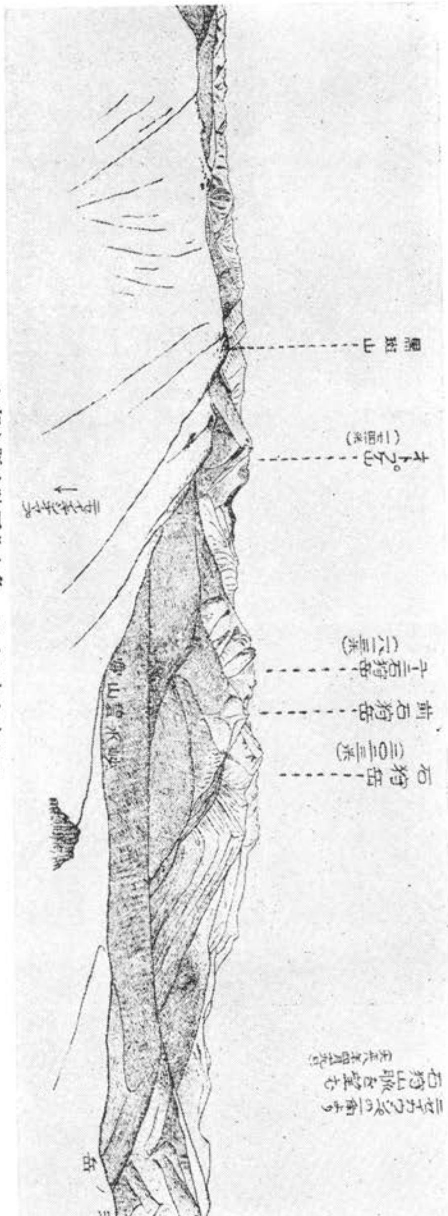
長峯尾根は牙ヶ峯から岐れ出て、裾はルベシベ迄も達してゐる。今居る位置の高度は少くとも一二〇〇米以上に及ぶらしい。荒れ狂ふ冬の風はこの尾根に吹きつけて、長い厚い雪の堤防を造り、其一方の側は屹度谷に崖狀に突き出して居て、幾十條かの美しい層理が表はれて居る。この雪堤は初めの間は東側に吹きつけられた形になつてゐたが、尾根の上部では尾根の一寸した曲折部で、或は東に或は西に吹きつけられて、其接合部には渦狀運動の跡さへ見えた。東にニセイカウシペの主脈と西にヌタクカムシュペと、直下に深い深い石狩川本流とを有するこの尾根に、北西から吹きつける風は、想像出來ない位複雜な運動方向をとるものらしい。

曲りくねつたガンピやアカエゾマツの疎らに生へたこの長い尾根は、極くなだらかな登りで、略四段になつて牙ヶ峯に及んで居る。そしてその黒い絶壁は自分の前途に對して威嚇であり憧憬であつた。其の内に偃松も見えて來た。中にはガンピの幹に生へてゐるのを見たのは一奇觀であつた。高く登つた嬉しさに時間などは念頭に置かず、ひたすら上へ上へと急いだ。やがて前方に劍岩(新稱)黒斑山(新稱)湯岳(新稱)が現れて、遠くその背後に音更山、石狩岳の一群を盟主とした石狩山脈の主脈が、雄

々しいスカイラインで天空を限つて居るのを望んだ時は、凝と石像の様に佇んで眼には感激の涙があつた。下には悪魔の口の様な底廣のニセイノキシオマプの谷が見下ろされて、牙ケ峯の絶壁は其谷底迄一氣に削り落されて居る。

此處から見たヌタクカムシュペも又なく雄大なものである。肩幅の思ひ切つて廣い山彙の全體をこの高處から望むと、峯々谷々は一々指呼されて、殊に黒岳のカルデラ狀の大溪谷(ワッカペケレペッ?)は、最も注意を引いた。しかし靈山碧水峽の奇蹟的大懸崖の連續は、こゝからでは周圍の偉大さに比しては餘りに細小な規模であつた。

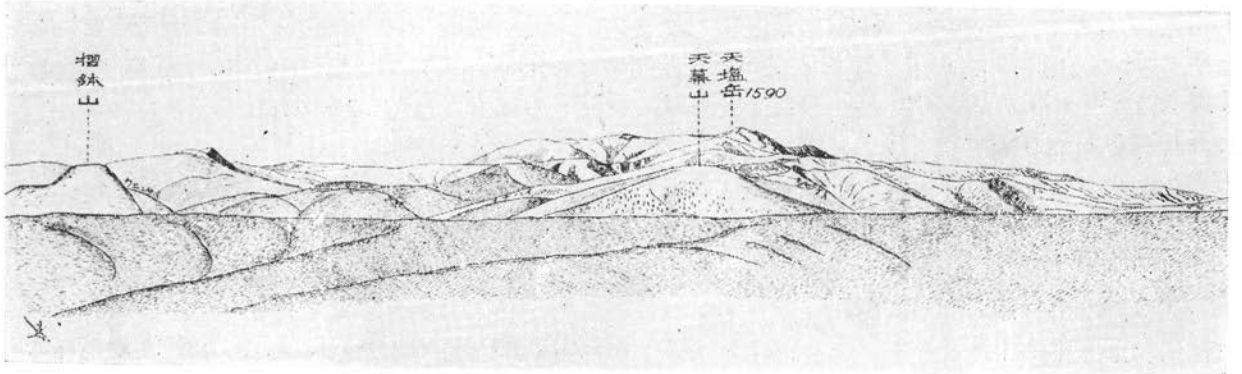
可成の時間を費した後、ノートには山々の細かな線が引かれた。足の先は既に石の様に冷え切つて



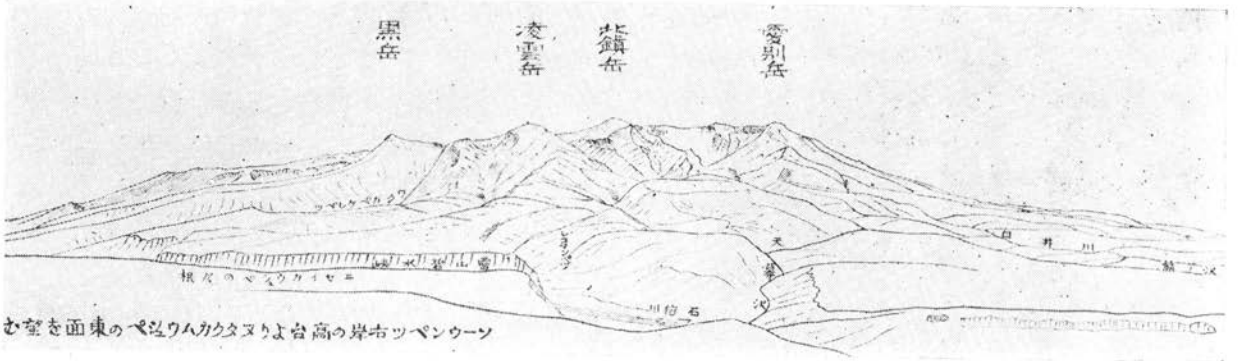
ニセイカウシッペの一角より石狩山脈を望む

（一其）も望を方東北及方東りよ股中側東のベュシムカクタヌ

（二其）も望を方東北及方東りよ股中側東のベュシムカクタヌ



ヌタクムシベの東側中腹より東方及北東方を望む(其三)



ソーウンペツ右岸の高台よりヌタクムシベの東面を望む

ソーウンペツ右岸の高臺よりヌタクムシベの東面を望む

○石狩川上流の旅日記より　竹内

居たし、ぢかに腰を下ろした堅雪の面は、體温の爲に深い凹みがついて居た。それから狹い雪の尾根を牙ヶ峰の岩壁に引き寄せられる様にヒタ上りに上つた。最早黒斑も劒岩も笠ヶ峰も下に見る位になつて來た。日は薄雲を通して淡い光りをやつと雪の上に投げて居る。いつの間にか雪の峯々を越して來る冷たい風が吹き出した。しかし靜かな風であつた。沈痛な靜まり返つて居るシーンには、何等の動搖さへ來さない程のものであつた。

其の内に雪面はスッカリ凍結して來た。金カンジキを着けては見たけれども、この爪の小さい種類のものでは餘り役にも立たなかつた。第一の岩壁の直上を急斜面に沿うて横過し、第二の更に大きな岩壁の上を非常な勞苦と忍耐とを以て四這ひに登つた。雪から抜け出た偃松　イソツヾジ、ガンカウラン、コケモヽ等の群叢は、自分の重要な助力者であつた。小さな谷一つ距てた本岳の頂上は、三角點の櫓迄手に取る様に望まれる。偃松の群落は其左肩から奥笠にかけて、暗綠の斑を密布して、裾は針葉樹の矮林に移行して居る。谷の行きつまりは奥岳のつゝしやかな隆起が聳えて居る。

第二の岩壁に這ひ上つた自分は、すぐ高大な第三の岩壁の上緣を傳ひ初めた。一歩一歩堅雪に足場をつけて、偃松の枝につかまりながら、ヤットの思ひで午後二時十五分劒の刃の様な狹い鋭い頂に出た。右下は削つた様な斷崖が谷底迄及んで居て、眼も眩むやうである。牙ヶ峯の頂は眼前に黒い岩壁の尖りをもたげて、ニセイノキシオマプの深谷を傲然と見下ろして居る。自分は第三の岩壁の鋭い劒の刃の上に、馬乘りにしがみついたまゝ、最早この凍結した雪では、この尾根を其儘一歩も前進し得ないことを感じた。牙ヶ峰の頂は實際今一息であるとは思つたが、堅雪の急傾斜を登る何等の用意もないことを思へば牙ヶ峰の頂迄は命懸けの登攀である、さりとて本岳へは一度谷底に下りてから可成の斜面を登らなくてはならない、それには時間の餘裕がないと思ふと、殘念ながら此處から下山するより外に何等の策は無かつた。

登りより下りは猶一層の骨折りであつた。それでもヤットの思ひで難場を下り盡した時はホット一息ついた。フト前方を見た瞬間眼に一群の黒點が、急速度に移動したのを感じた。ハット思つて注視すると小鳥の一群は、今しもヌタクカムシュペの山彙からこの長峯を越えて、猶ニセイカウシペの頂を過ぎ、遠い遠い北の國への旅の途中であつたのだ。自分は其群が空の色と溶け合ふ迄眺と目送した。この邊の岩壁の露出部で觀察した植物は、キバナシャクナゲ、シロバナシャクナゲ、コケモヽ、イソツヽジ、ウラシマツヽジ(枯葉のみ)、ガンカウラン、イハウメ、Tofieldia sp.、コガネイチゴ(枯葉のみ)、ミツバワウレン、ハイマツ、アカエゾマツ、トドマツ、Sorbus sp.、エゾノダケカンバ、ミヤマハンノキ等で、常綠葉を持つた種類はうでられた樣に凍結して居た。

長峯の尾根から間もなくダラ〳〵下りの樹林に入つて、層雲別山の直下に出た。そこから登りの足跡を右に見て、一氣にニセイケシュオマプの谷を目懸けて、雪の針面を辷る樣にして針葉樹林を縫つて下つた。いつの間にか雪の下で流れがコト〳〵音を立てゝ來る。一步一步流れは大きくなつて來た。そして途中で一寸尾根傳ひに歩いてゐた間に急に谷は深く刻まれて、大きな水流の叫喚がズット下に聞えて居た。餘り急に勝手が違つて來たので、吃驚して谷に辷り下つた。思つたよりは温かな溪流を幾度か右左に徒渉して、暫く行く間に二股に出た。今下つた左股に比しては、右股はズット規模が大きい。左手の崖には幾つも新しい雪崩の跡があつて、下に雪塊が岩塊とゴッチャになつて重なつて居たのを見た時は、前途の不氣味さにゾットしたが、それでも意外に早く石狩川の本流に出た時は一安心した。そして急に氣が弛んだ故か一時に疲勞が出て、天幕澤の小屋迄數町の雪路も可成の懶さであつた。小屋に着いたのは午後五時で、夕食の膳に上つたヤマベ魚に舌鼓を打つた。

四月二十一日。曇。昨日は久し振りで降雪を見たが、今日は暖かな曇り日で、新雪は跡方もなく消え失せ、石狩の川も心持增水して居たやうだ。今日は久しく憧憬してゐた靈山碧水峽を瞥見して、層

雲別温泉迄行くことにして、午前九時に小屋を出で、假橋を對岸に渡つて右岸傳ひに溯つた。

ニセイケシュオマプの澤口を左に見る頃には、最早屏風を立て連ねた様なリバライトの岩壁が雄大に聳えて來る。下には岩塊が頽れ落ちて蘚苔が一面に其上を覆ひ、處々に小さな清流も見出された。勿論日當りの好い處だけに雪はスッカリ消え失せて居る。可成危い崖道や一本橋を過ぎて、針闊混交林の暗く茂つたデルタに入つた。此處は雪が未だ可成殘つて居るが、此頃この山中に勞働して居る伐木人夫等が大分湯治に出かけるので、道形は明かにふみならされて居る。

行くにつれて左手の岩壁は高大と奇拔さとを加へて來た。然し右手は左手に較べては遙かに見劣りがして、岩壁といふ程のものではなかつたが、オベリスク狀をなした幾つかの岩峰の群は見逃せない景趣である。この岩壁も可成長く續いたので、大分倦怠を覺えて來た。自分の興味は右手の高い針葉樹林の峰々や、大規模な溪谷の開口に向けられてゐたが、ニセイノキシオマプの手前で石狩川に半ば足を浸して上流を望んだ時、兩岸の直々たる山容、壯嚴な樹林、殊に河岸のハンノキ、オニグルミ、ヤチダモ等の闊葉樹は、限りない興味をもたらした。ニセイノキシオマプの流は、今にも踏み拔きさうな雪の上を渡つた。深い暗い谷の上流には牙ケ峯邊の純白部がチラと覗かれた。

可成長い路を石狩の流に沿うて遡つた。河原には大石がゴロゴロしてゐる。それを飛び越えたり跳ね越えたりする。川は初春丈に如何にも豐富な水量でスイ〳〵と流れて行く。デット見詰て居ると、渦と水沫とが追懸け合ひながらどこ迄も進んで行くやうだ。そして如何思つても清い美しい流水だとの感は起らなかつた。何だか米のとぎ汁を薄めた様な不透明な藍色で、それ丈何となく餘計に物悽い感を強めた。やがて柳の若木の密生したデルタの雪路をふむ。左手には懸崖から瀑が直下して、其邊の雪のない斜面には何か知ら紅紫色の花叢が美しかつたので、つい引きつけられて瀑の下に立つた。花叢はエゾノシャウジャウバカマの滿開したのであつた。その間にはヒメイチゲの可憐な白花もチラホ

ラしてゐた。懸崖の上部には巨大な岩巖が高く天を突いて立つてゐる。

今迄上流に始終眼を惹いてゐた湯ノ岳(新稱)の切り立つた裾の樹林を追ふ間に、兩岸とも著しく迫つて來て、急に路形がハッキリして來たなと心付く内、赤茶化た異樣な感じのする河原に出た。左手に直ぐ粗末な小屋が見つかつた。入口には襤褸姿の田舍爺が迂散臭さうに自分を見つめて居た。案内を請ふ迄もなく小屋に入り込んだ時中の雜然たる男女の群には一寸鼻じろむだ。小屋は床と土間とに分れて、土間にはトドマツの板を敷いて草鞋穿きの儘四人許りの人夫の男が焚火を圍んでゐた。床のある方は多少整つて居るが、孰れも自炊客許りて、鍋、茶碗、ビール瓶等がうす汚ない蒲團や莫蓙と雜然入り亂れて、十人許りの男女はシダラなく横になつて居た。板壁には隙間もなく樂書がしてある。小屋の主人だといふ五十近い男は、加藤と呼ぶ層雲別の農家で、この溫泉の持主である。北見留邊藥附近の武華溫泉(溫根湯)の國澤某から經營權を得て、大正三年以來粗末ながらこの小屋を立てゝ、非常な困難の内にどうにか維持して來た。今年は是非最少し家らしい建物にして客を呼び度いと思つて、最早木取は大體すませた。勿論今の野天の浴場も屋根掛けをして、溫泉の體裁を整へ度いと思ひますと話した。

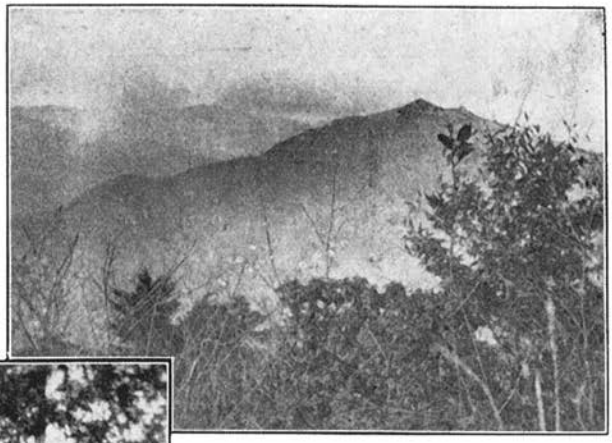
小屋に入る時は浴場に氣が付かなかつたが、出て見ると小屋の直ぐ數間前に一坪許りの湯壺がある。只河原を堀つた丈で野趣橫溢してゐる。湯は藍色の透明な少し味のあるもので、溫度も可成高い。胃病、リウマチス、腦病等には可成効能があるとの事である。此外附近所々に赤く濁つた微溫の湧泉が堪えて居て、その中には蛙の群が喧ましく鳴き騷いて居た。溫泉はこの上流に猶五つ許りあるといふ。しかし小屋のあるのはこの對岸の田中溫泉と此家丈だと聞いた。

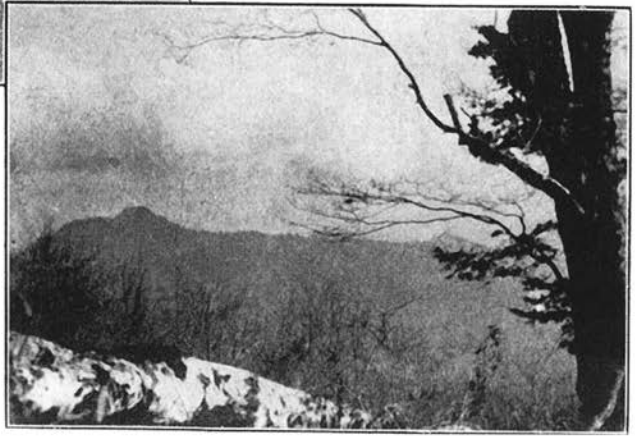
恐ろしく風が出て來た。小屋の板屋根は風にバタ〳〵して、今にもはがれさうな音がする。湯壺の上方の石の上に乘つて、未だ午前十一時半で少し早いが辨當に腹を拵えて、この邊を步き廻つて見た。

もとより狹い谷底なので眺望は全くない。左手の岩壁から崩れ落ちた岩には可成金屬鑛物の成分が認められた。其先の水の打ち付ける崖に架した梯子を上り、絶壁を削つた細道に導かれて更に深い〳〵然し細い溪谷を朽ちかけた丸木橋で渡つて、渦巻く流を下に見た時は膽をつぶした。前方にはソッカペケレペッが赤茶化た大きな谷口を開いて居て、ズット上流は峯又峯が續き、河原は一時可成の廣さになつて居た。見ゆる限りの河原には若木の樹林が點在して、雪はホンの斑を入れて居る丈であつた。これから先は到底この崖路は傳へさうになかつたので、崖を下りて元來た路を歸路についた。天幕澤の小屋に歸りついたのは午後二時前であつた。

これから餘程後の話である、温泉にはバッタリ客が來なくなつたと云ふ話を聞いた、何てもお化けが出ると云ふ評判が一時立つたからのことで、それも日中頻繁に出て、浴客に戲れるといふのであるから奇拔だ。或時などは藥鑵をヌッとつき出して「酒を吳れ」と云ふので、ウッカリ「誰だ」と云つた處が、藥鑵をつき出した手はドロンとなくなつて、跡に人の氣配もなかつたと云ふ。又或時などは誰ともなく外に人が來たらしいので、出て見ると勿論誰も居なかつたといふ。先づこんな種類の話であつた。氣の毒なのは經營者で、折角の目論見もこれでは當分駄目なことであらう。最もこんな噂の立ちさうな原因がないでもないといふのは、數年前鑛石探求の山師連が、一夜無人のあの小屋に宿つたことがあつた。先づトバマッの技を敷いて横になつて見たが、何となく下がゴロ〳〵して寢心地が悪い、暗がりではあつたし丸太位のつもりで、それを鉈で切り除けたが、その時の手應えが變なのでマッチを點けて見ると、驚いたことには夫が人間の足であつたといふ。層雲別の農家のはづれから温泉迄は自分の考へでは一里半は充分あらうと思ふ。（大正八年八月十五日稿）

三　ニセイカウシベの峯々の命名に就いて





上、大岳山頂より望める御前山。

中、御前山の神祠。

下、御前山頂より望める大岳山。

（山川默氏撮影）

自分の石狩川上流チカルベツ及層雲別の生活は大正七年十二月中旬から八年四月下旬に亘つた。その間最も自分が興味を持つて望んだ山は、いづれから見ても戰慄を禁じ得ない様な岩壁や懸崖に飾られて、純白に聳ゆるわがニセイカウシベの偉容であつた。

自分は機會ある毎に山のスケッチをして、その小皺の一つ一つに迄徹底した觀念を得様と努めた。そして其山體を構成して居る幾つかの峯に對して、何とか命名する必要を感じたので、自分は里人からいろ〳〵命名の手掛りを得様としたが、チカルベツで最も此山の地理に委しい、居家野四方吉（イカノヨモキチ）と自稱するアイヌ見たいなヤマベ釣りの爺さへ、此山がヌタクカムシュペといふのだなどと、途方もない事を云ふのにがつかりして、自分は全然獨立の態度で命名することに定めた。これが通り名になれば幸であるし、よしならない所で別に損する所もない。

ニセイカウシベの全容を見るに最も適當な位置は、留邊志部市街附近から可成遠くに望むに越したことはないが、チカルベツからでも可成よくその地形の概念を捕捉することが出來る。尚ほ石狩川本流の方面からでは、層雲別のどの邊からも望まれるが、餘り近すぎて無理な仰角に見上げるから如何も思はしくない、尤もヌタクカムシュペの中腹一〇〇〇米内外の高所に登ると、その偉容は基底から一望の下に盡すことが出來る。

チカルベツより望みたる時

此の方面から望むと峯は大略八つに分れる。中央に大坊主の様な圓味のある頂を最も高く持ち上げてゐるのは、山塊の主峯で本岳と命名した。標高は全山の最高點一七八六米を宛てはめ得る。位置は全然石狩國内で、略三つのカルデラ狀の急崖が頂に迫つて居る。其の前方にある富士形の美しい樹林の山は笠ケ峯と命名したもので、標高は一四八八米を充てゝ置く。其奥に高く續く一峯は本岳の一隆起とも考へられるけれど、概形笠ケ峯と似た處があるので奥笠と命名した、標高は明かではない。こ

の二峯とも全然石狩側にある。又其後に一寸瘤の様に頭を出して居る一峯は、層雲別方面から望んだ時に犬牙の様だつたから牙ヶ峯と命名した。標高不明であるが、一六〇〇米以上はあると思ふ。これも石狩側に入つて居るらしい。右に長く續く尾根は直感的に長峯とした。裾はズット延びて留邊志部附近迄達して居て、大部分高臺狀をなして居る。其の尙ほ右に見えるコンモリした針葉樹林の黒い小山は、層雲別川の水源に在るので層雲別山とした。高さは一〇〇〇米位か、孰れも石狩側に位置してゐる。

本岳の左奥に横に長い複雜な一峯が聳えて居る。これは横岳と呼ぶことにした。其左に續くものは極く溫和な輪廓の山で、最東端の降起であるから東岳と假に命名した。いづれも一四〇〇米以上であらう。前者は北見石狩國境に、後者は石狩側に入り込んで居る。

留邊志部より望みたる時

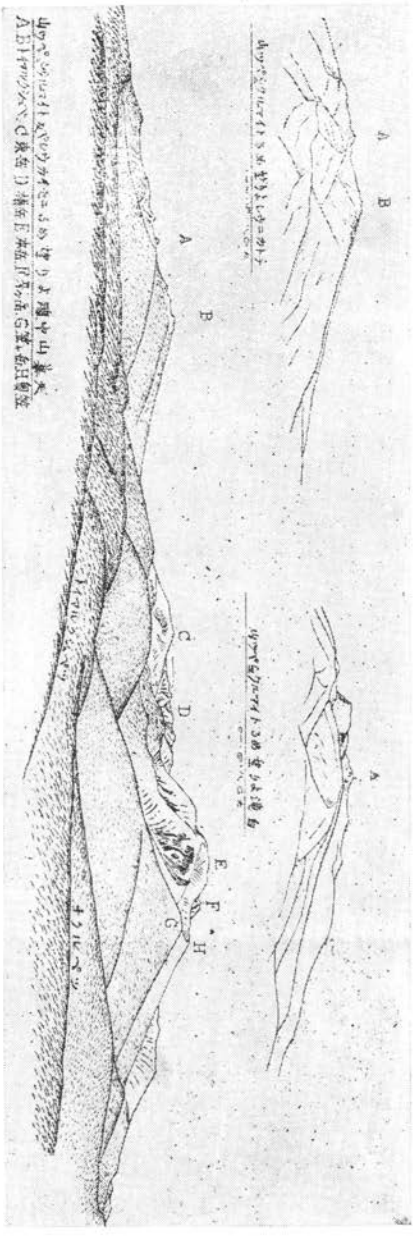
留邊志部から望み見たニセイカウシペは、略其全容を捕捉し得るのみならず、非常に高く美しく仰がれる。左から東岳、本岳、牙ヶ峯と續いて、本岳の下に笠ヶ峰、奥笠が續き、牙ヶ峯から長峰の尾根が出て居る狀態がよく判る。牙ヶ峰の右に全然石狩側で略獨立した非常に皺の多い山が續く。此山の右の方には岩壁があつて、冬期雪の多い時でも岩壁の黒斑が明かに見えるので、黒斑山と云つて置く、標高は一三〇〇米位であらう。その左端牙ヶ峯に近くオベリスク狀の尖峰が眼を引く、これは山といふ程の根張りがないので劍岩として置いた。標高は一四〇〇米内外らしい。其右に全然獨立してズット低い山塊が續くが、これは石狩川の溪谷に迫つた山で、層雲別溫泉はこの山の裾にあるから湯ノ岳と命名したが、ニセイカウシペの領域は黒斑山を限界とした方がよいやうである。

層雲別側より望める時

石狩川畔から仰いだニセイカウシペは、餘り近いので長峯の上から一寸本岳と奥笠が覗いてゐるだけである。層雲別山と黒斑山とは、最もよく仰ぎ得らるゝ。又位置に依ては牙ヶ峯及劍岩が見える。

殊に劍岩がマッテルホルン然たる尖頭をもたげて、針葉樹林の上に抜け出してゐる光景は忘れ難い印象を與へる。

ニセイカウシペの全容を見様といふには、是非ともヌタクカムシペの中腹迄登る必要がある。其處からは石狩川の谷を距つるのみで、全山塊の偉容は、限りない森嚴さを以て吾人に迫つて來る。自分

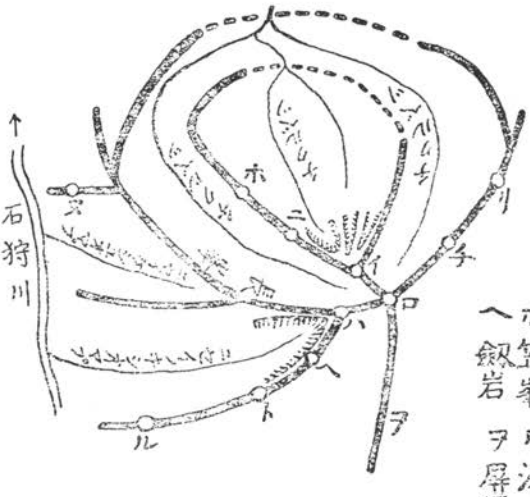


ニセイカウシペ及ペシウカイセ山

が見たのは天幕澤奥の高臺約一一〇〇米位の處からと、レコマンベツ左岸の尾根約九〇〇米位の處からとであつたが、牙ケ峯、劍岩、黒斑山がニセイノキシオマプの深谷を圍んで、基底から削つた様な絶壁を懸け連ねて聳ゆる様は、殆んど形容の辭を知らない位な偉觀であつた。

牙ケ峯の左には尚も奥にあるらしく觀察されるので命名した奥の岳から、本岳、奥笠、笠ケ峰と續

いて、其前面の屏障となるものは長峰の長壘である。この奥の岳といふのは、北見石狩の國境に在る小さな隆起に過ぎないが、四つの大尾根の分岐點で非常に重要な位置にある。標高は不明であるけれども、本岳と奥笠との間位であるかと思ふ。



これ等の峯々の配列を觀察するに、多少の推察が許されるものとすれば、圖の様になるかと思ふ。即ちリ、チ、ロ、ハ及長峯の環線とイ、ニ、ホ及其延長のなす環線とは二重環を成して、宛も二重式火山の模型圖を見る様になり、又ニセイノキシオマプの谷は長峯及ハ、ヘ、トとに圍まれたカルデラではないかと云つた様な觀念が浮んで來る。此山が火山であることが疑ひないならば、地形上こんな觀念も當然許さるべきものではあるまいか。

序にニセイカウシペの登路に就いて卑見を述べて置きたい。自分の取つた登路は層雲別方面からで、ニセイケシュオマプの右岸の尾根を層雲別山に登り、長峯の尾根傳ひに牙ケ峯の直下迄這ひ上つた。凍結した積雪上を辿つたので割合に容易であつたけれども、雪のない頃は根曲り竹に苦しむことゝ思ふ。下山の際は長峯を下つてニセイケシュオマプの谷に入り込んでしまつたが、登山路として取る場合この左

股を登ることは、敢て不利ではなからうと思ふ。併し右股は上流が恐ろしい急傾斜になつてゐるらしいから、夫を上るのは考へ物であると思ふ。牙ケ峯の直下から左に一寸と谷に下つて、向側の斜面を上れば東岳で、夫から奥笠、笠ケ峯、奥岳の孰れにも必ず行けることゝ信ずる。

最一つこの方面からの登路は、ニセイノキシオマプを登つて、可成上流に出てから右折して黒斑山に登り、劔岩、牙ケ峯を經て奥岳に達し、東岳に登ることが出來るかと思ふ。チカルベツ方面からは、チカルベツの口から約二里登ると下の二股に出る。この右股を取つて登ると今度は上の二股に出る、其時右股を溯つて行けば、別に困難もなく、長峯と東岳、笠ケ峯との間の谷に入るやうになる。この谷を水源迄辿れば奥岳、東岳、牙ケ峯の孰れかに取り付けるし、中途から左すれば笠ケ峯、奥笠の孰れにも登り得ると思ふ。此澤はチカルベツの主ともいふ可き居家野四方吉（イカノヨモキチ）爺が大丈夫登れると保證して居た。又下の二股から左股に入れば、北岳、横岳、東岳、奥岳の孰れにか取り付けることゝ思ふ。この澤も途中左したる難所はないと居家野爺さんが話した。

最後にトイマルクシュベツ山（新稱）なる名稱に就いて一言御斷りして置きたい。此山はチカルベツとは尾根一つ向ふのトイマルクシュベツの上流にある山で、上川の平原からもニセイカウシペの左に望むことが出來る。如何にも穩かな山で、石狩側からては大抵一峯しか見えないけれども、北見峠からは略東西に二峯が連つて、西の者が少し高い。石狩側から見えるのは此峯であるが、北見白瀧からも此西峯が見られる。この山は小泉氏の所謂チカルベツ山に當るものであらうと思ふ。（大正八年八月三十日稿）

文中屢々ガンピといふ語が散見するのは、北海道では Betula 屬の種類を、何でもガンピといつて居るので、北海道氣分を表はしたいといふ譯でもないが、一々シラカンバ、ウダイカンバ、さてはエゾノダケカンバと名稱を擧げるよりはと思つて、斯樣にして置いた。

石狩川上流へ行つて靈山碧水或は靈山碧水峽とか、大雪山とか云つた處で、恐らく通じないことを承知して居なくてはならない。靈山碧水は「石狩川のガンケ」又は「箱」、大雪山はヌタック又はヌタップが通り名になつて居る。ニセイカウシペといふ山名も一寸知らない者が多いが、チカルベツの山と云へば大低通ずる。溪流の名稱は自分の略圖にある分ならば間違ひなく通ずる。

雜錄

○神戸岩と御前山（承前）

尾根傳ひ

午後零時五十分いよ〳〵大田和を發足して西に向ふ。元來此鞍部は、山稜の幅二間とはない所なので、東へ行くにしろ西へ行くにしろ、踏迷ふ虞は毫末もない。尾根の上は若い雜木が生えて居て、其上スヽキやらノイバラ等が邪魔をするが、夏ならばいざ知らず、どし〳〵推除けたり踏にじつたりして進めば大した困難はない。路は甞てつけられた形跡はあるが、敢てそれを辿らずとも差閊はない。たゞ雜木の茂みさへ避けて、あまり中腹に下らない樣にすれば大過はないのだ。進むに從つて左手に赤井澤の谷が開けて來て、炭燒の烟がよく見える。初めの隆起をこして次のに掛る頃から大分木が茂つて來て、細いながらも倒木などが多くなるので、或は跨ぎ或はくゞり乍ら五六寸許も積た雪を踏んで行く、時折路らしい所に出るが、其處にはこれも獵師であるか草鞋の跡があつて、二三頭位の犬の蹂跡がその右や左に點線の樣に走つて居る。此の雪が降てから已に人が通つたとなると、尾根傳ひは全く絶望ではなく、又幾ら困難があつても之を遂行しないのは餘に意氣地のない事だと思ふ。第二の隆起を越えて尾根の狹い所へ出ると、鞘口山の東北面が鼻の先に現れて、雪が一面に積つた斜面には、氷川村の炭燒が切落した雜木の枝穗が宛然階段式レリーフマップの等高線の樣に幾段にも幾段にも積まれてある。左の檜原村の方面はこゝ數年は樹木の伸るに委せてあるので、其の藪の中は一寸通れそうもない。自分は此の村界に沿うて藪を避けながら又餘り右手の雪にも惱まされない樣に上らうとするが、其處には路があるのではないのだから餘り樂ではない。傾斜が急なのと雪が凍つて居て一步々々力を込めて踏まないと滑るから、木の切株や枝に捉らないで上ることは餘程六ケしい樣だ。多少の餘裕を得て小留（コトヾ）浦（ヅラ）に流下する大澤川の谷を瞰下すと、多摩の流れ

や青梅街道もチラ〳〵と目に入る。谷の左手には鞘口山から九龍山に引いた尾根が屏風の様に峙ちながら、多摩川左岸の小中澤峯（一四七九米）から出る小中澤の谷に向つて突出て居る。急な上りでも斜面を行く間は未だよい方だが、例の枝穗の階段を越える所になると中々容易ではない。雪の上に頭を出して居る大木の切株などに手をかけ、炭燒に伐られて鎗の穗を並べた様に尖つて居る若い雜木の幹に足を託し、總身に力をこめて躍り上るのは、偃松の海を泳ぎ渡るのとは調子の異つた、而も同樣に勞力を要する仕事である。

大田和を出てから半時間許で鞘口山の一峯頭に登り著いた。栂の大木が一二本あつて、其の下にはリャウブやヤマツツジかと思はれる灌木が生じて居る。これは御前山塊の山々を蔽つた昔ながらの林相の一小部が尙殘つて居るのだろうが、日本國土の大部分をなす山林の幾千年幾萬年來の自然の粧が、僅なりとも現存するのかと思ふと、單に植物學上の參考品などと稱する狹い意味のみでなく、鄕土に關する史料として、考古學上の參考として、又國土愛護の目標として、實に貴重なるものであること疑無い。我大八島國を神代の昔から彩れる山林は、一部は人生の爲に利用するもよからうが、一部は古來のまゝに保存して、有し昔を偲ぶよすがとするのは常識ある國民にとつては必要なことであらう。人の手に成つた工作物でさへ、後世再び得難い傑作は、尙且國寶として保護さるゝのに、大自然の手に成つた入神の作である天然林は、一且盡く伐採しては復再び人工を以て復舊することは斷じて出來ないものであるから、所謂「國寶」にも增して尊重す可きものである。それが近年到る所で盛に官民協力しての伐採が行はれ、その後は雜草の繁茂に委さるゝか、左なくば單に金錢上の價値から打算された樹種が植付けられて、神の手に成つた日本の國土が、人の手によつて全く改造され了らうとして居る。寔に物質文明の結果は戰慄す可きものであるよ！

栂の木蔭に少憩してから峯をだら〳〵と下ると、今度は鞘口山の本登りとなる、左手の斜面が急に明るくなつたのは、木立が盡く取去られたが

爲で、日當りの良い山腹は畑の樣に掘返されて、其處には檜の苗木が植付けられ、其の葉が霜にいたんで黄褐色に變じて居るのもいたいたしい。急ではあるが雜木がないので歩行は捗つて、午後一時十五分には鞘口山の最高點海拔一一六四米突と測られた所に到達した。九龍山に連る尾根は容易に辿れそうではあるが、北方の眺望を除いては、尾根其者には大して面白味はなさそうである。

山稜は鞘口山からは急に南に向つて折れ、更に右折して西に向つて御前山に連なるのだが、縱走の困難はこれからが益〻甚しいのである。鞘口の南面を下るのは左手の植付の間を行けば大して面倒はないが、直に爪先が上向く頃から尾根通には雜木が茂り出す。日蔭であるから雪もある。例の足跡は復雪の上に現はれて、木立を通つてついて居る。雜木が所狹きまでに生ひ繁つた中を、時に雪を踏み時に岩に爪づき乍ら進むと、路はやがて西南に向つて急に下つて行く。地圖には傾斜が緩かな樣に記してあるので、初は雜木を推分けるのに氣をとられて、方向を誤つたのかと心配したが、右に栃窪（トチヨセ）澤の源を距て御前山が見えるので、稍意を强うして續行する。脚下のアセビに足をとられまいとして行けば、雜木の枝に帽子を攫はれ、眼鏡を彈き飛され、レインコウトに纏はるサルトリイバラをよけて居ればリュックサックは木の枝に引懸つて、勞力と時間のかゝる割合に足の方は捗らない。

兎も角もクロノヲ澤の發源する鞍部に辿り著いて、ホット一と息入れたが、此處から復雜木の中を上るのかと思ふと、實際閉口せざるを得ないが、地圖を按ずると、あと百米突程も上れば傾斜の極めて緩な尾根を傳ふことになるのに勢を得て、また立木をかきわけて進むことにする。それても路は所々歷然として、昔は相當に踏まれたことを證するが、山の北蔭に廻ると雪に蔽はれて判明しなくなる。或時には巨大なアセビの下をくゞり、或時には重疊せる岩石を踏越えて上るのであるが、足の進まぬ故か距離は意外に遠く、鞘口から一時間程を經つても、未だ豫期した平坦な地には出ない。此の邊に水之戸澤から中尾根を上つて來

る路が合する筈であるのだが、雪に蔽はれて居た爲か、遂に之を認め得なかつた。木立は若木が漸く減じて、折々はミヅナラの老木なども現はれ、右に仙元峠方面の眺めのよい地點も折々はあるが、雪は益〻深くなつて、少くも一尺近くは積つて居るのと、里程の捗取らないのに反比して時間の經過が著しいのに氣を苛立つて、オチ〳〵眺望を貪つて居る譯にも行かない。雪に滑る足をふみしめて進むと、路は下りとなつて、御前山との間に思がけない深い谷が現はれる。路を誤つた筈はないが聊不安な氣に襲はれ乍ら行くと、復上りとなつて岩石などが著しく露出して居る所もある。地圖によつて平坦を豫期した所は斯の如く一上一下のある小鋸齒狀の尾根であつたのである。木立もいつしか樹林と呼んだ方が良い樣になつて、積雪の量は增加して來る。木の間から時折仙元の方面を望みながら、大田和以來嚮導者となつた犬の蹤跡を辿ると、やがて原因の推測出來ない生新らしい血痕が點々として白雪上に印されて居る。左手は雪も淺い樣だが、右手には谷間に下ると二尺近くの厚味はあるらしい、喉が渴くので汚れない雪を握つて、それから滴る水を吸ひ乍ら西へ西へと進むと、行手に當つて丁々と伐木の音が聞える。人の氣色がする。

尾根通りの路はいつか二分して右と左に下るとになつてしまつた。自分は今や御前山頂から百四十米突許下で、此の山を半周する路が、栃寄の方へ下る所に達したとが明瞭となつたので、兎も角も伐木の音の響いて來る右手に下つて見ると、栃寄澤の源流が御前山頂の東北面にて、山巓と其の東北面にある小瘤起の間に喰込んで居る谷の緣に炭竈を設けて、其の附近の立木を燒いて居る炭燒が目に著いた。仰げば正面には例の瘤起が午後の日を受けて、殊更に明るく見える（此の瘤起は陸測五萬の「御」の字の邊に當るもので、東京からも明かに認められる。そして絕巓と此の瘤起との間の凹みの所に大岳山の頂が重なる事になる。其の略圖は本誌第二年第一號八七頁にある）。

炭竈の所に辿り著くと、思ひもかけない人の姿に炭燒は不少驚いた樣だが、天地山の下の大田和

から尾根通し傳つて來た事を聞いて尙更驚いた樣子であつた。兎に角火に當れと言はれたが別に焚火のある譯ではなくて、竈の中にあるのみなのだから大して溫くもない。せめて一椀の湯でもと乞ふたが、水がないから湯は沸さないといふ。雪を藥罐へでも入れて火にかければ造作もないのだと誨へると、そんな事には今迄一向氣が附かなかつたといふ返事を得て、今度は此方が驚いてしまつた。何處へ行くと尋ねる。これから小河內迄行きたいのだと答へると、それなら栃寄澤に沿うて下れば造作もないと云ふ。いや御前山の頂上へ上つてから西に尾根を傳ひ度いのだがと聞くと、それも可能だと教へてくれる。

こんな問答をして居る間に、背中の汗は冷へて寒くなつて來たので、舊路を尾根迄戻つてから西南を指して下り氣味に行く。日向は雪も消えて、赤土の路が滑り易い。水之戶澤の上流には諸所に炭燒小屋が掛つて、青い烟の幾條かゞ呑氣そうに立昇る。山腹には縱橫に小路が走つて、伐り殘された僅許のナラ等が、日一日と數を減じて行くのが、荒寥たる冬景色を彌が上にも悲慘にする。

四五丁行てから右手の斜面に小徑の跡を見附けたので、無二無三にそれを上つて、切拂はれた雜木の株に、蔓草がまつはつたり、雜草が生延びた上に雪の積つた上を、幽な徑を賴に上ると、それもいつか消え果てゝ、あとは何處が絶巓とも見分ち難い頂上をさして、只無暗と上るより仕方はない。木陰もないので雪も軟かく、一足毎に踏込むと、下は竹槍の樣に尖つた若い雜木の切株で、話に聞く地獄の針の山とはこんなかと思はれる。山頂は可なり平で、西から北へかけては若い雜木が生並び、只東方及南方の眺望がある許りである。

山川君が登られた時には三角櫓が樹間に隱見して居たので、雜木を排して其處まで達しられたそうであるが、今は櫓は朽果てたのか一向に姿はなく、一尺程もある雜木の切株の上に雪の積つた當時では、三角標石の所在は全く尋ぬるに由もない。只此處が絶頂であらうかと思ふ所へ著いたのは、大田和から二時間半も經つた午後三時二十分であつた。

下山

眺望も限られた上に、腰を下ろす餘地もない御前山の頂上は、登山の勞力に對しては餘りに貧弱な報酬であつた。腰を下ろせば、話に聞く蓮華往生その儘なので、止むことを得ず雪の中に佇立して居ると、爪先が切れるかと思ふ程に凍えて來るし、流石は寒中だけあつて、午後の三時をまはると、雪を渡つて吹く風がいやに冷たい。自分はいつも絶頂には片時も永く居たいのだが、雪中の御前山頂には殆んど閉口して、衣嚢から取出した蜜柑に喉を潤しながら、多少でも眺のある東南を指して下るより方法はなかつた。然し例の針を植えた様な若木の切株は、下山にも甚だ邪魔なので、右へ右へと廻りながら傾斜の稍緩な山背へと足を運んだ。遮二無二下つて行く中ヒョックリ路の跡が現はれて、而も大田和以來折々見參に入た草鞋と犬の蹤跡とが思も掛けず印されてあるので、今は無意識に此の路を降りて行く。時折倒木や雜草の枯れたのやらが路を塞ぐが、可なりによく踏めて居る。此の路は山頂を稍下つた所に鎭座する社への參路てあるのだが、自分は社よりも下手で路に出合たので、それに前途を急いだ爲に、再び山頂に取て返す餘裕がなかつたから、遂に社に詣でずにしまつたのは遺憾である。山川君の寫された寫眞によると、堂は可なりな大さて、前に粗製の鳥居があり、且側には松や檜の大木が數本ある。

參路を南へ〳〵と下つて、三時四十分山腹を半周する路に出會つた。此處迄來る間に若しや右の方に下る路もがなと蔭に物色したが、一向に路らしい形跡はなくて、元來山頂から尾根通し西に下らうといふ豫定は、藪のひどさと路の絶無との爲に、止むなく山頂から二百米突近くも下らざるを得ないことゝなつてしまつた。此處で山腹を半周する路が鋭い角度をなして居ること地形圖に見る通りであるが、參路は其の角を殆んど二等分する位にして頂上に向ふので、此の地點で路が交叉して略載形をなして居るのである。

尾根傳に西に下る希望を持て居た自分は、此處から直に右に切れて、稍上り氣味に西に向ふ。西南の日を受ける山腹はよく乾いて、雪も僅しか積つ

て居ず、又新しく踏んだ跡もある。四時路傍の乾いた草の上にレインコウトを敷いて、ノイバラの刺を除けながら一と休みして、山頂で食べる筈の食料品を出しかける。此處は大層見晴のよい所で、右は雲取山から大洞山に至る連脈を初めとし、國師ヶ岳方面を望み、多摩の右岸では黒川の鷄冠山が寔によく見える。鷄冠山の左手には大菩薩岳から小金澤山方面の連嶺が屏風の如く立並び、近くは三頭山から左には武甲境の尾根を引き、右には戸澤峯から月夜見山を經て、御前に連なる脈が手に取る様に見える、眺矚や地圖を按ずるに時を費した爲め、結束して出かけたのは四時をすぐること二十分であつた。二二丁下り氣味に行くと、向から犬を從へて來る樵夫の姿が見える。異樣な人影を見てけたゝましく吠える犬を制しながら近づいた男は、此の先に炭竈をしつらへに行た湯久保の炭燒であつた。自分を見るや否や、今時分何處へ行くと怪訝な顏をして尋ねる。尾根通し下つて小河内に出たいのだと答へると、それは到底明い内には六ヶしい、尤も今夜は月はあるが、第一此の先數丁で炭竈のある所が踏めて居る路の終點で、其の先は雪は深し、藪は切拂つてなし、餘程の困難を覺悟して、而も夜遲くなる豫算でなくては六ヶしいと眉を顰める。若し安全を欲するならば、一端澤又に下つてから、藤原から小河内峠を越えて、水窪澤と蛇澤川との間を下れば路も明な上相當に踏めても居やうが、御前からの尾根傳は出來得べくんば斷念しろと勸める。それに近くにありながら遠く見えるといふ見遠山(三頭山)の近所の故か、小河内峠が恐ろしく遠く見える。加之これが朝出かけならばそれ程氣にもしないが、散々藪に苦しめられた上句、而も日は今や落ちんとして居る頃なので、山では强情を張らない自分は音無しく炭燒の忠言に從つて、即座に豫定變更を行つて、御前尾根を小澤(ザワ)に降ることに決定した。

主人と平和な會話を交換する自分を見て、聊か安堵したらしい犬を先頭に立てゝ、再び彼の交叉點へ戻ると、左手からは先刻木を伐つて居た炭燒が、山の樣に炭俵を背負つてやつて來る。此の男も湯久保まで歸るのだそうで、共に連立つて長い

〳〵尾根を東南に下つて行く。路は日々炭燒に踏まれる爲に甚だ明瞭であるが、軟かい雪が日にとけて兎角滑り易い。瞬く間に二百米突餘を下り切つて、一〇四四米突と測られた突起にかゝる手前で、右に切れる路は澤又に下るのだそうだ。今夜中に是非小河内まで行く必要があるのなら、これを降りてから峠越しに行てはどうかと言はれたが、今から四百米突も下つてからまた四百米突も上るのは聊恐縮なので、依然湯久保まで同行することにする。

一〇四四米突の隆起をこえると、茅戸へ出るので、左右の眺望は仲々よい。左は神戸川を距てゝ大岳山を望み、右は北秋川を距てゝ淺間尾根通を眺め、それをこして多摩川と相摸川との分水脊をなす武甲兩國界の尾根が見える。暮行く日暮に逐はれつゝ足を速めて行くと、やがて一〇一九米突の三角點のある小凸起に來る。その頂は晴天には眺望甚よくて、わざ〳〵上つて見る價値があるそうだが、殘念ながら今日は放棄せざるを得ない。

凸起を左に見ながら少し廻ると、佛岩と呼ばれる巨岩がある。但し其の形狀は少しも如何なる佛體にも似て居そうもない。此處から二百米突餘も下るとまた巨巖が顯れる。これは地形圖にも記してあるもので、土人は御前と呼んで居る。御前山崇敬の的は寧ろ此の岩にあるのかも知れぬと思はれる。類似の例を擧げると、上野原の南の鶴島の御前山も、猿橋の南の小澤の御前山も、皆峨々たる岩石の露れた山である。

此處まで來るともう湯久保も間近く、荷を負うた炭燒は左に別れて己の家に急ぐ。自分等二人と前後して山徑を駈下りる犬とは、尚も眞直に尾根を下り行くと、右手にパッと暮色を破つて焚火の見えるのはもう人家に來た印である。同行の炭燒の家に著いたのは五時四十五分で、空にはもう星がきらめいて居る。今夜は月の出も少しは遲れるので、足下の明るい內に一步でも踏出して置かうと、煎茶の饗應も辭し、小澤まで送つてやらうといふ老爺の親切も辭退して、駄馬の通ふ幅廣い道を東へ東へと下つて行く。十分程で上湯久保との分岐點に出で、右に湯久保川を下瞰しながら、

暮れ行く空の星を明として、薄暗い木立の中を、只東へと進むと、やがて路は急に左に折れて、直に小流を渡つてから今度は上り氣味に行く。右に闇を通して澤の音を聞きながら、路の上るのに稍不安を感じながらも之を辿ると、遂には山足を上りつめて急に左折する所に、鎭守の社でもあろうか石燈籠が現はれた（後にこれは春日神社だと聞いた）。人家に近いといふ感じが頭の中に起ると同時に、路はもう下り坂になつて居る。これに力を得て二三歩下ると木立を通して小澤の燈火が二三十も一度に目に著く。小石につまづきながら走る様にして坂を下ると、其處は案の定小澤の部落で、人家の間を通りすぎ、北秋川を渡つて往還へ出たのは實に六時十五分であつた。

小澤に出たはよいものゝ、次の問題は今夜の宿である。此處から一里下つて檜原の本宿（ホンシュク）へ出れば橋本屋といふ相當の旅舍はあるが、復しても火の番の太鼓に安眠を防害されては、第一神經が無事では居まい、其の上翌日三頭へ近づかうといふには本宿では地の利を得ない。低級な旅舍は出來るだけ避ける主義の自分も、山といふ偉大な引力には抵抗しかねて、極めて御粗末とは聞いたが、小澤で唯一の中村屋に足を向ける。眞暗な路を二三丁も上流に向ふと、左側からの二階屋から、闇を貫いて燈光が街道を照してゐる。家號も招牌も目につかないが、旅店か少くも雜貨店でなければ、寒い冬の夕暮雨戸も引かずに居る筈はあるまいから、萬一こゝが中村屋でなければそのありかを尋ねやうと、中硝子の障子をあけて飛込むで見ると案の定これが目ざす中村屋だといふ。爐邊で火をもしてゐた五十恰好の男が「××ちやん、御客樣だよ」と呼ぶと、勝手から感じのわるそうな十八九の女中が顏を出して、兎に角履物を取つて上れといふ。傘や下駄や自轉車や、其他種々の品物が雜然として居る土間の隅に靴をぬぐと、雪溶けの濘るみを歩いた爲に、まるで田の中へ入つた樣によごれて居る。盥と雜巾を借りて早速靴の掃除にかゝる。自分はいつも中等以下の宿屋へ泊るせいか、夫共多く山間にのみ旅する爲かは知らないが、靴の手入を相當にやつて呉れる旅屋には滅多

に泊合せない。米國だつて少し親切なホテルだと勘定の時靴磨料として一回十仙宛の請求はするが、扉の外に置いた靴は、盜難にも罹らず、翌朝迄にピカ〳〵磨いて置いて呉れる。英國などでは登山者の集る旅宿だと、ネイルド　ブーツの手入れなどは隨分よく氣をつけて呉れる。假令少しもかまつて呉れないにしろ、靴其物が自己の手元にあるのだから、隨時隨意に手入れも出來るが、日本の樣に上り口で取上げられてしまつてからは、二階三階の隅からわざ〳〵掃除しに來るのは容易ではない。それはともあれ、洗つた靴の底を乾かすために、大きな爐の一隅に陳取つて、遠火の溫もりを與へる事にする。

先程の男はしきりと生々しい粗朶を爐にくべて山風に吹きはされる煙をよけながら會話の緒をあける。初めは此の家の主人かと思つたが、五日市とかから來た小間物行商人で、元は氷川に住居した事もあり、その爲去る明治三十一年の末に仙元峠で起つた多田、井上兩氏の凍死事件の時には、遺骸運搬等の一行に加はつた事もあるといふ話であつた。

やがて鈍感な女中に案內されて二階の一室に通る。新築して年數を經ない家屋で、疊建具もまづ新らしいのはよいが、障子の紙は可なり猛烈に裂けてゐるし、うつかり萬年筆を轉がすと疊の間へ落ちさうなのに、先づ度膽を拔かれる。菜葉の汁に目差しといふ燒魚で晩飯を終ると、直に風呂に入れと言ふ。暫く休憩してから入浴しやうと、兎も角も寢衣を寬めると、常備品がないので、主人の衣服を持出さうとするが、何分不在なので在場が分らず、隣家から老母を呼んで來て搜し出して貰ふなどいふ滑稽を演じて後、汗になつた洋服を脫いで入浴に行く。風呂の蓋を取つて入ろうとするトタンに山から吹く寒い風に豆ランプが消えてしまつたので、急いで飛込むと底には砂だか小石だかザリ〳〵して居る。加之大分ぬるいのに閉口して、例の下女を呼んで火を焚つけながらランプを點じて貰ふと、驚く可し、清水と豫期した風呂は白水の如く濁つて居る。勿論上り湯などは藥にしたくもないのだから、冷水を手桶に一杯持つて來

て貰ふことにして、煤鮹の様に十分温まつて置いてから、冷水で體を拭いて上る。それでもあとが小ザッパリする丈けしほらしい。

二階へ引上げると、もう茶道具は運去られて、座敷の眞中には岩の様な布團が敷かれてある。寝仕度をして居ると、先程の小間物屋も隣室に來てそろ〳〵床を展べ初める、流石に案内を知て居る丈けあつて、戸棚から氣に入つた夜具布團を勝手に引摺出して、幾枚でも自由に使用して居たが、自分も幸にして數枚の御裾分けを頂戴して、御蔭で温かい一夜を、而も安眠妨害の火の番抜きで、過すことが出來た。

歸京

障子の隙間や孔から吹込む寒い風に目を覺ますと、外では早起の子供が何か大聲で喚いて居る。聞くともなしに耳を聳てると、雨とか雪とか降て居るといふらしい。前夜土地の者が、空が曇つたから、翌日は雪だろうと、有難からぬ豫言を爐邊でやつて居たが、果然的中して雪日和となつたらしい。兎に角雨戸を開いて見ると降る〳〵盛に降る。前面の山腹は愚か、道路の石迄に白く積つて居る。兎に角顔を洗つてから天氣の模様を見やうと、寝衣のまゝで洗面所へ下りて行くと、一向に見當がつかない。尋ねて見ると川端まで雪を犯して行くのだといふ。少なからず閉口して見せると特別の御慈悲を以て金盥に湯を取つて呉れる。其の御蔭で彼の浴室(?)で洗面を濟せて、室に戻ると、夜食と大差のない朝食がションボリ待て居る、食事は忽濟んだが、雪は依然として降る。

雪が積つて景の美しくなるのは嬉しいが、道のわるくなるのと、新雪が踏まれるまで山に登れないのは落膽せざるを得ない。それでも小降りとなる様子なら、思切て小河内へでも越えて、所謂温泉なるものにでも浸つて見やうか、それとも大英斷を以て此の中村屋に一日滞在しやうかと、思案擡首といふ矢先へ、向ひの家の入口へ子供が一人顔を出して、思切つた甲高な聲を張合げて「雪や氷、天氣になーれ」と喚鳴ると、子守の老婆がそれに和して、なまぬるい聲で「天氣になーれ」とやる。自分は老人のだみ聲も嫌ひだが、小兒の騒ぐ

聲に至つては更に嫌だ。殊に此の騒音の掛合が三十分も連續して、未だ已みそうもないのに避易して、到底滯在は覺束ないから、急に退却と確定する。

衣服を更め、荷物を纏めてから、レイン　コウトの襟を立て、トレンチ　キャップを引伸してすっぽりと被り、荷物の上に例の桐油紙の合羽を羽織り、身仕度萬端整へてから中村屋を出たのは、九時を過ぐること二十分であつた。降りしきる雪に人通りもない道を、急ぎ足に行くと、下り氣味の處へ雪で一足毎に滑るので、足の進みは中々よい。半時間許りで蒔沼へ來る。道端に植えられたマダケが、雪の重みで彎曲した下をくぐると、枝がはねかへつて其の度毎に襟元に雪が飛込む。鵝毛の如き雪に眺望は全く妨げられて居るので、只足にまかせて歩くより外に能はない。中里、千足も忽の中に過ぎて、茅倉橋を渡り、やがて北秋川に架した長橋を越えると、間もなくおなじみの檜原村本宿に來る。十時半頃であつたと思ふ。今度は南秋川を渡つて元郷に來ると、左手には秋川の對岸に峙つ泉澤山（馬頭刈山）が雪に蔽はれて朧氣に見えて居る。秋川に沿うた此の道の景は中々捨てたものではない。上流の北秋川は、中流以下では南秋川には及ばないが、二川合流の後は、水量の增加と岩石が蟠居する故か、急に風致を增す様にも見られるのである。しかし路傍に立てられた「秋川水電」の小標木を見ると、此の邊の風景の壽命も思ひやられて哀を催さずには居られない。

小澤から彼是百米も下つた故だか、それとも天候に變化があつたのか、此の邊まで來ると大分に雨が交つて來た。その爲め泥濘と積雪とこねかへした道路は、雨天の東京市中に引けを取らない。然し往來する人數の少いのと、子供が遊んで居ないのとは甚だ以て結構である。その代り人家の前を通ると、十の九までは中で子供の泣聲か、乃至は子を叱る親の聲が聞こえる。晴天の日に、田舍道で目に著くのは、破れ草鞋に馬の糞だとは辻村君の名言だが、村落へ來ると穢い腕白連が往來で惡戯をして居るにも困るものだ。それが今日は家の中で活動して居るものと見えて、監督係りの母親

も中々忙しい。然し日本の親には子供の過失を丁寧に諭してやる親切者も少いのか、一にも二にも叱り飛す。親は叱り罵る機械、子供は喚鳴り付けられる動物以外に親子の關係はない様だ。それで稍ともすると親不孝呼ばはりをする位が落ちで、自分の後繼者である子を、大切に教育し上げやうと心掛ける親は、七千萬とかの國民の、五分の一が親であつたとしても、その中一體幾人あることだろう。Home といふ字の適譯が日本にないのも無理はないので、之を家庭と譯すのも何となく適當でない。其上家の中には埃が舞を舞つたり、庭には草が蓬々たる所も大分にある様だ。叱るが爲に子供を産んだり、養老保險に入る様なずるい目算で子女を育てることが中止されない以上、どうて能率の高上は計れまい。勞働者拂底の叫び聲は、恐らく人口と能率と反比例することを暗示して居るのではあるまいか。尤も此頃は人間の形さへして居れば、四民平等を楯にして、同一の賃金や勞働時間を要求することが流行するのだそうだから、出産率の高いことは、やがては世界第一流の國家を形造る條件になるのかも知れない。しかし近年米國で亞細亞研究を標榜する Asia といふ雜誌を見ると、我が米國は世界四大強國の一員である以上、大に世界の思潮に遲れざらんことを努め、殊に將來殖産貿易に大關係ある、亞細亞の研究を忽にすることは出來ないといふ論據によつて、支那土耳古などゝ並べて、大分日本の國情研究の歩武を進めて居るらしい。或る號には、八十許りの皺だらけの老婆が、孫だが曾孫だかを背負つて居る寫眞を掲げて、下に Unconscious source of immigration problem といつた圖解がつけてあつた。此雜誌の編輯者が、上州田代の様な、三十前後の婦女で十人内外の子供を持たない者は殆んどないといふ土地へ旅したとしたら、恐らく米國はもう日本に占領されたと早合點して、早速氣絶位はするかも知れない。加之田代は醫者の居ない所で、三里先の三原からドクターを呼んで來る日になると、先づ息を吹返す見込はないものと覺悟せねばなるまい。

中山川を渡つて乙津に入る。地圖上で見るとそ

れ程でもないが、歩いて見ると此の村の長いには全く驚くの外はない。それに雪は殆んど止んで雨に代つてしまつたので、道路の歩き難いのに氣を苛立つて、あせればあせる程猶更道が遠い様にも思はれる。それでも十二時頃には西戸倉の部落を通過して、秋川の一支流盆堀川（ボンボリガハ）を渡り、直に刈寄（カリヨセ）川（ガハ）の小橋を渡つて、爪先は大分上向いて日向峯續きの杉木立の中を上ることになつた。僅か二三寸の積雪だが、新雪で軟い爲めか足が滑り易く、些でも上り道となると中々に時間が掛る。右方逆川（サカサガハ）の谷には雲が徂徠して、其の間には青黒い木立が隱見する。一としきり上ると山稜に出て、左に小和田の部落が見える。やがて今熊山の背面が眼前に峙つのを見る頃から、路は稍下り氣味になるが、疊ヶ原の西北端に出ると、急に打開いた平地に出て、山間とは思へない地勢になる。初めは小溝に沿うて田や畑の緣を行くが、やがて疊ヶ原の人家に近付いて、豚の唸り聲を聞き乍らだら〳〵と上ると、今熊山への路が分岐する所に出るが、其處には六尺許の石碑を立てゝ、正面には左今熊野山道と筆太に刻み、右側には右戸倉檜原道、左側には弘化三丙午二月吉云々と誌してある。時てさへ居れば久しぶりで今熊山に登つて見たいのではあつたが、雨天では興味もあるまいと斷念して、直に八王子への街道に向ふ。今熊山の扁額を掲げた鳥居をくゞり、今熊山大權現是より三十町云々の石碑に昔の隆盛時代を偲んで、上川口の馬車發著所へ著いたのは零時を過ぐる四十分で、可なり急行した心算ではあつたが、道路の悪い爲に、小澤から三時間と十分を費してしまつた。

晝食前の自分は此處で一と休して、濡れた足を暖めもしたいと思つて居ると、八王子行の馬車が丁度出るから直に乘れと盛に勸められる。しかし殆んどずぶ濡れの體なので、他の乘客の迷惑を慮つて躊躇すると、その遠慮は全く無用だからと馭者が請合うたので、次の馬車が何時に出るとも定め難い例の調子を知らぬでもないから、兎にも角にも乘車することにしてしまつた。

馬車が走り出して、といふと大層景氣がいゝが實はガタ〳〵動き出してから、ものゝ一時間もた

つ內に、雲も收まりかけて、雨もそろ〳〵小降りになつて來た。車の端に座を占めた自分は、雨除の間から後を顧ると、御前や大岳もいつか顏を出して、それには美しく新雪が輝いて居る。車の進むにつれて、天氣も益〻恢復して、やがては仙元の連脈まで顯れて來る。同乘者に附近の山名を尋ねて見ると、一番高いのが大嶽山だと答へたが、他の山に至つては名も知らない樣な調子だ、尤も五日市あたりの絲屋だといふからには、山に親しみのないのは無理はない。緩いのを以て有名な馬車も、二時少し過ぎには萩原橋を渡つて、本郷横町の發著所に到著した。此處で小憩しながら汽車の時間表を見ると、八王子發中央東線時間と同じく中央西線時間と揭出してある、一寸は不審であつたがよく見ると、これは上りと下りといふ意味に外ならぬと判明したので、所謂中央東線午後三時二十八分とある列車に間に合せる爲め、荷を纏めて出掛ける。八王子の長い市街を端から端迄歩いて、小一時間もしてやつと停車場に著き、豫定の列車に乘込んで東に向ふ。淺川の鐵橋と多摩川の鐵橋との上からは、西から北に連なる山峰が盡く眺められて、而も低い丘陵に至る迄銀白の新雪を頂いた壯絶な景色は、此の旅行の最後の Treat であつた。（武田久吉）

○天然林保護に就て

五ヶ年に亘る世界的大戰亂はあらゆる方面に、大なる刺戟を與へて、物質的にも、精神的にも、殆んど世界の面目を一新したかの觀がある、けれども勞働問題、經濟問題等物質的方面の革新運動の頗る活潑であり猛烈であるのに引換へて、一層根本的なる精神的文化運動の微溫い事は、實に齒痒い感じがする。

天然林の保護などと言ふ問題は、現代の社會には頗る緣の遠い問題のやうに聞へるかも知れないけれども、實は頗る緊急なる問題だと信ずるのである、諸種の事業の急激な發達に伴ふて天然の利用され、殊に森林の伐採さるゝことはたいしたものである、天然の利用され、森林の伐採されることは惡いことではないけれども、之が爲めに太古

のなゝの處女林が永へに滅亡し、或は金錢に替へ難い貴重な風致を傷けられることは遺憾千萬である。

此際、社會の識者に依て適當な保護方法を講じ、利用すべき範圍と、淳化すべき範圍と、又絶對に保存すべき範圍とを分ちて、國土の美を失はないやうにすることは、精神上に絶大な利があるのみでなく、將來農工發達の上にも甚だ必要のことゝ信ずるのである。

天然紀念物保存事業は、戰前に於ても獨逸、亞米利加合衆國をはじめとして、歐米の文明諸國では既に其必要を認め、公私の團體を設けて、それ〴〵保存の方法が講ぜられてゐる。我國に於ても志賀重昂氏の如きは夙に其必要を唱導せられ、其後德川頼倫侯、小鳥烏水氏、三好博士、其他の先覺者に依て力說せられ、明治四十四年には早くも頼倫侯等の手に依て史蹟名勝天然紀念物保存に關する建議案は提出され、次て衆議院からも亦、同樣の建議案が出て何れも可決され、又別に頼倫侯等の發起で、史蹟名勝天然紀念物保存協會が設立されて之が實行及趣意の宣傳に努力されてゐる、又三好博士はあらゆる新聞雜誌に天然紀念物保存に關する論文を寄稿して、之が思想の普及を圖られ、又別に「天然紀念物」と題する單行本を著して隨分熱心に唱導せられつゝあることは、諸君の熟知せらるゝ事實であるが未だ其機が熟しないためか政府に於ても民間に於ても根本的の保護策は未だ講ぜられてゐないやうであるから些か蛇足を添へて我山岳會員諸君と共に之が實行方法を講じたいと思ふのである。

一體吾々が天然物に接する時は端的に一種の快感を得るものであるが、見れば見るほど味へば味ふほど、その含蓄ある美觀に感じ入つて恰も法悅を得た人のやうな恍惚に暫し我を忘るゝことさへある。詩人や畫家や博物家には此種の經驗は幾等もあることであらうし、よく登山する人々や深林幽谷を好んで跋涉する人達は此感じを一層强く深く體驗することであらう、天然の美は實に驚異である、奇蹟中の奇蹟である、實に完全な藝術品である。帝展院展國展二科會等の作品全部を集めて

も天然の一傑作品奈良春日山一個にさへ及びもつかぬ程である、決して誇張でも何でもない、ソロモンの榮華の極みも百合一片の花に及ばないと言つたとて別段驚くに足らない。

然るに人間の天然物に對する審美眼が未だ餘りに發達しない中に天然物の利用に就ての智識が長足の進歩を遂げた爲めに、審美的に無限の價値を有する山林は利用的に換算せられて慘めな破壞を蒙るやうな事實を見るに至つた。此儘にして十年も經過したならば我邦には太古の儘の處女林が全滅して終ふかも知れない、天然物の貧弱な國はたとへ强國であらうが文明國であらうが決して立派な國とは言へない。

吾人は天然物の貧弱な强國に生れるよりは天然の美しい野蠻國に生れた方が幸福だと思ふ位であるが幸にして文明國であり、天然の勝れて豐潤絢美を以て聞えた立派な國土に生を享け得た事を心の底から欣ぶものである。此幸福と誇りとを永遠に失はないやうにする爲めには國是として天然の保護に努めなければならないと思ふ。

社寺の境内に屬する森林や、昔からの所謂名所古跡の風致を保つ爲めに必要な森林などは法律を以てそれ〴〵保護方法が講ぜられてゐるからその方面に就ては別段心配を要しない。特に著名な老樹名木を保存することや、學問上に價値の多い特種の動植物を保護することは無論必要ではあるが是等は別段廣大な面積を要するわけでもないから比較的行はれ易いのであるが多數の老木大樹を藏し、貴重なる學問上の參考品をも蓄へ、又風致上にも絶大の價値を有する大森林を永遠に保護するといふことは最も必要であるにも拘らず一方から見て物質的の價値標準から打算され利害が衝突し易いので、餘程の英斷を以てしなければ到底行はれ難いであらうと思はれる。

唯何でもかでも利用々々といふ考を以て天然物を見やうとする現代に於ては崇高な理想から割り出した保護論などには共鳴しないかも知れない。けれども遠からずして聰明な眼を見開いてしみじみと造化の大藝術に打ち向つて嘆美の叫びを發する時代が來るであらう、その時になつてからあ

ゝ惜しいことをしたものだといふ嘆息を漏らさないやうに今から根本策を講じて置かなければならない。

維新當時貴重な美術品を二束三文にたゝき賣つたり、立派な堂塔伽藍を低級な經濟眼から破壞することを企てたりしたものださうであるが今日では一幅の名畫に數十萬圓を投じても爭ひ求めやうとしてゐるではないか。

吾人が今日多少の經濟的犧牲を拂つても風致上學問上の一大寶庫たるべき大天然林の廣大な保護區域を設定するの必要を力說するのは決して狂氣の沙汰ではない。

今自分の氣付いて居る、保護區域に編入すべき必要ある箇所に就て述べて見やう。

北海道のマクカリヌプリ（蝦夷富士とも云ひ別に後方羊蹄山とも稱する山）は海拔六千四百尺餘の立派な圓錐形火山であつて今のところでは大部分は天然林に蔽はれてゐて函館札幌間の列車中から眺めると實に秀麗な山岳であるが、學術研究上から言つても種々の高山植物、寒帶植物等の珍らしい種類に富んでゐるから天然のまゝを成るべく完全に保護しなければならないと思ふ、又石狩嶽の如きは深山中の深山であり幽谷中の幽谷であるから何時までも北海道の神秘境として保存されたいものである。又釧路の雌阿寒嶽、雄阿寒嶽及阿寒湖一帶の地域は火山及火口湖の面白い標本であり、珍奇な動植物にも富んでゐるから附近一帶の森林は永遠に保存することにしてもらひたいものである、是等北海道の山林は大抵國有林であるから政府の方針さへ定まれば保存することはわけもない話である。

東北第一の神仙境たる十和田湖は、中尊寺と共に東北人の誇りであり、國土の至寶であるから風致の保護には充分に念を入れ、殊に湖畔の森林は大切に保存しなければならない。

槍ヶ嶽、穗高山、梓川溪流附近一帶の地域は我邦に於ける造化の最大傑作であるから思ひ切つた大區域を區劃して最も完全に保護されなければならない。梁楷の雪中山水が二十萬圓にも賣れ、雪舟探幽光琳などの傑作品が十萬圓以上にも價する

今日穗高の一峯のみが十億圓でも猶ほ廉い位のものである、尤も風景を金に換算して價値を說いたりすることは餘り感心しないが、とにかくかゝる貴重な造化の傑作品を傷けることは、法隆寺の壁畫に墨を塗つたよりも以上に罪惡である、然るに近年上河內附近の森林が大分伐り拂はれて少なからず美觀を傷けられたのは遺憾である、今後は何處までも神聖穗高の名を傷けないやうに根本的に保護法を講じなければならない。

加賀白山の裏山即ち飛驒の大白川溪谷は處女林の神秘的な美觀と溪流の淸冽奔放とを以て聞えてゐる、平瀨の奥地獄谷に至る延長五六里の溪間には原始的な匂が漂ふてゐる。日本一の大瀑布白水の瀧は實に此谿の上流にあるのである、雪溪もあれば溫泉もあり、種々の珍奇な動植物を無限に藏してゐる、白山が高山植物の豊富な點で白馬山と共に日本の高山中の双璧であることは諸君が先刻御承知の事實である、依て大白川から白山へかけて廣大な絶對保護林を區劃し、天然の大博物館を成すやうな計畫を立てることは極めて必要であらうと思ふ。

立山中腹の五葉坂は五葉の松の老木が最も著しく發達を遂げ、喬木の生態美觀としては殆んど間然する所のない位に天然美を發揮してゐる、大和の山上嶽彌山等は殆んど絶頂まで喬木が立派に繁つてゐる、阿波の劍山は植物の種類の豊富を以て聞えてゐるが中腹のブナ、ケヤキ等の闊葉樹林、山頂近くの樅の天然林は實に美觀中の美觀である、播州笠形山は標高僅か三千尺ばかりの小山岳に過ぎないが山麓から中腹以上にかけて杉、樅等の鬱くべき大木を以て滿たされてゐる、是等はすべて山岳景觀を作る所の大切な森林であるから何れも完全に保存されなければならない。此外年々多數の登山者のあるやうな名山は山腹溪谷を併せて其森林は出來得る限り保存方法を講じて貰ひたい者である。又朝鮮に於ても金剛山、白頭山等には大區域の保護林を設けて風致の美を保存すると同時に朝鮮固有の植物を學術的に研究するの資料を蓄へたいものである。樺太の寒帶植物林、臺灣の熱帶植物林も同樣の目的を以て成るべく其特色を發

揮した美林を殘して置く必要があらう。

以上述べたやうな地域は、森林を保護すると同時に全部禁獵區として鳥獸其他の動物をも併せて保護するがいゝと思ふ、以上の森林の多くは國有林に屬してゐるものが多いだらうと思ふがさうでないものは國庫から支出して全部買收し、國有林として置くか又は縣の所有とするの方法を講ずるがいゝと思ふ。

又日光、鹽原、妙義山、箱根、奈良の春日山、高野山、吉野山、比叡山、京都東山、嵐山、宇治、嚴島、小豆島の寒霞溪、島原の溫泉嶽、耶馬溪等の如き面積が廣くて、人工的施設の多く加はつた土地は、風致の保護に就ては專門家の研究を俟つて最善の方法を講じなければならない。是等の地域は大抵風致保安林に編入されてはゐるがさうでない部分は成るべく早く國有にするなり、又は縣の所有にするなりして永遠に保護策を講ずるがいゝ。

神社佛寺の境內は幸にして今日まで健全に保護されて來たから、到る所に美しい鎭守の森や、ゆかしい山寺などが多くあつて、鄕土の風致上、又地方の風致上にも大なる效果を與へてゐることは喜ぶべきことであるが、近年無謀な神社合祀奬勵の爲めに立派な木立や森林の取り拂はれたものが少くない。又社寺の境內にして國有林に屬してゐたものを、農商務省では管理の困難などいふ理由から其地方に拂下げ、拂下げを受けた部分はすぐに伐採して終つたといふやうな結果、地方の風致を荒廢させたことも隨分夥しい、是等は爲政者の大なる過失と言はなければならない。

一地方の風致上大切な山林原野等は、地方自治團體が買收して風致保安林とするのも良いであらう。

以上は主として學術上、風致上、森林、其他の天然物保護の必要を述べたのであるが、水源の涵養上森林が如何に大切なものであるかと言ふことも諸君の充分に感ぜられてゐることゝ思ふ。發掘し得べき石炭の埋藏量は限りがある、今後百年もすれば我邦の炭山は殆んど盡きてしまふであらうといふことは專門家の說の略一致する所であるが、その代りに水力電氣事業の發達は將來素晴らしい

進歩を來すであらうと思はれる、幸にして急傾斜の溪流に富んで居る我邦は、水電事業の發達に頗る適してゐるのであるから水源の涵養といふことは殖産興業を圖る上から言つて重大な問題である。急斜面の山林や地味の瘠せた山林を濫伐する時は其回復は容易でない、一旦豪雨にても洗はれやうものなら急斜面の伐り跡は山崩れがしたりなどして、崩壞の部分は次第に擴がり、再び元の森林を見ることが出來なくなり、隨つて豪雨の際に下流の蒙る損害は恐ろしいものであるのみでなく、雨の止んだ後は急に水量が減じて終つて、水田の灌漑にも水力電氣等の事業にも少なからず不便を感ずるに至ることは明らかである。

一國の文化を健全に發達させるに就て、天然の保護といふことが如何に重大な問題であるかといふことは以上述べた通りであるから、此際我山岳會に於ても何とか方法を講じなければならないと思ふ、會員中から若干の委員を選んで具體的の方法を研究し政府に建議して、先づ大區域の保護林を制定したいものである。保存すべきは保存し、植林すべきは植林して、此美しい國土を益々美化し、殖産興業上にも國家百年の大計を定めると同時に一般の民衆に向つて天然美に對する鑑賞眼を開いてやり、天然保護の必要を知らしめなければならぬ。天然を征服するばかりが文明の發達ではない、天然を愛護するといふ精神を失はないやうにしなければ決して立派な文化を築き上げることは出來ない。

國土の美化は精神的新文明建設の根本策である。美しい國土に敎養ある人格のある紳士淑女を滿たしめ、美しい國土に健全な殖産興業を發達させ、美しい國土に偉大な藝術を產ましめて、美しい國土に美しい社會を現出させる。是れが吾人の理想である。（大正九年一月十四日稿了　古家實三）

○雛鶴峠

『山岳』第十三年第三號に雁ヶ腹摺に關する卑考を掲げた時、鳥類にちなんだ山名の例を擧げたが其の中に雛鶴峠も鳥に關係あるものとして引用したのは（六七頁）、甚だ不當であることを大方に謝

さなければならない。實はあの原稿執筆後、此の峠の名は鳥に關係のないことを知つたのであるが、校正の際つひそれを訂正するのを失念してしまつた次第である。其の後再度雞鶏峠附近に旅行して多少の材料を得たので、こゝに其の大略を記すことゝした。

雞鶏峠は甲州南都留郡秋山村の無生野から盛里村の曾雌に越える坂路で（陸測五萬上野原圖幅）、一に大ダミ峠と呼び、昔から秋山と朝日曾雌との交通路である。

此の峠は丁度秋山村と盛里村との境界に當つて居るのだが、大ダミといふ名は秋山でも盛里の方面でも唱ふるので、其の意義は、私の推測では、次の如きものかと思ふ。即ち、秋山と盛里と道志と三村の境に當るタンノ入リ山（一三一〇米）から、秋山と盛里と北都留郡の大原村との境の楢山（無生野にての稱呼）一名櫟指（朝日馬場にての稱呼）といふ高距九八二米の峯へ續く山脈中、此の大ダミが一番低い鞍部なので（海拔約七九〇米）、最初は大ダワミと名付けられたのが、いつか訛つて大ダミとなつたものらしい。此のタワミといふ名詞は、郡内及郡内に近接した相州の一部では、今でも往々用ひるが、多くはトーミと發言する樣である。

次に本題に入つて雞鶏峠なる名稱について述べるが、これは雞鶏姫なる女性が通過したといふ傳說から起つたもので、決して鶴の雛鳥には緣のあるものではない。『甲斐國志』卷之五十四、古蹟部十六ノ下を見ると左の記事がある。

「〔雞鶏姫塚〕曾雌ヨリ秋山へ越ユル山路ヲ雞鶏峠ト云フ（一日大ダミ峠）山路ノ傍ニ古塚アリ塚上ニ小梨子ノ木ヲ植ウ土人相傳ヘテ雞鶏姫ノ塚ト云フ是ヨリ下壹町許ニ又古塚アリ姫ノ從者ノ塚ナリト云フ然レトモ此姫ノ何人タルヲ詳ニセス」

處で、盛里村で聞質す處に據ると、雞鶏姫は、護良親王が、建武二年七月二十三日に鎌倉藥師堂ヶ谷の土牢中で淵野邊伊賀守義博に弑された後、大塔宮の御首級を拾ひ取り此地に携へ來つた者で、宮の頭骸骨は現に朝日馬場の石船明神に祀られてあつて、而も舊曆正月十五日の祭禮には、玻璃函

に藏められた骸骨を、庶人に禮拜を許すといふことである。

大塔宮の御最後は『太平記』に見える記事以外には大して據る可きものもなく、遠くは『鎌倉志』、近くは『新編相摸國風土記稿』の如き書物も皆太平記を引用して居るが、それには、

「淵ノ邊伊賀守、藥師堂ヶ谷へ馳歸テ、大塔宮ヲ刺殺シ奉リケルニ、御眼生タル人ノ如シ、淵ノ邊是ヲ見テ、斯樣ノ首ヲハ、主ニハミセヌ事ソトテ、側ノ籔ノ中ヘソ、投捨テヽ、歸リケル、理智光院ノ長老、カヽル御事ト、リ及候トテ、葬禮ノ御事、取營給ヘリ」

とある。そして宮の屍を理智光寺の住職が埋葬した其跡へは石塔を立てゝあるが、御首級を雞鶏姫が郡内の山中に携行た事柄は、史に徵するに由ないのである。

盛里村方面は、私の研究區域外であつた爲めに同地跋渉の際傳說や舊記を取調べる時間を都合することが出來なかつたので、私はこれ以上の材料を齎歸ることを得なかつたのは遺憾であるが、他日再三同方面に出掛ける豫定であるから、更に幾分か多くの材料を得ることが出來ることゝ信ずる。

雞鶏姫が、大ダミ峠を通過したといふ傳說は、專ら盛里村や秋山村で唱ふる處であるが、道志の方では道坂に雞鶏峠の名があると傳ふる者もある。そして道志村から道坂峠へ登る道の左手に、雞鶏姫を祀つた祠があつて、其の側の澤を雞鶏樣の澤と呼んで居る。

斯く郡内の一地方で、雞鶏姫を云々する以上、何か其の傳說の原となる可き事實の存在しないとも限られないし、萬一史に漏れた事柄を物語るものであつたならば、甚だ以て興味ある事と思はれる。

假に雞鶏姫が鎌倉から此地に落ちたとすると、何れの道によつてであらうか？　若しも鎌倉間道として知らるゝサガゼ澤通り（又城ケ尾峠）を經て、相州中川方面から、道志の神地へ出たものとすれば、そこから道坂を通過しない限りてはない。

石船明神の社は、盛里村の馬場にあつて、陸測

五萬に村役場の記號のある邊てある。可なりな森の中に鎭座する社は、壯麗と迄は行かないが、村の鎭守として恥しからぬものである。『甲斐國志』卷之七十二、神社部第十七下に、

「〔石船明神〕朝日馬場村　本村產神ナリ社地六畝二十歩除地、祭禮七月朔日云々」

とあつて、祭神を記さず、且つ私が聞いた祭日を舊曆一月十五日とするのとは甚しく異つて居るが『甲斐國志』編輯の時代と現今とは祭禮日を異にするものと見える。同書によると、朝日には正月十五日に祭禮のある社はない樣だが、卷之十八、村里部十六上に左の如き記事を見るので、關係の有無は別として、兎に角參考の爲めに抄出する、

「〇朝日曾雌村大平神願戸（ジクロンド）　久保（盛里村）
一高百石四斗一合
戸百貳拾　口五百八拾六　男貳百九拾　女貳百九拾六　馬三拾五
西ハ神願戸原大平ノ山足、馬場村西南ハ猿燒、一ノ澤、中ノ澤、本澤等ノ山峰並ニ戸澤村ト界シ東南ハ岩殿澤ノ峰ニ至リテ道志ト界シ東ハ大〇ダミ峠ヲ限リ秋山ノ北ハ山峯續キ馬場ト界ス古ハ曾雌、馬場、與縄、井倉、朝日小澤、戸澤、玉川、合七村朝日鄕ノ一村ニテ文祿撿地ニ高五百四拾五石一斗五升也寬文撿地ノ時分レテ七村トナル南ノ方山中ニ入ルコト五町許道志口ト云所アリ杉ノ大木アリ土人相傳フ古正月十五日七村ノ道祖神祭典ノ神幣ヲ集メ此老杉ノ下ニ埋メシコトアリ夫ヨリ以來七村ニ限リ道祖神祭祀ノ儀ナシト何ノ故ナルニカ不レ詳武川筋ニ曾雌民部助景同新兵衞秀定ト云フ者アリ若シクハ其先ハ此地ヨリ出テシニヤ此ヨリ東シテ雞鶴峠ヲ越エテ秋山村無生野ヘ出ヅ此間山路一里八町」

尙序を以て、同書卷之三十六山川部十六中に所載の、大ダミ峠に關する記事を抄出して、此稿を了ることゝする。

「〇上略　此ヨリ戌ノ方ヘ峰續三町餘ニシテ雞鶴峠ニ至ル一ニ大〇ダミ峠ト云フ未申ハ朝日曾雌ニ屬シ日向船ト云フ丑寅ハ秋山ニ屬ス曾雌ヨリ秋山ノ內無生野ヘ越ユル坂路ナリ昇降一里八町、西坂ノ中腹ニ古塚アリ山下ニモ亦古塚アリ道ノ南ヲ大〇ダミ原ト云フ此地ヨリ往々古瓦ヲ出スコト

アリ峠ヨリ戊亥へ四町許ニシテイヤキ峠ニ至ル是會雌ノ支村大平ヨリ秋山ノ無生野へ越ユル坂路ナリ昇降壹里、峠ニ古松アリ（下略）」

上揭の文中イヤキ峠とあるのは、大ダミ峠東側の中途から北に分れて、イヤゲ澤といふに沿うて約八五五米の鞍部を越ゆるもので、陸測二萬の圖（秋山村）には一部分示してあるが、五萬の圖（上野原）には出て居ない。五萬の圖に點線を以て記してあるのは、楢山澤について上る楢山峠の路で、イヤゲ峠に比しては路も惡く、通行は稀だといふ。イヤゲ峠は此の楢山峠と大ダミ峠との略中央を過ぎるもので、盛里の大平（土地ではオホダヒラと言はずに、オヒダヒロと言つて居る）への通常交通路である。イヤゲにあてる漢字は不明である。そしてアクセントはイにある。通例「峠」といふ字を附けずに呼ぶので、此名は無生野でも大平でも同樣である。（武田久吉）

○初冬の赤城

一

思ひがけない休暇を得たので、少し時候遲れではあつたが赤城へ登つて見た。登りは快く晴れた日で、冬仕度に身を堅めて行つた私は汗を流した程であつたが、次の日山を下る折りは、反對に劇しい霧が起つて、寒の降る寒い天候と變つて居た。

足尾線の沿道の溪は、水こそ汚れて居るが、秋は紅葉の美しいことであらう。その溪の右岸を迂曲して走る汽車の窓から、折々赤城の姿が行手に見えて居たが、やがてそれも間近く寄つて來る山に隔てられてしまつた。

空は紺碧に澄み渡つて、雲を騷がす風もない。水沼驛へ下り立つた私は、小春日和の暖かさに上氣しながら、暫く美しい空に見入つてしまつた。

驛前の料理屋に休んで晝飯をつかつて居る間に人夫を周旋して貰ふ。暫くして四十近い丈は高いが物ごしの低い男が入つて來た。御案內致しませうと云ふ。此の男に僅か許りの荷を背負はせて出發する。午前十一時頃であつた。

すぐ裏の溪に沿ふた小徑を登つて、小高い丘陵を一つ越すと、右の方から道が合する。落葉が散

も敷いて、カサコソと歩く度に音を立てる。小鳥の聲が聞く者の心に秋の靜けさを味はせるやうに響く。何と云ふ美しい暖かい晩秋の日であらう。私は長い間斯う云ふ美しい晩秋の日のあるのを忘れて居たのだ。

道端には枝もたわゝに實つた柿の木が幾本もあつた。赤い實は熟れて落ちて畑も美しく色どられて居る。「烏も馬鹿てないと見えて澁い柿は喰はねえ」と男は云ひ乍ら私の方を見返つて笑つた。サクを起した麥畑の間に鶉やテウマが鳴き乍ら飛び廻つて居た。

右手に小溪を見乍ら半時間も行くと一の鳥居に來た。赤城は鳥居を越して高く聳えて居る。正面に黒檜が最も高く見え、左右の斜面がなだらかな裾へ續いて行く。此處のあたりから見ると仲々に大きい。

また同じ樣な丘陵の道を半時許り歩いて行くと新開と云ふ村を低く見下ろす山の中腹に出る。南に開けた暖かさうな土地であるが、「此處の奴は皆惡い奴だ」と人夫は云つた。快い日の光は空一杯に溢れて、額には汗が浸み出て來る程である。やがて道は針葉樹の生ひ茂つた森の中へと入つて行く。

二の鳥居を過ぎて、溪川を右に渡り越すほとりには樵夫が五六人居て、直徑五尺もありそうな杉の大木を挽いて居た。木の香の高い鋸くずが、其處らに堆く積つて居た。やがてまた道は眼界の展けた高地に出て、再び森の中に入つて行く。Z形の峠路はそこから始まる。

新らしく編んだ大きな竹籠を背負つた十二三人の一隊が先きへ歩いて行くのに出會ふ、子供も交つてゐる。大沼で切り出す氷の貯藏に使ふ木葉掻きに行く人夫達だそうである。籠の中にはどれも米の袋と蒲團とが括り付けてあつた。「今朝は水沼から鐵索工事の人夫が七十人も登つたから、山は賑かな事でせう」と云つた、あの茶屋の主婦の言葉が想ひ出された。

二つ許り道を横切つて流れ落ちて行く溪川を越した。木々の梢は葉が散り落ちて露はな態をして居るが、道は御蔭で大變明るい。濕つた木葉を踏

み付けて、劇しい岩角を避け乍ら登つて居ると、暖かい日光は背に落ちて、初冬とは思へぬ長閑な感じが湧いて來る。勢のない駒鳥の聲が一度聞えたきり、小鳥の聲も絶えてある。只小春日和の氣持ちよい空氣が、シーンと音もなく流れて居る許りである。

振り返ると始めて高く來た事が分つた。遠く關東の平野が右手に見透かされるし、水沼の近くの丘陵、道々の村なども小さく見えて居た。道はぢき天神峠の頂上に出る。水沼を出てから三時間半を費して居る。

峠の頂に立つて、西も東も明るく開けた眺めの中に暫く疲れた足を休めた。眸を廻らして大沼の方を見ると、木の葉散り落ちた露はな樹林、白樺の木立ち等の間に、鏡の樣に澄んだ水の色が見すかされる。霜枯れた草の間に眞白な雪の溜つた所も見える。諸いそれ等の景色の中に赤城神社の杉の森だけが、コンモリと綠に凝つてゐる。

二

宿の下駄を突かけたまゝ、神社の裏から大沼の畔に出て見た。遠く近く湖を圍む外輪山の色も、焦げた樣な霜枯色に夕日が落ちて、冷たく淋しい靜かな波一つない湖の面は、その山々の姿を倒に、天神山の長い影を顯したまゝ、夕日のたゆたふ色をも映して居る。小鳥の聲が時々淋しく聞え、遠い林の中で人夫達の叫ぶ聲が靜かに傳つて來る。息が白く見える程に冷たい。水面から起つた靄はいつか白樺やハシバミの梢を包んで、夕陽に紅き黑檜の二つの頭を殘したまゝ、四邊を黃昏の淋しさの中に沈めてしまつて居た。白い樹皮の纏り付いた白樺の太い幹に近寄つて見ると、そこもこゝも雨にぬれたかの樣にしつとりと濕つて居た。

その夜は美しい月の光が、立ち罩めたさ霧を透して山々の上に水の樣に流れた。その薄青い光の中に白樺の木立が浮きだして見えたり、境界のない水の光が梢をすかして、朧銀の面の樣に見えたりした。こみあげて來る興趣に堪えかねて、私は一人寒さに顫へ乍ら宿から出て、湖のほとりに步いて行つた。月明にほの青い夜霧を罩めた、しつとり濕つて居る冷たい靜かな空氣が私の胸に浸みて

來た。寒さの爲めとも、嬉しさの爲めともつかぬ身顫るひが、身體中を動かして止まぬ。足はいつか天神峠の方へと辿つて居た。山々はたゞ薄黒い闇の塊りと見え、空に流れる月の光がさ霧に透かせるあたりを青ひ紗に包み込んで居る。斯んな美しい靜寂の夜、斯んな壯重な感情の昂奮が、私の一生の旅の中にまたと來會することがあるだらうか。山々の靈が何ものかを私の心に囁き續けて居た。それは此の世の最も偉大な人の言葉以上の言葉で、私の張りつめた感覺に物語つて居るのであつた。私はたゞ一つの「感じ」そのものに過ぎないかの樣に、社會も自分も忘れてミステリアスな世界の中に醉ひしれて居た。屑までぐつしよりと濕つて私は宿に歸り付いた。

三

窓をすかして月に明るい戸外を見て居ると、神社の杉の木立ちに眞赤な火の玉が一つ飛んで來た、氣になるので、その消え込んだあたりを見つめて居ると、また一つ流れる樣に飛んで來て消える。闇を瞶めて居た眼の疲れの爲めかと思ひ乍見て居ると、また一つ眞赤なのがこんもりした梢の中に消え込んで行く。妙な氣持ちが涌いて來る。首を出して、飛んで來た方を辿つて見ると、そこに宿の湯殿の煙突が冴え〳〵と月の光を浴び乍ら立つて居た。

夜明け近く夢ともうつゝともなく、軒を叩いて通る時雨の音を聞いたが、何時か白ら〳〵と明けた朝になつて眼が醒めると、障子の表には霧のさわる氣配がする。氣になるので手を延して障子を一枚開けて見ると、昨夜の月の美しさにも似ぬ時雨空で、重々しい雲は冷たい色をして垂れこめて來て居た。黒檜の肩に立つて、雪に光る武尊の雄姿を眺めやうと思つて、今朝を樂しみにして居たが、之れでは駄目らしい。

澁川へ下ることはとめられるまゝに止めて、前橋へ下ることにして、宿で貰つた油紙を背に、時雨の降り止んだ間を見て出發した。雨にゆるんだ霜溶け道の滑べるのを杖に支へ乍ら、天神山の裾を大沼の岸に添ふて、落葉の香りの中を冷たい空氣に顏へながら歩いて行つた。白樺の梢にまつは

り付いては、また流れて行く濃い霧の音とも思はれぬ微かな囁きが、高山の幽遠な寂漠な感じを傳へて來る。樺の露はな梢から垂れる霧の凝結した玉は、私の帽子や背に淋しい音をたてるのであつた。

右に右にと道を登つて行くと、白樺の大木がそこゝに淋しく霧の中に浮ぶ、淋しい草原の傾斜地に出る。右も左も前も後も僅かの距離の向ふは霧の幕に包まれて、夏の美しい長閑かな新坂平の趣はまるで失せて、荒寥たる高原の恐ろしい風貌と變つてしまつて居る。右に右にと道を辿つて行くに連れ、霧の飛ぶのが劇しくなつて來た。時には冷たい霧が息をも凍らせるやうに吹き捲つて來た。背の油紙がバタ〳〵とあほりかへる、進むにもおづ〳〵として、やゝもすると吹きつのる霧風に立ち止まつてしまつた。呼吸が迫つて來る様な胸苦しさをも感じた。然し風と霧は益々盛んになる許りである。それが新坂の峠の上に立つた時には思はずとある窪地に逃げ込んで終つた程の猛烈さであつた。恐ろしい自然の變化にふるえあがつた心臟が高い鼓動を打つて居た。冷たい細かい水が身の周りにびつしよりと濕り付いて、寒さが厚く包んだ膚にヒシ〳〵迫つて來る。暫くの間私はそこに身を屈めて息を休め、胸の動氣を鎭めて居た。眼をあげると眞白な風が岩の角、草の根に吼え乍ら走り過ぎて行つた。

身裝ひを直して、思ひ切つて再び新坂の頭へと走り出た。兩の耳の傍で霧が劇しく吼える。帽子は幾度もさらはれそうになる。頭を下げて顏をそむけても息は苦しくなり、胸の中まで冷たく凍つてしまひさうに思はれる。走れば走る程霧の爲めに押しかへされる様に感じた。然しもうぢきだと思つて走り續けて行つた。眼の前に眞白な世界が展けた。道は急に劇しい下りとなつて、私は突き落される様に、その底まで落ちるやうな勢で走り下つて行つた。だん〳〵霧が薄らいで來る。風も當らなくなつて來た。そうして何時か林にと出てしまつて居た。私は冷たい汗にまみれた額を拭き乍ら、溪川のほとりに足を休めた。峠の頂の方で騷ぐ霧や風の音がまだ聞える様に思へた。

箕輪の村あたりから、兎角眼界を遮つて淋しい世界の中に私を閉ぢ込めてゐた霧が、幾分か霽れて行つた。しつとりと濕つた松の美しい霜枯の高原には、まだ二三匹の牛が見えたりした。ある地點では、淺間や榛名の姿が霧の間に僅かの間現れたのを見た。道は何處までも美しい松林の中を縫つて、なだらかに下つて行く。林の奥の方でキャッ〳〵と笑ふ人の聲がするのに驚いたこともあつた。暫く行くと松林の中に、子を連れた牝牛の傍に柿を喰べて居る少女達を見出した。牛ももう山を下る頃である。

三里半も下つた頃、松林に面して一軒の茶屋があつた。暫く休息し乍ら婆さんの話す此處らあたりの山の話に耳を傾ける。荷を背負つた馬が二三匹山の方に登つて行く。前橋まではもう二時間もあれば行き着けるだらう。

再び松の美しい高原を足にまかせて、四邊を眺め乍ら下りて行つた。鳥も啼かなければ溪の音もしない。自分で踏んで行く落葉の音がカサコソと淋しい音をたてる。何時かまた自分の淋しい默想に耽つて、足下も忘れ勝ちになつて行く。私は山に默想する爲めに來るのだ。淋しい自分の思想の中に、周圍の煩瑣に惱まされることなく、安心してもぐり込む爲めに山に來るのだ。淋しさを求め苦しさを求めて山に來るのだ。そこに自分の滿足がある。「月日は百代の過客にして、往きかふ年も亦旅人なり」と奥の細道の冒頭に云ひ出した著者の思想が、云ひ古るされたなりにまた貴く新らしく思ひ返されて來る。自分の一生も斯うした旅のやうにあはたゞしく、或は美しくなつかしく過されて行くのか。私の道は前にある。一生の道程も前にある。そう思ふと一つの石一つの草もゆるがせに見過せない愛惜が殘る。

小暮の村近く來た道のほとり、美しく生へそろうた赤松の林の中で、私はまた疲れた足をなげ出してしまつた。松林の奥の綠の色を透して明るい闊葉樹の林が長く道に沿ふて見えて居た。如何にも美しい色の對照に知らず知らず道をそれて林深く入り込んで、遂々そこに暫くの間腰を下ろして晝の食事を取ることに定めてしまつた。左手の方

には遠く低く開墾された畑なども見えて居た。人家が近くにあると見えて、小供の歌ふ唱歌の聲が小さく聞えて來た。赤く熟した柿の皮を剝いて居ると、二發許り何處か遠くて打つたらしい鐵砲の音が響いて來た。（大正七年十一月十七日中村直男）

○鹽見ヶ嶽なる名稱に就て

信州上伊那郡を貫流する三峰川（みぶがは）の上流に合流する荒川の一支流南荒川の源に聳立し、駿州安倍郡に跨がる荒川嶽には、赤石ノ間ノ嶽といふ名の外に、鹽見ヶ嶽なる名稱のあることは、衆知の事實である。處で荒川岳といふ名は、荒川の頭に在る山の稱呼として相應いけれども、只同じ山脈中で更に南にある荒川岳、即ち惡澤、魚無河內、西河內と紛らはしいが爲めに、鹽見といふ他に類のない名稱の方が、近頃は大分用ひらるゝ傾向がある樣に思はれる。中には、上伊那方面で前荒川と呼ぶ一峰に、前鹽見なる名を附したらとさへ提議する人もあるそうだが、若しそうなると、北荒川岳もついでに北鹽見と改名させたくも思はれる位である。

此の山は私達には荒川岳といふ名で詳細に紹介されたのと（『山岳』第四年第三號）、鹽見ヶ嶽なる名稱が、其の後に至つて發行された地圖に現れたのとで、私達は荒川岳と聞くと直に所謂鹽見を連想し、又同じ樣な理由から惡澤、魚無河內等の名稱を、荒川の東岳とか、中岳とかいふ樣な、何となく廻りくどい名稱よりも、親み深く感ずるのは無理なことではなからうと思ふ。

頃日在飯田の會員前澤政雄氏が訪問されて、其の折私は赤石山脈の山々について種々と同氏の研究談を拜聽するの光榮を有したが、同氏の調査によると、鹽見ヶ嶽なる名稱は決して近年の製造に係るものではなくて、鹿鹽方面では古來存在したものだといふことである。同氏の御說を紹介すると、私の聞き違ひや覺え違ひはあるかも知れないが、先づ大體次の樣なものである。

大鹿村の傳說によると、昔々其昔健御名方ノ命が此の地通御の砌、鹿鹽の谷（即ち地圖の鹽川）で

鹽を見られたといふので、鹿鹽の谷の頭にある山故に、之に鹽見ケ岳なる名稱を、後來附するに至つたのだといふ。此の傳說は單に口碑であるのだか、それとも左樣な舊記でもあるのか、私は生憎記憶して居ないが、その何れにした處で、之を一笑に附し去るには及ぶまいと考へる。鹿鹽の谷に鹽の存在を誰かゞ實見したればこそ、此の谷には鹿鹽を初めとして鹽に緣のある地名が大分存在するのである。そして鹽を見た谷の頭にある山故に、之を鹽見ケ岳と呼ぶのは、あながち無理ではあるまいと思ふのである。

それはよいとした處で、鹿鹽本谷の頭にあたる嶽はどれかといふと、私はどう稽へても地圖の本谷山としか思へないのである。鹿鹽の谷から本谷山は見えても、荒川岳が見えないことは、地圖を一見しても想像がつくし、又快晴の日に荒川岳の頂上から西を眺めて、鹿鹽の谷を下瞰し得なかつた私自身の經驗に徵しても明である。勿論鹿鹽の谷を上りつめて、本谷山に達して、其處から東を望めば、つい鼻の先に荒川岳が仰がれることについては疑を挾むの餘地はない。さればと言つて、假令尾根續きだとはいへ、中俣の深い谷を距てゝ特立する荒川岳を本谷山の最高點と呼ぶことは、餘りに非常識なやり方で、此の二座の山は、どうしても、別の山と認めるより外に道はないのである。

前澤氏の御話以外に、同一の問題に關して、私は尙一說を耳にして居る。それは、大鹿村で山岳通を以て名ある獵師の前澤某を案內として、赤石山脈を跋涉された會員越智工學士の御話を承ると、此の獵師の說では、昔は鹿鹽の谷には鹽は存在しなかつたのだが、土人が鹽を得んことを切望したので、弘法大師が荒川岳へ登り、山巓から海を瞰て、其の鹽を鹿鹽の谷に呼んだので、山名を鹽見と呼ぶのだといふことだが、此の獵師は兎角話を面白く捏造するのに妙を得て居るから、一說として考慮を費すの價値については疑問だと越智氏が附言されたのと、又事實如何にも附會の嫌があるのとで、私はこの說には左袒し難いのである。私は弘法大師の樣な、超人間的の偉人に、海から鹽

を呼ぶ等といふ奇蹟が斷じて出來ないとまで極言はしないが、鹿鹽の谷には僧空海が生れた寶龜五年(西暦七七四年)以前から、食鹽の存在した事は科學的に證明出來ると思ふのと、又弘法大師が鹿鹽に遊化したり、荒川岳に登つたといふ立派な證據を、未だ手にし得ないからである。

以上の記事を煎じつめて見ると、荒川岳に鹽見といふ名を與へた理由として提供された說は、今のところ甚だ薄弱である。のみならず、健御名方命云々の口碑は、鹽見ヶ岳なる名は荒川岳の異稱ではなくて、却つて本谷山の正名とでもして使用する方が適切かとさへ思はせるのである。勿論現今鹽見と呼ばれる山岳は、他にないので、此の名が荒川岳の一異稱であることに就いては議論の餘地がない。夫故に、若し荒川といふ名は他のものと混雜する恐れがあるから使用しないことにすれば、勢ひ鹽見の名を採るの外仕方はないが、此の名は更に一段の詮議を要する樣に思はれるのである。(武田久吉)

○地形圖に就て　(一)

與へられたる場所の地形を、成る可く適當なる記號を用ひて表したる圖を地形圖と云ふ。

○地形圖に關する種々の雜感を書かうと考へたが、其初めに、地形圖とはどんなものかと云ふ、定義が入用なので、二三調べて見たが、思はしい事が書いてあるのは見當らないから、自分にも氣に入らない位のものではあるが、こんな定義を掲げる事にした。

○地形圖と云ふからは、圖でなくてはならぬ、圖と繪とは違ふ。雛形とは勿論違ふ、それ故盛上地圖(「レリーフマップ」)は無論地形圖ではない。

○地形圖は地形が表はされて居ればよいのだ、それ故地質圖は地形圖に利用する事は出來るとしても、地形圖そのものでない事は勿論だ。

○たゞ地形が表はされて居ても、場所が分明でない以上は、唯偶然の圖に過ぎないので、地形圖とは云へない、それを「與へられたる場所」と云ふ文句で說明して居るつもりだ、其故、重要なる地

名がぬけて居たり、又は誤つて居ては、勿論地形圖として價値が減つて來る。

○人によつては、地形圖は、地形の正しい事を要求すべき事は勿論ではあるが、地名迄やかましく云ふには當らないと云ふ說を立てられる樣だ、一應もつともと申したいが、自分は不贊成だ、極端な場合を考へて、少しも地名を記さない地形圖があるとして、何處の圖か分らぬ時に、その圖が何の用に立つてあらうか、又如何して其圖の正しいか否かを判斷が出來るであらうか、地形圖の描き方の標本としては使ひ得るとしても、地形圖としての價値は零ではあるまいか。

○又例へば日光山の地形圖に、富士山の圖幅であると誤記されて居た時に、如何によく出來て居たとしても、全然富士山の地形には似て居ないの故富士山の地形圖としては零の價値であるし、地名を訂正しない以上は、唯惡戲書であると思ふより他無いものではあるまいか。

○此地名の點に就て、現行の地形圖——と稱して居るもの——の殆全部は、甚しく其價値を割引される事をまぬかれ難い樣に思ふ、普通に行はれて居る、地形圖中、最も良い品でもあり、又信用もある、陸地測量部發行の地形圖——普通此圖を參謀本部の地圖と云つて、地質調査所發行のものを農商務省の地圖と云ふ樣だが、自分は此名は不當だと思ふ、所管の省の名を冠する流儀にして陸軍省の地圖と農商務省の地圖と云ふたならば、まだしもではあるが、前者を陸地測量部の、後者を地質調査所のと云ふて、責任のある處を明にした方がよいと思ふ——に於てさへ、地名に不當の點が多い事は、折々の「山岳」にある非難を集めて見ると隨分な分量になる事でも推定が出來ると思ふ、其他の圖はまづ誤の多い點では、其上を越して居ると云て、差支はない樣だ。

○然し種々の場合に、地形圖の地名に對して出る苦情は、必しも全部地形圖の方で負ふべきものでは無いらしい、例へば一つの土地に多くの地名がある場合——山や澤には方面を異にすると別の名稱で呼ばれるのが多いから——には、其全部を表すわけには行くまいから——實際の例として地形

圖の上に二つの名を擧げてあるのがある、自分はそれは大して必要だと思はない――何か基準名を定めて書くより他はない、其場合に特別なる方面から出る苦情は、苦情を云ふ人の調べが不充分な爲に起るのであると斷じ得べきもので、苦情を云ふ方が悪い事になるわけだ。

○此基準名を定める事に就ては、どうしても苦情の出る事を覺悟してかゝらねばならぬ、而して一度定めたら、出來るだけの手をつくして別名を廢させて――後の人の參考の爲に何か記錄に殘留させる事は必要だが――其名だけを通す樣にする方がよからう、非常な有力な苦情が出て、一度定めたのを又改めるとなると大變だから、最初に充分調べて、充分の方針を立てかゝらねばならぬ事は勿論てある、現在陸地測量部でやつて居る樣な鷲羽岳移轉事件一流の亂暴な定め方では、悪い事勿論だ。

○記號の二字の內には縮尺の事をも含んで居る氣だ、此縮尺の事は仲々問題で、成るべく適當なると云ふ、苦しい語を用ひた理由の一つは此點に在るのだ、と云ふのは地球儀の樣な球面の上に書くなら、まだ適當な工夫もつくであらうが、平面の上に現す事になると、大變こまる事が出來る。

○陸地測量部發行の二十萬分一地形圖は、横は經度の一度を堺とし縱は緯度の四十分を以て切てある、此內經線一度の長さは各經度に就て異る事はないが、緯線一度の長さは緯度が變ると違ふので、緯度が增すと小さくなるのだから、嚴密に云へば地形圖は北半球ので北を上にして居るものでは上が狹くなつて居なければならぬ、この事は一枚に就ては一向分らぬが、北海道の地形圖と、臺灣の地形圖とでは、同じ縮尺に對して、横幅が大分違ふ事から考へると、實際に左樣なつて居るものとも思はれるから、差支へないではあるまいかと云ふ人もある樣だが、それがいけないのだ。

○若し地形圖が上縮みの梯形になつて居るとしたら、四隅の角は直角でない事になる、然るに緯線と經線とはその定義によると、直角に交つて居るものである事は明白だ――曲線の交つてなす角は其交點に於て兩曲線に出た切線の交つてなす角で

測るのだ――それ故四隅の角が直角でないと云ふ事は不當だと云ふ事になる。

○語を變へて云ふと、地圖の左下の角の土地に立つたものとすれば、下の線は東の方角を指すもので、左側の線は北の方角を指す事になるのだから此兩方向の間の角が直角でなくてはいけない事から考へて、此處の角が鋭角である事は不都合な事は明らかだ。

○横道へ入るが、この方角と云ふ考へは、割合に正しい智識を持て居ない人が多い樣だ、小學校あたりでは「日の出る方を東と云ふ」と云た風な事を教へると云ふ話をきいたが、怪しからん話だ、毎朝日の出を見て、日の上る方角を少し注意して居る小供があつたら、東と云ふ方角は毎日違ふものであらうと思ひ込むに違いない。そんな馬鹿げた話があるもんか、若しこんな事が教科書に書いてあつて、文部省でそれを認可して居るなら、文部省は國民に誤謬を教へるのを目的とすると云はなければなるまい。

○一つの場所と地球の回轉軸とは一つの平面を定める、其平面と地球との交りを其場所の子午線と云て、其面を子午線面と云ふ、其場所に於て地球に切する平面と、子午線面との交りの直線は即ち南北の線である、地球の切平面上に於て、其場所から、南北線に引た垂線が東西線なのである、即ち方位は、地球の切平面上にあるので、地球面に固着して居るのではない。

○「ピアリー」氏の北極に達した折の記述の中に、「其所に於てはたゞ南のみ存し、東西北の三方位を缺く」と云ふ樣な文句があつた樣だ――これは其折に日本の或新聞にのつて居た飜譯文に就て見たのだが、歐洲戰爭で使はれたタンクの事を、最初の内は鐵桶と譯して記事をのせて居た位の、亂暴千萬な飜譯振りだから、原記載には或はこんな意味は無いのかも知れない――が、極は地球の廻轉軸上に在るのだから、其所では子午線面は不定であつて、從て方位と云ふ考へは全然成立しない場所になる、此南のみ存しの語は恐らく、方位が地面に固着して居る樣な間違つた考へが、外國の教科書にでもあつて、その誤を記憶して居た爲に出

來た珍句なのであらう。

○ついでに述べるが、此地球への切平面は其場所に於ける地平面と云ふので水平面も之と同じなのであらう、例の文部省檢定濟の日本の中學程度の物理學の教科書に、水平面は重力の方向に垂直な面だと出て居る、或場所に於ける重力の方向は、極地以外では地球の切平面への垂線になつて居ないのであるから、之では食違つて來る事になるが、それは後に「ゼオイド」の事を書く時に說く事としやう、然し水平面は水の表面の事だと書てある本があればそれは間違である事は勿論だ、靜止して居る水の表面は潮汐の關係が無い時は、重力方向に垂直な面即水平面にはなつて居るであらうが、それを水平面の定義とは申せない、一體定義と云ふものは……、いやあんまり横道へ入るから此邊で本文に戻る事としやう。

○海圖に於ては經線と緯線とは直角に交つては居るが、一體經線は兩極に於て各經線が交るもの故、それが平行して居る事も實際ではない、全體海圖は地球表を圓筒面に改造したものと云ふ考へから來て居るの故決して正しい地形圖ではあり得ないのだ。

○此經線が緯線に直角であるべく且互に平行ではあり得べからずと云ふ、互に矛盾した條件は、球面のものを平面に引直した無理から出たもの故、到着適確に解決する方法はないのだ、それ故成るべく適當いやむしろ不適當の程度の成るべく少ない方針をとるより他は無くなるわけだ。

○其他地面に凸凹があるのを平面の上にあらはす爲の記號――水準線（「コントルライン」）を使ふか、ハッチングとかボカシとかを使ふか、又は影をつけるとか云ふ方法の事を指すのだ――も元來無理な仕事故成るべくの四字が要る、或定められた方向から光が來るとしてその陰影で高低を現す方法は、寧ろ繪になるので、地形圖としては、自分は宜しくないと思ふ、水準線法とハッチングとは共に惡い處はあるが、それの少ない水準法がよろしいであらう、其高距幾米毎に引くべきかはよほど考へねばならぬ點であると思ふ。

○地表にある人工物や、植物等は、地形には關係

が無いとも云ひ得やうが、地形圖は理論的のものではなくて、行使しなければならないの故、其存在を書かねばならぬ事勿論で、それ等の記號もよほど工夫を要するわけだ。

○又川とか道とか云ふものは正しい縮尺にすると書けなくなる事があるから——例へば幅五米の道を二十萬分の一の圖に書くと四十分の一粍の線になつて、何とも分らなくなつてしまう樣なものだ——特別な記號を要すると云ふ樣な事もある。

○それ等の考へを引くるめて、最初に擧げた定義を作つたわけである、而してこれだけの考へを基にして、現行の地形圖に就て、此次には非難やら辯護やらの、獨相撲をとつて見る事にしやう（嗣出）（梅澤親光）

○二合半坂

東京市中や近郊から望める主要な山岳については、本誌第八年第二號に中村清太郎氏が一と纏にして揭げられて以來、これが導火線となつてか、望岳に熱中する人も大分出て來た樣だが、其の前後からして同じ趣味の深い同人間の研究も益々歩武を進めて、第九年第一號には木暮氏の筆になる處の大井川奥の山々のスケッチが揭げられるし、第十年第一號には赤羽臺からの大展望圖が巻頭を飾り、第十一年の第二號には苗場山の發見といふ驚く可き報告が、鈴木牧之をして地下に驚喜せしむるといふ處迄進んで來たが、是等數年に亘る研究の結果は第十一年第三號に取纏められて『東京市內所望山岳高度表』として發表されてある。此の圖の說明には二〇〇〇米以上の山岳六十三座を擧げ、且つ各山峯の眺望地をも併記してあるのは吾々望岳を無上の樂とする輩には寔に有難い次第である。

木暮氏の表によつて見ると、市の東部では深川の八幡から、郊外を北へ廻つて田端、赤羽の臺、西は目黑の行人坂から西南高輪の御殿山や池上の如き觀望臺を初めとして、市內各地展望臺を記してあるが、此處に標題を揭げた二合半坂も、假令一流の望岳地でないにせよ、歷史的に又趣味の上から言て、市中の觀望臺の一として永遠に記錄して

置き度い地の一つである。

二合半坂なる名は、江戸見坂とか聖坂と言つた様な、江戸子でなくとも少くも東京在住の人の、必ず知つて居る程に有名なものではない。しかし東郷坂（舊名法眼坂）などの様に近年出來た名稱では毛頭ない。一寸手元にある圖書を擴げて見ると享保十七年（一七三二年）出版の『江戸砂子』（卷一、二十一葉）にも「○二合半坂　もちの木坂の並び北の方にあり」と出て居るし、寛政二年（一七四九年）に開板の『再版增補江戸總鹿子』（卷九、八葉）にも「○二合半坂　△元飯田町上戸田肥前守殿御屋しき下通り」とある（此處に引用する江戸總鹿子は其題名の如く再版のもので、初版は本書の凡例によると元祿三年即ち西暦一六九〇年に刊行されたものといふから、若し同一の記事が初版にも載て居るものとすると、『江戸砂子』よりも古い記錄の一つである）。處で以上の兩書よりもずつと古く、延寶八年正月（一六八〇年）に出版の『江戸方角安見圖』を繙くに、此頃には未だ中坂は開鑿されなかつたと見えて記してないが、九段坂、モチノ木坂、二合半坂は、名は明記してないが明に揭載してある。只モチノ木坂の北寄の地に漠然と「此邊もちの本」とあるが、その「本」は「木」の誤であること推定するに難くない。此の圖は惜しい事には坂は記號だけで、紀の國坂、屏風坂、上瑠璃坂、永坂の如き二三を除いては、殆んど稱呼を記してない。尤も其の頃は坂には一々名稱が無かつたのかも知れないが、それを斷定するには多くの古書や古圖を參照する必要があるので、差當りその詮鑿には手を著けない事にして置く。

明治少し以前出版の江戸の地圖中で最も正確詳細なのは、麹町六丁目の錦繪双紙店金鱗堂尾張屋清七が板元となつて景山致恭の著になる處の『御江戸切圖』なるものであらうか、此圖は嘉永五年（一八五二年）の冬に上梓したもので、全二十六圖から成り、市內及近郊を網羅し、現今で言はゞ測量部の一萬分一東京地圖にも匹敵する程のものであるが、增補改正と銘を打つてある處から推すと、初版のものではないが、兎に角此の時代の地圖の上乘のものである。殊に町家、植溜、寺地、河川、

道路、宮地等を色分けとし、且屋敷には皆住居者の姓名を記入した外、横町の名、坂の名、谷の名をも記してあるのは用意甚周到である。其の中『飯田町　駿河臺　小川町繪圖』と題された切圖を見ると、九段坂、中坂、モチノキ坂、二合半坂の邊も極めて正確に出て居る。しかし生憎『江戸總鹿子』の再版が出た寛政二年から百餘年を經過した嘉永五年の出版であるから、戸田肥前守の屋敷といふのは見當らないが、其の附近に戸田七内といふ人の邸が記してある。これ等の圖書に記す處によると、二百年來二合半坂と呼び來つた坂は、現今同名を以て知られて居るものと同一のものであることが判るのである。即ち其坂は、曉星中學校の前通りを十間程も北に行た所で、こゝからだら〳〵と一丁餘も下の方に連續しては居るが、望岳臺としては、且又此名の起原から言ても、未だ曉星小學校に達しない内が主要なる部分である。

然らば、二合半坂の眺望はといふと、北の方本郷臺や其の下の砲兵工廠の煙突から吐出す毒々しい煤煙の彼方に、超然として鋭い光を放つ處の、日光火山群の一部である。向て左端には袈裟丸山の略全部が現はれ、其右は一端少し凹んでから皇海山が恐ろしい程急峻に峙つて居る。皇海の右は再び低まつてから、今度は錫ヶ岳が嚴然と座して居る。錫ヶ岳の右には高低の差の著しくない山峰が連亘して、其の背後には奥白根が晩秋から初夏に至る迄は常に白粧して聳立するのが仰がれる。前白根の東は山脈が漸く低下して、やがては日光山彙の盟主とも稱す可き男體山が現る可き筈であるが、惜しいことには本郷の臺に遮れて之を望むことは出來ない。

以上述べた如く、此處からの眺望は日光火山群の約半分は見える譯なので、坂の名も亦それに因つて日光半坂と古人が名けたのを、何時の頃からか訛つて二合半坂と書く樣になつてしまつたのだと、私の子供の時に教へて貰つたことがある。富士見坂の名が可なり普通であり乍ら、其他の山岳を望むことから名を得た坂が殆んどないのは、單に一個の傑出した山峰でない處の連山を望んでもそれが何山であるかを知るに困難であるのと、且

又總括的の名稱を製るに都合の惡いといふ點からして、あまり他に類例のないに拘らず、古人が如上の山岳を望んで、それを日光火山群の一部と斷定し、更に之を坂名として應用したことは甚面白い事と思ふので、敢て餘白を汚して此の記文を掲げることとした次第である。

二合半坂は私には親み深い坂の一つで、明治十九年頃、私が未だ小學校へも通はない頃から、晴天の日にはよく日光山を見やうと言て、此の坂の頂に立つたことの記憶が、其後に學んだ教科書の内容よりも遙に歴然と殘つて居る。加之此の坂の眺望は、目黒の行人坂の様に、見るもいやな「西洋館」で遮斷されることなく、今でも晴天の日には日光山の半を、双眸に入るゝことが出來る。

（武田久吉）

○山の讃歌

天地に通ふ呼吸
わが命それと生きなん
天つ斧神や振ひし
そゝり立つ尊き姿！
電光の閃くたびに
峰々は雲より出でゝ
廣らなる胸打ちひろげ
月星をかざして笑めり
森ふかく漂ふかをり
ほとゝぎす鳴きたるしじま
はひまつの茵ふみ分け
かもしかとらいてうさ迷ふ
綾に咲くお花畑と
白雲の五百重の帳
輝くや千年の雪渓
わが魂のいこふ所ぞ

（廣瀬壽雄）

○机上談山

○傾斜の感じと云ふことは、種々の方面から山岳誌上にも度々論じられて居るが、どうも正確に行きにくいものだ、これが感じただけを表はせばよ

いと云ふ解釋で畫いた繪の樣なものならば——正しい畫論は自分は知らないから、そんなものを繪と云てよいか如何かは分らないが——富士山が梯の樣だつたり、踏臺の樣だつたり、北海道の駒岳が天狗の面の鼻（自分は天狗と云ふものをまだ見ないが、繪の天狗と此頃の玩具の天狗の面とは大分工合が違ふから）の樣だつたりしたのが、先年本會で主催してやつた山岳畫展覽會の出品畫中にもあつたが、それはそれで差支ないものと認めてもよろしいが、紀行文等に傾斜を感じて角を測つて書く事は御免を蒙らねばならぬ。

○汽車が普通に登り得る最大の傾斜は四十分の一で、電車のは二十分の一だと云ふ樣な話を小耳に挿んで居るが、それが正しいなら前者は一寸五分勾配即約一度半て、後者は三寸勾配即約三度の傾斜になる、汽車や電車が實際に上つて居る坂を見て、此事を思ひ合せて見ると、大分考へが違ふ樣になるだらうと思ふ。

○富士山の吉田口の胸突八丁は、隨分急であるが三十度位な傾斜だと云ふ事だ、東京で有名な急な石段の愛宕山の男坂はまづ二十七度と云ふ處で、東京市中の急な坂と云つても二十度を越えるものは殆無いと云ふ事だ、自分は角度だの斜面なぞと云ふ事を習つた時に、或人にモチノ木坂（麹町區飯田町に在る）は多分四十度位あるだらうと思ふと云つたら、もつとあるかも知れないとの答を得たが、實際は大分緩い傾斜のものであつたのだ。

○一體土で出來た傾斜面は、非常に良い土質でも四十度を越えるとくづれるもので、傾斜が四十五度と云ふ斜面は、非常に堅い場合を除けば實際には、決して出來ないものだと云ふ事だ。

○其上煉瓦の上に煉瓦を置いた場合の摩擦率は極粗な材料を選んだ場合でも約奇零七位なのであるから、傾斜が三十五度の斜面上では滑つてしまう事になる、地と草鞋との間の摩擦率は、恐らくこれ以下であらうと思はれるのであるが、これと同格であるとしても、三十五度の傾斜になつたら滑つてしまうから、こんな急な斜面は登れはしない、それより急なら尚いけない事勿論だ、下りるとしてもとまる事が出來ない、つまり落ちるのと同じ

事になるものだ。

○「ネイルドブーツ」を使つたら如何かと云ふと、特別に長い釘を打て、一歩毎にうんと踏み込んだら知らぬ事、普通の場合では、土があまり急な斜面では自然に崩れると云ふ事から推して、やつぱりこの位な傾斜になつては登れないと云ふ事になるだらうと思ふ。

○雪渓の傾斜は、鍬を用ひずに登れるものでは——表面に凸凹がある爲に多少引かゝりはするが草鞋との摩擦率は地に比べて甚少さいのである故——傾斜は十度をいくらも越えまいと思ふ、鍬を使ふものでも三十度なんぞは無いであらう。第一あんまり急では雪そのものが滑つて附きはしまいから。

○濡草鞋で岩に上ると、氣持よく引ついて、隨分急な處を上れる様に思ふが、これも摩擦率から考へて三十度もあると滑つてしまう事に思へる、手がゝりが別にあつて體を引上る場合の足助けの場合は勿論別だが。

○紀行文中にある傾斜には六十度の七十度のと云ふ處があつて、それを上下して居る様だが、これは鉛直となす角を云つたものでもないのなら、間違つた感じで書いたもので、實際の話なのでは恐らく無いであらうと思ふ、自然に足が滑る處は登れないばかりでなく、そんな傾斜面は自然に崩れてしまうから有り得ないからだ。

○巖の場合はどんな急な斜面もあり得るから、少々考へねばならぬが、摩擦率が一を越える物は無いのである故、六尺勾配即傾斜四十五度（傾度一分の一）になればどんなものでも滑る事請合だが、それ以前にやはり卅五度位で足が滑る事になるだらうと思ふから恐らく御多分に洩れまいと思ふ。

○山の斜面は遠望すると割合にゆるやかに見えると稱する人が折々あるから、參考迄に一寸こんな問題を取扱つて見る事にした。（瑞々兒）

○諸高山の登山人員に就て

大正八年十一月二十九日の信濃毎日新聞はいふ、

今年の夏期に於て本縣の高山峻嶽を跋渉したものは雲の如くに多くあつた、其の總數に於て昨年の九萬二千五百六十四人に

比して二萬六千五百七十二人の多數で十一萬九千百三十六人に上つた。何れの方面の山に登つたお客が多かつたかと云ふと其の山岳別は左の通りである。

八ヶ岳	三一七二	金峰山	二五
淺間	三〇一七四	蓼科	六一二
太郎山	二五八〇	虛空藏	一九七〇
烏帽子岳	八〇	駒ヶ岳	六〇六四
守矢山	二三	京ヶ岳	二五〇
東駒ヶ岳	一〇五	千丈ヶ岳	二
赤石山	三〇〇	惠那山	四五〇〇
御嶽	六一〇〇七	八盛山	三二
東山	三	燒岳	五八二
鎗ヶ岳	四二五	穗高岳	九六
乘鞍嶽	一一四	燕岳	四〇八
大天井嶽	三七〇	有明山	一七〇
白馬山	三三〇二	大黑岳	二二五
北安烏帽子	一五五	北安槍ヶ岳	六五
針木岳	七〇	藥師岳	四〇
爺ヶ岳	二七五	鹿島岳	一五四
蓮華岳	八九	硫黃岳	一三五
杓子岳	五二	埴科大峰山	六〇
岩菅山	七五七	高社山	九八
苗場山	二三九	戸隱山	一三〇〇
黑姫山	三八	飯綱山	二〇

雜錄　○諸高山の登山人員に就て

である。此の中には國境に在るものも勿論あるが、今年は斯樣に山のお客さんが增加したのである。尙昨年に比して比較的增加の多いものを擧げると左の如くである。（增した人員）

八ヶ嶽	二五二八	御嶽	二七八
淺間	一五〇六四	岩菅	四八四
駒ヶ嶽	二〇五四	白馬	一五五二

併し昨年より減少したものもある。即ち（減じた人員）

燒嶽	六八六	蓼科	一二七八

等である。又昨年は登山者に就ての事故は一件もなかつたが、今年は死傷者もあり發病したもの路に迷つたものもあり、總數死者五人、負傷者二十五人其他三十四人、合計六十四人を出した。之を細別すると淺間山の死者五人、負傷者三人其の他二十一人、赤石山の迷子十二人。大黑山の怪我人三人其の他二人、北安槍ヶ岳の負傷者六人其の他十六人、杓子岳の負傷者三人、御嶽の迷子五人、白馬山の負傷者十人其他八人等である。內淺間の五人の死者は覺悟の自殺で噴火口に投じたものであるが、負傷者の中には一旦噴火口に投身したが、死に切れずして這ひ出して來て救助された悲慘なものもある。他は登山の途中又は下山に際して發病したり、濃霧のため路を迷つたのであるが、斯く多數の事故の生じたのは、登山期に天候が比較的不良で、豫期に反して激變したのと、大體の登山者が增加し、中には不用意のものが多かつたゝめである。

上揭の表は、諸高山の登山人員を比較して見る

には、一寸便宜の方法である。從來此種のものも本誌に出たが、かく多數の山を掲げて說明附をしたものはなかつた。併し其說明が、概括的であるから、少し深く立ち入つて調べようとすると、忽ち行き詰つてしまう。烏帽子岳や硫黄岳は信州一圓内には、四つも五つもあるから、よし一つや二つ斷はつたとて、其他はどこのものに該當するか不明である。蓋新聞の記事などを捉へて多きを要むる自分の方が、謬つてゐる程でなくとも、感服出來ない事かもしれぬ。そは兎に角、登山者の破格に多いのは、御岳と淺間山で次は木曾駒ヶ岳に惠那山、白馬岳に八ヶ岳と云ふ順である。孰れも登攀には、さほど困難でない上、前者は古來富士、白山、立山等と並び稱せられた名山、後者は高山植物、雪渓、氷河遺跡などで近來開けた名山、登山者の多いのも無理のない事と思ふ。最少ないのは、仙丈ヶ岳と東山である。仙丈ヶ岳は赤石山脈の北鎭、高距一萬八尺（御岳に讓る事一百尺）と註せらるゝ高山。登攀もさほど困難でない割合には登山者が少ない東山は六千尺内外の山で、何等の奇趣もないから、登山者も至て少なかつたわけであらう。太郎山の千五百八十人、虚空藏の千九百七十人もあつたのは、どちらも三千尺内外の低い山で、特筆すべき事情のないのに、かく多數の登山者のあつた事は、頗る異例である。是等は附近の小學校生徒の修學旅行の適地であつて、澤山登つた爲ではあるまいかと思ふ。さて表の登山者數は、どんな調べ方をされたのか、又實際に相違ないものであらうか、疑ふ可き節が少くない。今具體的に夫等を指摘する事が出來ぬが、昨夏私の見聞した時の事を辿つて見れば、北安烏帽子岳と槍ヶ岳との間の、野口五郎岳、鷲羽島、三俣（蓮華）、双六等へは、少くも數名は登つたようである。常念山脈、木曾山脈、赤石山脈の内でも、まだ大部もれてゐるらしい。此他知りがたい他府縣の方面からのものを加算すると、或は十二萬人以上になりはすまいかと思ふ。表の正否は先此位とし、此度は其數の扱ひ方を更へて山脈別とすれば次表の如くになる。尤も此山脈別は正確なる根據の上に立つた者ではないとを斷つて置きたい。

山脈	座數	登山者數	同上平均數	備考
赤石山脈	四	四三〇	一〇七、五	
木曾山脈	三	一〇、八一四	三、六〇四、六	
秩父山脈	一	二五	二五、〇	
常念山脈	四	九八〇	一九六、〇	
安曇山脈	一〇	四、五二二	四五二、二	自双六岳至自馬岳(假定)
乘鞍山脈	五	六二、二二四	一二、四四四、八	自御岳至鎗ヶ岳(假定)
八岳山脈	二	三、七八四	一、八九二、〇	
妙高山脈	五	一、四〇一	二八〇、二	
淺間山脈	五	三三、八六四	六、七七二、八	
白根山脈	三	一、〇九四	三五一、三	
計	四二	一一九、一三八	二八三、七	

座數では、安曇山脈の十座が第一に多く、其他は皆五座以下である。登山者の最多なるは、乘鞍山脈と淺間山脈、次は木曾山脈、安曇山脈と云ふ順である。而して其平均數も、大體之れと平行してゐる。比較的登山者の多い中で、木曾山脈と、安曇山脈の他は、大低火山脈のうちである。是等は高さも相應に高く、山麓地帶からは望見し易く且つ登攀も便利であるからである。赤石山脈は、高邁の點では第一等であるが、諸種の事情から登降甚困難なる爲めに、登山者は至つて少ない。但し他の諸山脈の年々俗化はげしき時にありても、獨り此厄を免かれてゐるのは、却て此山脈の誇りとする所であらう。

猶個々の山岳につき、比較研究するのも、其方法如何によりては、至極興味ある事ではあるが、あまり長くなり且つ益々主題に遠ざかるのを恐れ此邊で擱筆する。(鵜殿正雄)

雜報

○天然記念物保存

內務省にては今回法律に依り天然記念物を保存する事となり、此れが下調査として東京帝國大學理學博士神保小虎氏が二日來縣し、鑛物方面に關する保存物に就き、長野高等女學校にて河野校長、八木敎諭の二氏と打合をなし、目下保存候補物の調査中なるが、愈同氏の調査終了の上に於て、保存物の決定を見ば、絕對に之が採集移轉等を禁ぜられ、同時に國家が保護に任ず可しと云ふが、河野、八木二氏の推選せる本縣の保存物は左の如し。

氷河遺蹟　白馬尻の二ケ處と葱平の二ケ所並に上高地烏々のへツトナ氏岩等で、此の中白馬尻の一ケ處は幾つもの頭を突き出して居る岩が何れも氷河の擦痕が歷然として居る。

アラレ石　產地は槍岳裏の高瀨川の上流湯又と云ふ處で、長さ二丁位の處に噴氣孔から石灰分を噴出して出來た釜が十位あつて、其噴氣孔に何等かの小物體が入ると、夫れに石灰分が附着して一つのアラレ石を作るのであるが、大きいのは鷄卵大で中には五角十二面のものもある。此アラレ石產地は日本で唯此の湯又一ケ處に限られて居る。

アラレ花形結晶　產地は下伊那郡大鹿村字大河原小澁川の岸で、水に解けて流れて來る石灰分が積つて花形になるのである。

天然の隧道　白骨溫泉に在るもので、昔石灰分を噴出してそれが沈澱して出來たもので、其下を現在は湯川が流れて橋になつて居るが、大きさは長さ三間巾十間程ある。

鬼ケ城の鐘乳洞　同じく白骨溫泉にあるので、一つの岩穴内に永年水に分解されて滴る石灰分が凝結して、一の柱となつたもので、其大きさは直徑一尺五寸高さ二間餘ある。

波紋岩　產地は東筑摩郡生坂村字上生坂の犀川沿岸に產するもので、海岸の波が沈澱物の工合に依つて出來たものである。

大口澤の花崗石　所在地は東筑摩郡上川手村字田澤大口澤にあるもので、九尺四方位の大石で、其附近の地盤の軟弱なるに拘らず、此地に此石のあるのは松本平の地層研究の好個の資料であると云ふ。

鑓の溫泉　日本アルプス系鑓嶽の溫泉で、海拔八千尺の高處にあるから、日本一の高處の溫泉であると云ふ上から保存の價値充分にあると云ふ。

別所の龜の子石　小縣郡別所安樂寺裏山の龜の子石で、大きさ六尺位あつて、地層を形成した時代を見るに面白いものであると云ふことである。

此外澁溫泉の地獄谷、中房溫泉の噴氣孔、淺間山の蛍青石、木曾の綾覺の床、棧、常盤橋、氷瀨等の十數ケ處を擧げてあるが、學術上からは何れも尊いもので、充分に保存す可き價値があると云ふ。（八年八月信濃毎日新聞）

○爺岳石室竣工

本縣經營に係る日本アルプス爺ケ嶽石室建設は、地元平村に於て受負、先月十七日起工八月三日竣工せり。石室は爺ケ嶽頂上より約十町許り下りたる種蒔爺の種を浸したりと言ひ傳へられたる爺ケ池邊が池の附近にて、一面の芝原にして天然の岩石を利用し、極めて堅固なる物にして風景も又佳絶なる好適地なりと、近々地元及び有志登山の上小屋開きを計劃中なり。因に北安曇郡内に縣設營は三ケ所なるが、爺ケ嶽の石室落成は第一番なり。（大正八年六月信濃毎日新聞）

○岩菅岩室閉鎖

下高井郡平穩村山岳會にては、縣設石室閉鎖の爲去十七日同會幹事及び人夫數名登山、風雪を冒し防雪設備を施し、十九日下山せり。本年の登山者は石室竣工に伴ひ數百名の多數に上りをれば、明年は山開きを期し、設備の完全を圖り、温泉浴客登山者の爲に多大の便宜を與ふる由なり。（大正八年十一月廿二日信濃毎日新聞）

○四高山岳會

本會は大正八年四月の創立で、旅行部（昔の四高遠足部を改稱したのです）に附屬して居ります。昔から、遠足部の名で毎年登山班を三つ位づゝ組織して居つたのでありますが、今度改めて四高山岳會を作り、旅行部に附屬させる事にしたのです。綱領としては次の二つです。

一、私共は山岳の研究を致します。

一、私共は日本山岳の登攀に努めます。

◎第一學期

一、夏期登山隊

本隊

夏期登山隊の本隊は、日本アルプス踏査班でありました。參加人員、二十五名。集合地、松本驛前。

行程の概略

△七月二十四日。晴午後雷雨。午前八時松本驛發、有明下車。宮城を經て一五〇〇米の高地にある中房温泉に至り一泊。

△七月二十五日。晴後曇。温泉發。燕岳より尾根の新道を傳て大天井岳東天井岳に至り、二俣小屋着泊。

△七月二十六日。曇。小屋發。常念岳をかけて槍澤小屋泊。

△七月二十七日。曇。槍澤發。槍ケ嶽を極めて、上高地温泉泊。

△七月二十八日。豪雨の爲め、穗高岳、奥穗高岳の登攀中止。上高地滯在休養。

△七月二十九日。雨。上高地發。燒岳に登り、平湯温泉泊。

△七月三十日。雨。滯在休養。

△七月三十日。曇り、荒し。平湯發。乘鞍岳を越え、白骨温泉泊。

△八月一日。曇。白骨より松本へ。解散。

支隊の活動

尙ほ會員の中に、各地に飛躍した者が澤山ありました。其の項目だけをあげておきます。

一、劔、立山班。一、御岳登山。一、白峰山脈縱走。一、八ッ嶽登山。一、白山登山。一、北海道の諸火山。一、磐梯山登り。

一、四國石槌山登山。

二、第一回山岳展覽會

十月廿六日、秋季陸上運動會の當日、山岳趣味宣傳と山岳研究の爲、第一回山岳展覽會を、市村教授の博物實驗室に開きました。公開時間は午前十時から午後四時までで、觀客は二千五百餘名。滿員の爲め、多數の參觀希望を謝絕しなければならなかつたので、其の人選には眞の苦でした。

最後に中橋文相や南文部次官を初め知事なども參觀して行かれました。

第一回山岳展覽會出品目錄の概要

一、標本類

市村教授	立山發見の新高山植物	五種
同	高山植物	十種
四高生物學教室	らいてう	二
同	顯微鏡	三臺
四高地質學教室	鑛物	八點

外に、生徒其他の標本類

二、生品（高山植物）

四高生物學教室		四點
田中アルプス園		八點
二中山岳會		三點

外に

三、書籍類		三點
林教授		五册
四高圖書課		廿五册
縣立圖書館		廿六册
四高山岳會		十二册
同	地圖	數十枚

四、寫眞類

林教授	イエローストーン	十枚
同	高山深谷	廿四枚
吉澤庄作氏	高山植物景觀	八枚
四高山岳會	日本北アルプス	八枚
二中山岳會	寫眞集	二枚

五、登山用具及準備品類

四高地質學教室		八點
西村教授	登山用品	八點
四高山岳會		二十點
Mr. Walker		二點
英藥局	登山用藥品	十點
明治屋、石川屋	登山食料品	數十點
其他商店	登山用具	同

三、第一回山岳講演會

十月卅一日。天長祝日午後一時から、至誠堂で、山岳展覽會と同じ目的で山岳講演會を開きました。會する者二百餘名。皆同じ趣味の下に集つた人々だけに、極めて靜肅に謹聽され閉會は電氣がついてからでした。又出演者はそれぞれの演題のもとに、何者にも抑束されぬ自由の發表をされ、非常に愉快な集合でした。

開會の辭　教授　高畠喜市氏

這松の本州に於ける分布　生徒　澤田武太郎
山岳憧憬の精神的考察　生徒　高杉孝二郎
溪谷の美（上高地と黒部）　生徒　廣瀨壽雄
登山の趣味　教授　林並木氏
高山植物に就いて　教授　市村塘氏
白山　縣視學　加藤賢三氏
山登りと云ふこと　教授　西村眞一郎氏
山岳の精神的影響　醫學博士　松原三郎氏
山岳と宗教心　教授　高畠喜市氏
閉會の辭　教授　高畠喜市氏

時間が足らなかつた爲にか教授高橋純一氏の『高山の岩石に就いて』と校長溝淵進馬氏の『スウイスアルプス』との講演を拜聽することが出來なかつたのは、吳々も殘念でありました。然しなほ二學期も三學期も講演會は開かれる筈ですから、其の時はきつと拜聽する事が出來るでせう。

四、九月から十二月までの間に

一學期中は方々へ出かけました。其の項目だけをあげて置きます。

第一回。戸室山。　九月廿一日（日曜、雨）　一行五十一名
第二回。兜山。　九月廿四日（水曜、快晴）　一行五十九名
第三回。野田山。　九月廿八日（日曜、快晴）　一行四十五名
第四回。醫王山。　十月五日（日曜、曇）　一行百〇一名
第五回。倉ケ嶽。　十月十二日（日曜、快晴）　一行二十二名
第六回。黒部。　十月十七、十八、十九日（快晴）　一行十三名
第七回、倶利伽羅山。　十一月二日（日曜、快晴）　一行三十二名
第八回、後谷。　十一月八、九日（土日、雨）　一行二十七名
第九回、湯涌温泉。　十一月十六日（日曜、快晴）　一行二十三名
第十回、晩秋の吉野八景。　十一月廿三日（日、快晴）　一行十六名
第十一回、金石の無線電信、　十二月七日（日、曇）　一行二十五名

四高山岳會の事業（これは勿論旅行部の一部分ですが）は、第一學期に大體上にのべたやうな事をしました。

（大正八年十二月末　四高生　廣瀨壽雄）

○山岳寫眞頒布

信濃山岳會にては、同會寫眞部の特撰に成れる山岳並に山岳に關係ある寫眞を廣く同好者に分つ可く、第一輯は既に大正八年十月に發行したりといふ。頒布要項は次の如し。

頒布寫眞は本會寫眞部の特に撮影したる新寫眞のみにして從來世間に流布したるものに非ず

頒布寫眞は毎月一回二葉宛のカビネ判印畫紙とす

印畫紙は優等品を撰み美術的に調製す、其の種類の撰擇、色調等は本會の任意とす

頒布を受けんとする者は左の會費を必ず前納するものとす、送料は本會の負擔とす

一ケ月分　金六拾錢
半ケ年分　金參圓五拾錢
一ケ年分　金七圓

會費一ケ年分前納者に對しては本會適宜の時に於て別に寫眞一

葉を無代進呈す

頒布を受けたる寫眞を複寫せんとする者は其の要途を明にし豫め本會の承諾を經ることを要す

頒布寫眞の内、或る特定の印畫を希望せらるゝ向きには左の實費にて需めに應ず

ポスト形	一枚	金二十錢
カビネ形	一枚	金參拾錢
四ツ切	一枚	金壹圓四拾錢
半切	一枚	金貳圓五拾錢
全紙	一枚	金四圓五拾錢

此の分は外に送料を申し受け總て前金とす

希望の向は長野縣松本市中町三丁目牧伊三郎氏方信濃山岳會事務所宛に照會又は申込まるゝが可ならん。

○會員通信

△拜啓。小生友人四人と共に祖母山登山を試み、津留より登り尾平鐵山に下り、此夜遲く當地に安着仕り候。津留よりの登りは割合に樂にて、三時間程に過ぎず候。好個の登山日和にて、九州は一眸の中に有之候。はからずも紅葉の盛りにて、中腹以上は全山紅に燃え、誠に見事にて有之候。（八年十月十二日　九州竹田にて　岩永信雄）

△國師の頂上からも乾德山が見えました。時間不足で金峯はやめました、それでも暗くなつて白木屋に着きました。原因に二ツあり、あんまり馬鹿らしくて葉書へはかけません。國師の澤の淺野とかの經營してる伐採は、隨分奥まで荒して居ます、淺間數次第です。（十一月十四日梓山にて日高信六郎、中塚癸巳男）

△昨日單騎食糧防寒具等を背負込みて白根山に登る、九月の大洪水にて白根澤大分荒れたると結氷とにて、登攀あまり容易ならず、しかし中腹以下は紅葉に美粧し、以上は霜柱、新雪氷柱樹氷等にて美觀又異觀なり。山上の眺望は南方はやゝ雲ありしも、北より西北の方及西方の一部は全く雲なく、飯豐や平ケ岳方面の新雪銀よりも美し、白根山頂より上州に下り、御釜を横ぎり密林を穿ちて遠島居に下る。歸途清水より日暮れ例の提燈を點して金精峠をこゆ、日光側八合目(?)以下の路全く流失し(九月の大雨にて)澤を下り不少大困難を嘗む。然し無事湯元に着く。奥白根は本月十一日が新雪、前白根、金精峠等は二十一日が初雪なり。此夜湯元は大雨、山ではそれが雪にて、今朝男體、大小眞名子、太郎、前白根、山王帽子皆綿帽子を被り、美觀を極む。本日中禪寺以下は大霧なり、それを通じて午後日光に着く。（八年十月二十四日日光にて武田久吉）

△秋晴れを豫期して山へ登り申候。豐野より萬座迄快晴にて、近い山々を少々望み得申候。紅葉殊の外美しく、特に四阿山の東面の傾斜の色氣に入り申候。萬座より白根越え澁峠越えに發補へ參る日は霧小便にて不快に候ひき。本白根へも登らず、澁峠も何も見えず候。此日あやふやな天氣を冒して岩菅へ登り候も一面の霧。加ふるに雨にて何も見えず、頂上の小屋にて武田博士の所感を震へながら讀みて下りたるのみに候。本日珍らしき好晴にて、早朝より第二回の岩菅登山をなす、北アルプスは勿論、八ケ岳、富

士、秩父連山、赤城、日光火山群、至佛、燧、苗場、魚沼の駒等、苟も名のある山は何もかも望み申候。裏岩菅より烏帽子を經て北へ下るも或は東へ澤を下るも案外容易げに候。苗場の南面は眞黒な針葉樹と狐色の芝とにて中々美しく候。岩菅の尾根の上は切明もあり笹も割合に短く樂に候。佐武流や何かも此調子なら樂なるやも知れずと存ぜられ候。梯子澤は中々面白い澤にて加ふるに樂に候。澤を上るのは思の外愉快なるを感じ釜澤を想ひ居候。（八年十月十二日信州發補にて藤島敏男）

△三日間休が貰へました故、シヤモニーに出掛けて來ました、丁度モンブランの眞下にあるのですが、今日は雲で何にも見えません。氷河の舌はかなり近くで見ました。平生なら渡れるのですけれど今は雪が深くて駄目ださうです。スキーの稽古をして歸るつもりです、巴里から十七時間かゝります、夜行で來て夜行で歸るのです。（大正九年一月二日夜守島伍郎）

△急に皇海登山を思ひ立ち、藤島君と同伴して十一月（八年）十六日淺草驛を出發、足尾線の原向に下車し、ギリメキの越中屋に一泊す。渡良瀬川の沿岸には尙ほ紅葉の散り殘れるを見る。十七日早朝原より尾根傳ひに根利山に登る途中雨ふり來り、加ふるに笹深き爲大に困難せしも、翌朝雨を衝いて砥澤に下ることを得、吉田留吉方に宿る。十九日砥澤より不動澤に出で不動澤の左股を遡り、午後二時皇海山三角點着。西より北は雲ありしも、南アルプスの一部、秩父連峯、上信國境の諸山、笠ヶ岳、錫ヶ岳より奥白根、太郎、男體等を望み得たり。奥白根に少し雪ありしのみにて、他は連日の暖氣に消え失せてか、此方面に雪を見ず。皇海の頂上には庚申二柱大神と大書せる鈑あり、下野にて所謂庚申山の奥院大嶽山なるものは、此山に外ならざることを知れり。頂上より國境を南に傳ひて銀山越の峠道に出で、少しく上州側に下りたる鑛索運轉所の小屋に泊めて貰ふ、風呂の贅澤なるに驚く。二十日早起窓を開けば正面に雪光鋭き苗場、佐武流、仙ノ倉、萬太郎の諸山を望む、仙ノ倉殊に雄渾を極めたり。それより峠を踰えて途中馬鹿げた滑稽を演じつゝ銀山平に下り、いやな鑛山の建物の間を通り抜け、また原向より汽車に乘りてもとの淺草驛に舞ひ戻る。此附近の山は足尾鑛山ある爲に盛に伐採され、其跡に落葉松を殖林せるを見る、中には立派な林となれるもあり。概して丈の高き笹繁り合ひて國境の切明は既に笹に掩はれ、其間を分け歩く困難に意外の時間を要したり、上野州國境連山の縱走は先づ駄目と見て可ならん。（木暮理太郎）

△八ヶ嶽の秋色を探らんと、十月八日（八年）新宿十一時二十四分の夜行に乘り、翌九日朝七時半茅野驛着。二里半大門峠麓北山村湯川區に着、十月十日午前八時半出發、芦澤、糸萱、須栗平の村を經て、霜野原に出る、秋草亂れ正午の日光暖かなり。鳴岩川を渡り、夏澤峠路に出る森林中にて驟雨に合ふ。白樺、桂の紅葉最も美くし。峠の頂上にて稀れなる大雹降り、氣候一變す。本澤溫泉に降る、午後三時。目下閑散なり、纔に湯治客を見るばかり、三階にて硫黄岳の傾斜面に秋の月高し。十月十一日谷から吹きあげる朝風に眠覺む。八時宿を出發、霜をふんで峠の峯に行く、硫黄岳に登る、秋の山頂寂漠たり。横岳より赤岳に向ふ西側の岩に氷柱が盛んにさがつてゐる。本年建設せし石小屋も寂しく、新ら

しい木の香がする。赤岳の頂上にも温泉で造つた神社が秋の空に浮いてゐる。展望も自由なり。谷から吹き上げる風が中々冷たし。二時間ばかり頂上にて寫生す、歸路につく、温泉に浴して脚を延ばす、十月十二日八時出發夏澤峠の頂上より、天狗岳(根石嶽)の斜面の森林を登る、朝露深し、北アルプスの雪輝けり、天狗嶽の頂上より稍下に北側のハヒ松にある唐澤を五百メートル降る、斷崖を森林にからみ、瀧に出る、尚ほ降る、唐澤鑛泉場に着く、午後一時宿の裏より登り、南佐久郡稻子の湯より湖東村白井手方面に通ずる小徑に出で、猶ほ瀧の湯に行く、其れより里道を降り、瀧川に添ふた明治湯に着、唐澤の湯から約一里半、雜野の小徑を西北に降る事一里、立科横岳の間より流るゝ瀧ノ湯川に出る、瀧ノ湯、新湯、小寫湯、登れば大河原峠より佐久方面に通ず、一里降つて湯川區に午後七時歸着。(湯川にて茨木猪之吉)

△拜啓小生昨年十二月中旬以來、公務を帶びて石狩國上川郡愛別の奥チクルベツ(知來別)に參り居り、最早三ケ月許りと云ふものを電燈、煤烟の類から隔離されて來てる次第です。勿論新年も心許りの雜煮を祝つてこの山中に迎へました——珍らしい快晴の内に——。當地は宗谷線比布驛より石狩川の上流へ八里の留邊志部を經て、更に支流ルベシュベツの上流へ三里、合計十一里、北見峠に通ずる國道よりは約半里、チクルベツの溪谷に入り込みたる所にて、北海道本島中央部の一雄峰ニセイカウシベ岳の麓であります。それで大概の日はニセイカウシベ岳のどこ迄も吾人を威嚇しなければ止まない樣な、物凄いしかし崇高な純白な山容を手に取る樣に近く仰ぎ得るのであります。そしてその中腹以下及附近の山岳の大部分は、針葉樹の勝つた黒い森林に覆はれて居りまして、その内の全體から見ては殆んど所在の判然しない位な小部分に、只今擇伐法による伐木が行はれて居ります、それは五尺有餘の積雪を利用して、馬のベルの音勇ましくチクルベツの溪流迄搬出されつゝあります。從業者の誰の顔も赤黒く雪燒けして、寒氣といふものを全然知らないやうな元氣が溢れて居るのが見られます。

ニセイカウシベ岳は當地から望みますと八ケ岳の編笠によく似た一支峰を前にして、カルデラ狀の谷が三つ圓い輪廓の山頂近い部にあつて、いづれも恐怖すべき絶壁と牙齒狀の岩列とで裝はれて居ります。いづれもチクルベツの水源でありますが、チクルベツの本流はこの山の半里餘東方に聳ゆる一高峯から出てる樣に思はれます。(該高峯はニセイカウシベの東側から一五〇〇米位の平均高度で連亘する山稜の一端で、小泉秀雄氏の所謂チクルベツ山と相呼應して居ります)。

チクルベツ岳はチクルベツと相隣つてルベシュベツに開口するトイマルク澤(トイマルクシュベツ)の奥に聳ゆる傾斜の緩な、大部分喬木林に蔽はれた山で、最高點丈は申譯の樣に喬木帶から脫して尖形に隆起して居ります。この山名は小生の考へてはむしろトイマルクシュベツ岳と云つた方が適當ではないかと存じます。それにニセイカウシベ岳のことをこの邊ではチクルベツ山と云つてゐますから。チクルベツの澤口からルベシュベツの奥北見峠の方角を望みますと、針葉樹林に蔽はれた峻急な山にはさまれた狹い谷間から、チトカニウシ岳の優れた隆起が行手を塞いで居ります。ルベシュベツの對岸は里稱天幕山なる一峯(八〇〇米位?)が迫

つて、此脈は東北に奥へ奥へと高聳して天鹽岳に續いて居ります。

チクルベツの口から約二十丁入りますと、向つて右から注いで來る砂金澤といふ一里半許りの小支流があります、それを奥へ入りまして左岸の急斜を上ると高臺に出ます、一帶にエゾマツ、トドマツ、アカエゾマツ、エゾノダケカンバ等に蔽はれ、樹間を通してヌタクカムシュツベ(大雪山、里稱ヌタップ)の壯大な山塊の皚い雪の反映を望むことが出來ますし、ルベシュベツの方を見返る先には天鹽岳の溫和な純白な山頂を認むることが出來ます。

當地から一里半ルベシュベツに沿つて、下りますと、小字天幕(天幕山はこの地名に由來す)にルベシベ渡船場がありまして、そこにはイヌナイ澤とウエンナイ澤とが右岸に注いで居ります。一寸見た眼ではウエンナイの方はオミットされるかも知れませぬがよく氣を付けて觀察すれば、ウエンナイは向つて左の山間から出て、イヌナイよりは下方でルベシュベツに合して居ります。このウエンナイの奥には里稱スリバチ山と呼ばるゝ八〇〇米許りの峯が顯著の高聳を見せてゐます。天鹽岳はイヌナイを溯つて山頂に達し得ると云ひます。先年陸地測量部員に同行した人夫の話では、山頂には五葉松(偃松の意)が一面に繁茂して、非常に心地よい山だといつて居りました。

天幕から更に一里半下れば留邊志部の市街地で、旅舍二(田邊、藤本)、郵便局(電信なし)等の備はつた、日用品の大抵調ふ地に出ます。石狩本流とルベシュベツの會流點の平野で、現に計畫されてる旭川より當地を經て、北見へ通ずる鐵道が敷設された曉には、目覺しい發展を豫期されて居ります。ヌタクカムシュツベ岳、ニセイカウシベ山は、こゝから限りない雄大さに仰がれます。

この地からマクンベツ渡船場を經て、石狩川の左岸マクンベツ(眞勳別)の廣々した段丘上の道路を一里半上れば、路は一時白川(ワクカベケレベツ)に下つて、又段丘を行くのであります。山岳十二年二、三號の小泉氏の記事には、石狩川の右岸の路しか記載されてありませんが、夏は知らず冬期は殆んどそんな路は顧られない有樣です。更に一里の熊ノ澤口の渡船場を經て、白樺屬、はんのき屬、やなぎ屬、きはだ屬のスクスクと伸びて茂つた林を乘せたデルタ(中島と云ふ)を通過して、層雲別の耕地に導かれます。このデルタは夏は全く隔離されるので、冬の內に入り込んだ兎等はよく手取りにされるさうです。

壯大な右岸の絕壁、ニセイカウシベの怪奇、ヌタクカムシュツベの雄偉に驚異しつゝ約一里、假橋を右岸に渡れば、こゝにも吾等の伐木事務所が設置されて居ります。こゝは天幕澤の口で、この澤は小泉氏の北鎭岳、比布岳の間から發源して居るらしく、上流迄約六里とは里人の言であります。約一里半上流に美事な瀧があります。夏は鱒が大群をなして上ると云ひます。天幕澤口から石狩本流を半里上れば、レコマンベツ(俗稱ヨコマンベ)の澤口に參ります。その間は物凄い森林で、クルミ、ヤチダモ等の良木が多生して居ります。レコマンベツは小泉氏の北鎭岳と凌雲岳との間から發源して居つて、兩岸はスバラシイ絕壁つゞきです。ニホヒシダ、ツルデンダ、カラクサシダ、ダイモンヂサウ、チシマゼキセウ、コスギラン等の着生植物が識別出來ます。又蘚苔地衣も驚くべき多樣の色彩と變化とを持つて附着して居ります。殊にエビ

ゴケは多生して居る樣です。この澤の右岸の尾根に立てば、凌雲岳、北鎭岳等は手にとる樣に望まれますし、ニセイカウシベ岳は右から湯ノ岳、劒岩、牙ケ峯、奥ノ岳、本岳、笠ケ峯（以上新稱）の順に連なり、その雄偉な山容は小生をして恍惚たらしむるものがありました。以上の白川、熊ノ澤、天幕澤、レコマンベツ等の名稱も、小泉氏は記載されて居られません。又濁川、北鎭澤等は果してどれに當るかも一寸雜解であります。靈山碧水の絕勝はこのレコマンベツ澤の口附近から眞髓を現はして參ります。岩壁、森林、水流の調和せる美と奇とは秀峰の及ぶ處ではありません。

レコマンベツ澤の口から約一里石狩川の上流には、層雲別溫泉が湧出して居ります。小生は未だ探勝のよすがを得ませんが、夏の湯治には限りない愉快な處だと云ひます。米味噌持參でそこのバラックに起臥し、ヤマベを釣り鱒を漁し、フキ、アイヌワサビを摘んで暮らす日の愉快は、人夫共の雜談に屢ゝ出る題材であります。

石狩川本流の記事を今終るに望みまして、猶記し度いことはニセイカウシベの劒岩であります。その形狀は宛然寫眞に見るマッテルホルンを縮小した樣で、觀望點によりましては他の峰々は全部隱蔽されて、この峰のみが針葉樹林を前景に擧えて參ります。夏は雪が消失するので餘程興味を殺がるゝでせうが、今の純白な崇高な峰頭は、何と云つてもマッテルホルンそのものであると思ひ度いものがあります。それから餘程前のことでありました、好晴でしたが風の强い日のことでした、ニセイカウシベの頂は噴烟を見る樣にスバラシイ勢で、白いものが西から東へ舞ひ立ち、又それが靡いて居りました、これは勿論乾燥した雪の悽じい運動なのでありましたが、何とも形容し難い悽壯な光景でありました。又別の日の日中エゾノダケカンバ純林に射した日光は、あの木々の梢を溫かな紅色に見せたことでした、山は時ならぬ花の美を添えた樣に見られました。又或夕のことでした、黑い雪雲を洩れた斜光が、同じ木の林を射た時、あの白茶けた幹迄が眞紅に近い色に燃え立つたことでず。又或晴れた日、イツモ黑い色としか見えない沈んだ森の針葉樹の樹冠を仰いだ時、透明に近い線がそこにあつたことでした。冬のこの邊の色は大抵の日は白と黑との二色に還元出來る位沈默して居ますが、時折はこんなにぎやいだ情景にも接し得ます。

それからチクルベツの方面に戻りまして一寸御注意に記し度いことは、北見峠の手前に中越といふ驛遞が、ルベシベから約四里餘の地點にある樣に地圖に出て居りますが、それは現今チクルベツの澤口に移轉して居りますので、ルベシベからは一里の路程が縮められたとになります。それで只今はこのチクルベツの人家が最後で、それから先は北見峠の頂上迄全然人家のないことを御承知願ひ度いのであります。勿論冬はチクルベツから先は殆ど交通杜絕であります（峠の頂上の驛遞は冬も人が居住するとの話です）。

次に北海道の冬の草鞋はツマゴ（爪甲）と云はれる一種のもので勿論北海道の特色ではありませんが——草鞋とツマカケを一つにしたものであります。赤毛布の足卷でスッカリ足を包んで穿いた心地は非常にイゝもので少しも冬寒を感じません。

（大正八年三月五日ニセイカウシベ岳の溪谷にて竹內亮）

會報

○新會員章に就いて

來る四月一日より會員全般に貸與することとしたる、本會新會員章は、本會幹事及評議員によりて提出されたる種々の考案を基として揃きたる數多の圖案中より、中村、武田、梅澤の三幹事より成る特別委員の選定したるものにして、插圖に見るが如く、外形を楕圓形となし、其の表面にはJ・A・Cの三字を組合せたるモノグラムを、又裏面には日本山岳會の五文字を打出し、概して簡潔を旨としたるは、簡單明瞭にして一見其の何たるかを知り得ると同時に、模造をして困難ならしめ得るの利あり。尚裏面にはアラビヤ數字を以て一々會員の番號を刻めり。徽章の形狀は拔型の製作に甚しく困難なる楕圓なると、字體も亦鋼鐵の鑄型に彫るに最容易ならざる曲線形なれば、製作の可能なるやを疑はしめたれども、幸にして東京府立工藝學校に依囑し、且其工程の一部並に製作上の監督には、會員松井幹雄氏を煩はすことを得たるが故に、原圖の趣を損すること殆んど無之して、製作を完うし得たるは、一に同氏の好意によらずんばあらず、此處に記して深く感謝の意を表す。

會員章は、其所持者が本會々員たることを證する物にして、且裏面に刻みたる番號は會員名簿に登載しあり、又同一番號の會員章は一個以上製作することなきを以て、若し會員章一端紛失したるか、又は會員退會する場合には、其の番號は無效となるを以て、無效會員章の番號は之を廣告して、假令斯かる徽章を所持する者ありとも、夫を本會々員と認めざるものとす。斯の如く會員章に刻みたる番號は甚有意義なるものなれば、會員章の貸借は斷じてなす可からざること論を俟たず。從來本會々員に非る者にして、本會々員章類似の徽章を佩用して山地を旅行する不德義者ありたるやに仄聞す。將來斯かる背德漢に邂逅せられたる場合

は、之を本會事務所に通告せられんことを望む。同時に本會々員は特に行動に注意せられて本會の名譽と各自の德望とを傷けざらんことを切望に堪えず。

○會員章番號割當につきて

昨年六月本會規則を改正し、會員全部に會員章を貸與することゝ定め、以て其の所持者が本會々員たるの證となさんと企てたるが、明治四十二年十二月以前の入會者中には、會員章を所持せられざる會員と、徽章を自費にて購求せられたる會員あり、又其後の入會者に交附したる會員章も、順序不同の嫌ありて、爲に全部を整理するの必要を生じたるに際し、會員章改正の議起り、爾來其の形狀圖案に時を費すこと兩三月、本年一月中旬に到りて下圖成り、直に之を彫刻に附し、同月下旬に刻成りたるものに兩三回の修正を加へ、三月に入りて拔型の完成せると共に、徽章實際の製作に從事し、三月末を以て終了することゝしたり。材料は初は黑味銅に內定して、之を本誌第十三年第三號に豫告したれ共、將來同一材料を得難き虞ありたれば、豫定を變じて純銅を用ふることとしたり。

會員章の番號を全會員に割當つるに際しては、主として會員入會の順序に據り、同年月の入會者一名以上之有る場合には、大正八年十月十四日以前の入會者は、大體姓名のアルファベット順とし外國人名以外は、オホはオーに、カウ、コフはコーに、カヒ、カヰはカイの如く、發音に準據して、綴字又は語源に賴らず。大正八年十月十五日以後の入會者は、入會通知に從つて拂込みたる入會金及會費到着の順序を以て定むることとしたり。

大正七年以前に入會の會員中には、會費滯納の向少からず、又規則改正の結果既納の會費に不足額を生じたる場合多かりしを以て、夫等は昨年十一月以降再參拂込を請求し置きたるにも拘はらず旅行其の他の理由によりて、豫期の時日內に會費の拂込を見るを得ざりしは甚遺憾とする處なり。從て會員章番號は、大正九年二月廿九日迄に、大正八年度會費全額を納付されたるか、又は其保證ありし會員に限りて割當て、其後に於て拂込まれ

たる會員には、其拂込の順によりて適宜割當つることゝしたり。

會員章の貸與に關しては、明治四十三年一月以後に入會の會員には、舊會員章と引換又は、舊會員章を記念として保存する爲め再貸與手續（『山岳』第十三年第三號一三一頁の規定）を了せられたる順序により、明治四十二年十二月以前の入會者には、引換の必要無之も、大正九年度會費納付濟の會員に限り、四月一日より書留郵便を以て發送することゝしたり。新會員章を受取られざる會員は至急其手續を履まれて本會々員たるの證左を得らる可し。

○會員名簿

本號配本と同時に會員には會員名簿を配布したり。名簿は本年三月一日現在の會員七百四十九名を收錄し、從前の不便なるイロハ順を廢してABC順とし、又前記の方法によりて割當てたる會員章の番號をも附記したり。二月二十九日迄に大正八年度會費未納の會員には、番號割當を差控へたれども、其の後に至りて會費の納入を見たる場合には、名簿校了以前に到著したる場合には皆番號を記入することゝせり。

○入會申込者及び紹介者に告ぐ

本會に入會を申込まるる場合には、必ず會員の紹介を要するものなれば、紹介者は入會希望者に對して本會の性質、入會手續、入會後の權利義務につきて充分の說明をなし、入會の手續を誤り又は本會を了解せざる爲に生ずる入會後の失望及義務違背等の起らざらん樣豫め注意し、入會者が萬一義務を履行せず、又は會員たるの體面を傷くるが如き行動を敢てなしたる場合には、其紹介者が本會に對する責務を負ふの覺悟あることを要す。入會に際しては現會員三名（內一名は評議員）の紹介者を以て、規定の申込書各欄に所要記事を記入し各自捺印の上之を事務所に送附せられる可し。適法の申込書は之を事務所に於て受理の上、幹事會（年四回以上開會）に提出し、出席幹事中少しも異

議なき場合には茲に初めて入會許可となすものなり。入會許可の上は其旨を事務所より入會申込者に通知す可きを以て、直に所定の入會金と其年度の會費とを拂込まる可きものとす。此金員事務所に到著すれば、事務所に於ては會員原簿に入會者の姓名及會員章番號の記入をなし、右了れば其番號の會員章を新入會者に送附す。會員の權利は茲に初めて生ずるものにして、假令入會の許可ありとも、會員章の貸與を受けざる間は會員たるの權利全く之無きものとす。會員の權利義務に關しては本會規則書に明記しあり。規則書入用の場合には郵券二錢を事務所に送らるれば、申込者の會員たると否とに依らず、直に之を送附すべし。其他本會事務所に宛てゝ照會を發する場合、若し返信を要する時には必ず相當返信料を送附せらる可く然らざる時には一切返信の責務なきものとす。又假令返信料を封入しあるも、會務に非る雜問に對しては、本會事務所は回答の責なきものとす。

本會入會手續は甚だ繁雜にて、申込者の詮衡を嚴密となしたる爲、世間往々本會の會員減少策又は入會拒絶策なりと誤解するものあるやに聞及べ共、右は會員の選擇を嚴にし、單に流行の所謂登山熱に驅られて一時的好奇心より入會を欲するが如き、輕佻浮薄なる徒を避けんが爲めにして、敬虔眞摯なる山岳愛好者の來り投ずるとあらば吾人は双手を展きて之を歡迎するに吝ならざる也。

右に連關して特に注意を促したきは、現行規則制定以前に入會されたる會員にして入會當時の規定が現今に比して緩なりしは言を俟たざれども、夫を標準として他より非難さるるが如き原因を作すことを避くるは勿論、自己の品位を高め、引いては本會の威信を保つに極力留意されんことを、切望して止まず。

○會費領收報告に就て

前號第百卅四頁に於て、會費拂込の際の領收證は、誌上に於ける領收報告を以て之に充つることとなすべき由を記し置きたるも、其後特に會費の領收證を請求せらるゝ向少なからざる上、貯金管理局に於ける手違ひの爲に、誤謬を生じたる如き

場合には、多くの日數を經る際には取調甚困難となるべく、成るべく早く照會する必要あるを以て實行の便宜上取扱方法を更め、今後は誌上の受領報告を廢し、拂込毎に本會より端書を以て受領の旨を通知する事とすべきを以て、其旨承知されたし。

○第七回小集會記事

大正九年二月八日麹町區紀尾井町皆香園にて開催、午後一時よりの豫定なりしも折柄の降雪にて集合やゝ遲延の氣味ありしを以て、先雜談に時を移し、午後二時司會者梅澤幹事開會を宣し、木暮氏を紹介して講演に移る。

皇海山に就て　木暮理太郎氏

氏が昨秋該地方に行はれたる詳細の旅行談にして、此多くの人には名さへ耳遠き山岳を充分に紹介したるものと云ふべく、此山は庚申山の奥院なりし事を斷ぜられたり、追て此記文は山岳誌上に掲載せらるべきも、其暴雨中のノシャガミの一夜の如き、集會出席者以外には受け難き興味ある談なりき。茲に茶菓を喫して後

地形圖に就て　梅澤親光氏

地形圖に關する雜話にして、地形圖の定義と其說明とを述べ、新古數種の地圖に就て二三の批判を加へられたり、要するに追て山岳誌上に載せらるべき記文の概要と稱し得べきものなり。

斯くして午後五時半散會す、出席者二十八名、內會員の氏名次の如し。

辻本滿丸、松本善二、小林修明、藤島敏男、黑田孝雄、伊藤新三、横山光太郎、村越匡次、武井眞澄、松井幹雄、又木周夫、高田達也、鳥山悌成、日高信六郎、谷內重夫、今村巳之助、高頭仁兵衛、木暮理太郎、田部重治、武田久吉、梅澤親光。

○万國山岳大會

フランス山岳會の主催にて、本年五月一日より十日間モナコに於て聯合國間に山岳大會を開くの議あり、昨年二月以降數回に亘りて本會にも代表者を出席せしむ可き樣の交涉あり、或はフラン

ス山岳會副會長にして万國山岳會長ガベー男爵より、或は同會幹事モンタニエー氏より我が外務省を通して加入出席を慫慂せらるるあり、本會に於ては再三幹事會に於て出席の可否能否等を協議する處ありしが、昨年十一月二十六日の評議員會に於て同會に加盟することに決定し、地圖類の出品を承諾したれども、適當なる代表者を派遣する事不可能なれば、大會に列席することは見合すの止むを得ざるに至れり。かくて本年二月十四日附を以て、本會よりは陸地測量部發行五萬分一地形圖中霧島山、立山、富士山(四枚續)、日光(二枚續)及本會より發行したる劍岳登山地圖、日本北アルプス憶測圖、北海道中央高地地形圖を發送し、又同十八日武田幹事本會を代表してガベー男爵に宛てて祝辭を送り且『山岳』前號一冊を發送したり。

かゝる間にフランス山岳會は本會名譽會員ウェストン氏を山岳大會に招待し、同氏は我が國山岳の大要及び本會の成立に關して講演せらるゝ事となり、其の材料を本會に覓められたれば、特に高頭幹事は日本群島の山系概觀一篇を起稿し、梅澤幹事は日本山岳會沿革略記一篇を執筆され、田部、武田兩幹事夫を英譯し、地圖一葉を添えてウェストン氏に送れり。ウェストン氏は四月中旬英國を出發してモナコに向はる可く、本會の爲並に我日本の山岳の爲に或は快辯を揮ひ或は小篇を執筆せらる可しと雖も、勿論本會幹事の一員に非るを以て、本會を代表して出席せらるゝにはあらず。又他日右大會に關して詳細なる報道を得ば、之を誌上に掲げて讀者に報道するの機あるべし。

○會務報告

大正九年二月八日午前十時より清水谷公園内皆香園に於て幹事會を開き左記の事項につき協議す。

一、第十三回大會につきて。一、万國山岳大會に祝辭發送の件。一會員章見本承認の件。一、評議員城數馬氏を名譽會員に推薦の件。(同氏は三月二日附を以て名譽會員たる事を快諾されたるを以て會員名簿中名譽會員の部に追加す可きものとす)。一、入會申込者詮衡——入會許可、赤沼千尋、藤岡鍵藏、橋本重隆、乾喜六、海谷貫一、高野孝一、津田常雄。(以上入會者中大正八年度分『山岳』第十四年より配本希望者には、同年度分會費に當る金

貳圓を入會金と共に納付して其頒布を受くるを得可き事に内定。

（出席幹事）木暮、高頭、高野、武田、田部、梅澤

二月十四日本會事務所に於て編輯會を開き、『山岳』第十四年第二號原稿を整理す。

（出席幹事）木暮、中村、武田、梅澤。

○交換及び寄贈圖書

地學雜誌　第三百七十三、四、五號
史蹟名勝天然記念物　第三卷第十二號
歷史地理　第三十五卷　一、二、三號
ツーリスト　第八年第一、二號
みづゑ　第百八十一號
東京教育博物館一覽（大正八年）
高原評論　三月號
山岳寫眞　第一輯
（歐文圖書は英文欄に掲載せり）

○本會規則抜萃（大正八年六月改正）

第二條　本會ハ山岳ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス
第三條　本會ハ第二條ノ主旨ニ基キ機關雜誌「山岳」ヲ發行ス、又時宜ニヨリ別ニ臨時又ハ定時ノ出版物ヲ發刊スルコトアル可シ
第五條　本會ハ會長ヲ戴カズ幹事若干名ヲ置キ、一切ノ會務ヲ處理セシム
第六條　本會ハ別ニ評議員ヲ置キ重要ナル會務ニ參與セシム
第十條　本會々員ヲ別チテ正會員及ビ名譽會員トス、名譽會員ハ本會幹事ノ推薦ニヨルモノトス
第十一條　正會員タラント欲スル者ハ會員三名ノ紹介ヲ以テ住所姓名年齡及ビ職業ヲ記シタル申込書ヲ事務所ニ送附スベシ、但シ紹介者ノ一名ハ本會評議員タルヲ要ス、（入會申込用紙ハ事務所ニ備付ケアリ）
第十二條　入會ノ許否ハ幹事會ノ決議ニヨルモノトス
第十三條　入會許可ノ通知ニ接シタル者ハ入會金五圓ニ會費ヲ添ヘ拂込マル可シ
第十四條　正會員ハ會費年金參圓ヲ前納ス可キモノトス（以下略）

現任幹事（七名）

木暮理太郎　中村清太郎　高野鷹蔵　高頭仁兵衛　武田久吉
田部重治　梅澤親光

評議員（十四名）

城數馬（在朝鮮）　小島久太（在桑港）　近藤茂吉　三枝守博
辻本滿丸　辻村伊助　山川默及ビ現任幹事七名

○投稿規定

一、會員は勿論會員以外の何人も投稿隨意のこと
一、用紙は大體半紙大又は半紙半枚大、天地左右をあけ、毎紙片

面のみに字體明瞭に認め、各行二十二字詰とし、毎紙同一行數のこと

一、、。「」（）等は各一字劃宛とし、行を更むる時は一字下げのこと

一、地名には片假名を振り、漢字不明にして宛字をなす時は其旨を括弧内に明記す可きこと

一、原稿は必ず左記宛て送附のこと

東京市本郷區駒込蓬萊町三十一木暮方「山岳」編輯所

尚編輯に關する用件は總て前記宛御照會のこと、殊に挿圖寫眞等のある原稿は其の調製方印刷方につき一應御相談あらば幸なり、又原稿は一切返戻せず。

第十三回大會豫告

時日　來る五月九日（第二日曜日）午前十時展覽會開場

會場　東京市赤坂區溜池三會堂（外濠電車葵橋停留所下車）

講演　午後五時半開始

一、高層の氣象現象

理學博士　藤原咲平氏

二、イエロウストーン　ナショナル　パーク（幻燈）

理學博士　中村清二氏

入場は會員たると否とを問はざれど、相當服裝の上成べく名刺御携帶を希望す。小兒の入場は謝絶することあるべし。

會場には上草履の備あれども靴又は草履を御便利とす。

本年の陳列品は特種の物品又は題目に限らずして、廣く山岳に關する圖書、地圖、繪畫、器具、標品等となす可きを以て、何品に係はらず出品あらんことを希望す。出品物は當日會場に御持參下さるか、又は豫め事務所迄現品御届置被下ば幸甚。

會　告

大正九年度會費未納の會員は、至急納付あり度く口座登記料を添え、振替貯金にて拂込まるゝを簡便とす。

大正九年四月二十三日印刷
大正九年四月二十五日發行

〔定價金壹圓〕

著作權所有

新潟縣三島郡深才村深澤
發行兼編輯者　高頭仁兵衛

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷者　島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍

東京市麹町區富士見町四丁目六番地
發行所　日本山岳會
振替口座東京四八二九番

東京市神田區表神保町
發賣所　東京堂

第九回小集會豫告

來らん六月十三日（第二日曜日）午後一時より麹町區清水谷皆香園に於て、田部幹事司會者として開會す可し。

當日講演　木曾山脈の地貌發達に就て　理學士　辻村太郎氏

題未定　文學士　田部重治氏

會員以外の來會者は會員の紹介を要す。

山岳圖書大販賣

高頭式先生編纂

日本山嶽志　全一冊　正價金貳圓　送料金貳拾錢

日本山岳會發行

高山深谷　第四輯、第七輯、第八輯

同

山岳　右　第二年第三號。第三年第三號。第五年第二號。第六年各號。第七年各號。第八年各號。第九年各號。第十年第二號。第十一年各號。第十二年第一號、第二・三號（合冊）。第十三年各號。

右兩種は御注文に先立ち在品の有無、定價、送料一應御照會を賜はり候樣願上候　敬白

東京市芝區高輪南町三十番地
振替口座東京三二〇五二番

健全社書店

PHOTOGRAPHIC ILLUSTRATIONS IN THE JAPANESE PART.

Page

(51) The Summit of Chitukaniush.
Sketch. by Mr. M. Takenouchi.

(55) Mt. Nisei-kaushpe. Do.

(57) The Ishikari Range viewed from Nisei-kaushpe.
Sketch. by Mr. M. Takenouchi.

(58) The View towards east and north-east from the eastern side of Nutakkam-ushpe. (In 3 pieces)
Sketch. by Mr. M. Takenouchi.

(59) The eastern side of Nutakkam-ushpe seen from a spot on the right bank of the Sôun-pet.
Sketch. by Mr. M. Takenouchi.

(67) Tuimarukushpet-yama from Shirataki.
The same peak from Chitukaniush.
Mts. Nisei-kaushpe and Tuimarukushpet from Temmaku-yama. Sketch. by Mr. M. Takenouchi.

THE ANNUAL MEETING FOR 1920.

The 13th Annual Meeting of our Club will be held at the Sankwai-dô Hall, near the U. S. Embassy, Shiba-ku, on May 9th. The Exhibition Room will be open at 10 A. M., and Lectures will commence at 5,30 P. M. on

Meteorological Phenomena. ..... Dr. S. Fujiwara.
The Yellowstone National Park. ..... Prof. S. Nakamura.

All Members are invited to attend the Meeting, and they are entitled to bring their friends. They are also kindly requested to exhibit anything concerning mountains, such as maps, photogrophs, pictures, books, scientific specimens, instruments, utensils used for climbing trips, etc.

PROCEEDING OF THE CLUB.

The Seventh Oridinary Meeting was held at the Kaikôen, Shimidzudani, on Feb. 8th, 1920, presided by Prof. C. Umezawa. The following lectures were given :—

An Ascent of Sukai-zan .....Mr. R. Kogure.
On Topographical Maps .....Prof. C. Umezawa.
Twenty-one members and seven guests were present.

THE JAPANESE PART OF THE JOURNAL.

The principal articles in the Japanese Part of this number are as follows :—

A Trip from Yumata in the Takasegawà Valley to Kamikôchi over Mt. Washiba, by Mr. T. Hamatani.
Mt. Norikura in snow, by Mr. T. Ono.
To Kamikôchi in spring, by Mr. K. Itakura.
An Ascent of Tsurugi-dake viâ Harinokitôge, by Mr. K. Murase.
From the Diary kept during the Trip along the Upper Course of the Ishikarigawa (with illustrations), by Mr. M. Takenouchi.
Kanotoiwa and Gozen-yama, Concluded, by Dr. H. Takeda.
Preservation of Virgin Forests, by Mr. J. Furuiye.
On Topographical Maps, by Prof. C. Umezawa.

PLATES IN THE JAPANESE PART.

Facing page
(8) The point of confluence of the Yumata and Midzumata in the Takasegawa Valley. Phot. by Mr. T. Hamatani.
(32) The View towards north-west from Iwôzawa-Nokkoshi.
The Incrustations of sulphur spring at Yumata.
Both phot. by Mr. T. Hamatani.
(72) Gozen-yama seen from the summit of Ô-take.
The Shrine on Gozen-yama.
Ô-take seen from Gozen-yama.
All phot. by. Mr. S. Yamakawa.

---

esteem for the spirit of confraternity among mountaineers of the Allied Countries.

Sincere thanks are due to the French Alpine Club for the trouble it has taken to organize the Congress.

We beg to inform you that we have already forwarded some maps, issued by our government and our Club, and by the same mail we take pleasure of sending a copy of the last number of our Journal, for exhibition. They are to be presented to the French Alpine Club after the Congress.

It is with deep regret that we have to state that we make a point of representing our Club by one of the Officers only, all of whom are, however, unable to have pleasure of attending the Congress, owing to the immense distance.

With earnest hopes for the success of the Congress,

Faithfully yours

Dr. H. Takeda. (signed)

Hon. Gen. Sec. J. A. C.

Meanwhile Rev. W. Weston, Hon. Member of our Club, was invited by the French Alpine Club to give an illustrated lantern lecture at the Congress, and he asked us to let him have a note about the history of the Club and a short account of the principal ranges of Japan. On this request we forwarded him an authorised English translation of the note on the History of our Club, specially written by Prof. C. Umezawa, and of the paper on the Mountain Ranges of Japan, specially prepared by Mr. N. Takatô, together with a map showing the ranges. In the next number of our Journal we hope to be able to print a revised translation of Mr. Takatô's paper, as it is a very concise article on the subject.

We are looking forward to getting more news about the Congress, and hope to find an opportunity of informing our Members thereabout.

THE NEW CLUB BADGE.

The New Badge, which is oval in shape and has a relief monogram JAC on the surface, is now ready for distribution in exchange for the old Badge. It has number on the reverse side, and is allotted to all members who are not in arrears. In case a Badge gets lost, its number shall be advertized and then become void. Members, who have not sent back their old badges, are kindly requested to do so, at their earliest convenience, to have their's exchanged for a New Badge.

Mazama, Vol. V, No. 4.	Portland, 1919.
Bird-Lore, Vol. XXI, No. 6, XXII, No. 1.	New York, 1920.
Colorado Chautauqua Bulletin, Vol. IX, Nos. 1—3.	Boulder, 1920.
The Geographical Journal, Vol. LIV, No. 5, LV, Nos. 1—2.	London, 1919, 1920.
Alpina, Jahrgang 27, Nr. 13, Jahrg. 28, Nr. 1.	Zürich, 1919, 1920.
La Montagne, 15e Année, No. 139.	Paris, 1919.
Club Alpino Italiano, Rivista Mensile, Vol. XXXVIII, N. 10—11, 12.	Torino, 1919.
Bollettino della Sezione Fiorentina del C. A. I., Anno X, N. 3—6.	Firenze, 1919.
Revue Alpine, 22e et 23e Années, No. 2.	Lyon, 1919.
L'Echo des Alpes, 55e Année, No. 11—12, 56e Année, No. 1—2.	Geneve, 1919, 1920.
The Mountain Club of South Africa.	Cape Town, 1919.
La Terra d'Algerie, 10e Année, No. 1—2.	Alger, 1919.

THE INTERNATIONAL CONGRESS OF ALPINISTS.

At the suggestion of the French Alpine Club an International Congress of Alpinists of the Allied Countries is going to be held at Monaco, under the Patronage of H. R. H. Prince Albert I. and the Presidence of Baron F. Gabet, May 1st—10th. Our Club had the pleasure of receiving letters and circulars re the Congress from Baron Gabet, President of the French Alpine Club, and Mr. H. Montagnier, A. C., Secretary of the Congress, inciting us to send an offical delegate. After several times of conference the Committee finally reached the conclusion that we shall adhere to the Congress and send maps etc. for exhibition, but not send a delegate. Accordingly ordnance maps of the Nikkô mountains, Fuji, Tateyama, and Kirishima Volcanoes, together with the Guide Map of Tsurugi-dake, Maps of the Northern Japanese Alps and of Central Yezo, issued by our Club, were forwarded to the Congress. Later a letter conveying greetings and best wishes was sent to Baron Gabet, which reads as follows :—

Tôkyô, February 18th, 1920.

Monsieur le Baron F. Gabet,
Président du Congrès de l'Apinisme,
30, Boulevard des Italiens, Paris.

Dear Baron,

The Japanese Alpine Club has the honour to present the greetings and best wishes to the International Congress of Alpinists and has

men. Moreover, pro-German and anti-English as were many German-Swiss throughout the war, the Valaisan guides of Zermatt and Saas Fee never forgot their English *Herren*, and look forward with eager anticipation, of which lucre is *not* the sole motive, to climbing with them once more in happier days."

"*Zermatt, August 18th.*" "JULIAN GRANDE."

ABOUT CLUB NECKTIE.

With reference to the suggestion made by the Rev. W. H. Murrey Walton for a Club Tie, in Vol. XIII, No. 1 of our Journal, we had the pleasure of receiving a letter from Mr. J. H. Mitchell, Secretary Treasurer of the Alpine Club of Canada, stating therein as follows:

"With regard to the suggestion for a club necktie made therein you may be interested to know that we have a club ribbon since 1907, which has the same meaning as Mr. Walton suggests. I enclose a sample of it. Green for the trees, grey for the rock, white for the ice and snow."

The sample so kindly sent by Mr. Mitchell measures $1\frac{3}{4}$ in. in breadth and is striped longitudinally with a dark green, grey, and white. It appears therefore the green is intended to represent the tree region, the grey the bare rock above the timber line, capped with the white—snow and ice.

We shall look forward with interest to receiving any further suggestions regarding necktie or anything similar to it.

(H. T.)

CLUB LIBRARY.

The following publications have been added to the Club Library since December 1919:—

The Twelfth Annual Record of the Ladies' Scottish Climbing Club.	Edinburgh, 1920.
Bulletin of the American Game Protective Association, Vol. VIII, No. 4.	New York, 1919.
The Mountaineer, Vol. XII.	Seattle, 1920.
The Mountainner Bulletin, Vol. X, Nos. 1, 3.	Seattle, 1920.
Bulletin of the Prairie Club, Nos. 91—93.	Chicago, 1920.
Trail and Timberline, No. 17.	Denver, 1920.
The Mid-Pacific Magazine, Vol. XIX, Nos. 1—4.	Honolulu, 1920.

was exceptional; but now, after a spell of about seven weeks of almost unbroken fine weather, the peaks around here have never been in better condition. The other day, together with my guide Siegfried Burgener, I traversed the Zinal Rothorn in fourteen hours, the traverse including the ascent of the Trifthorn and a descent by the Trift *couloir*. The Matterhorn has been ascended by the Zmutt *arête* several times this year; once by a lady with one guide. Hardly a day has passed this August when there were not twenty to thirty people on the summit of the Monte Rosa, and the numbers who ascended the Matterhorn by the orinary route were chiefly troubled by guideless climbers, and not by falling stones. At any rate it was not stones which fell owing to natural causes that endangered mountaineers, but the stones perpetually set falling by clumsy and inexperienced tourists.

"Lovers of those Alpine wild flowers of which so great a variety are to be found around Zermatt will learn regretfully that they have suffered greatly this year owing to the prolonged drought and the late, cold spring. Personally, long as I have known Zermatt, I have never seen the wild flowers so poor and stunted as this season. Except in favoured spots which are both well sheltered and watered by some mountain stream, they are too often simply shrivelled up, as, indeed, are many of the Alpine pastures, which look sometimes as if fire had passed over them.

"During this month of August, in fact, we have had only one shower in the Zermatt district. Twice the local *curé* has ascended with his flock to the Schwarzsee in procession, more than 3,000 feet above Zermatt, to pray for rain at the foot of the Matterhorn. The first time his prayers were unanswered. A few days later, therefore, the barometer being very low, he called upon the faithful to ascend to the Schwarzsee with him again, telling them that if the rain did not come this second time, they would have to make the upward pilgrimage a third time—barefoot. On their return a shower fell, but not sufficient to do more than lay the dust.

"Zermatt as a summer resort has undoubtedly built its house upon the rocks. There is really something in and about it capable of attracting people, and attracting them year after year. Consequently, although it has assuredly suffered, it has done so much less seriously than any other Swiss tourist resort. It is safe to say, indeed, that even if British climbers should largely forsake the other summer resorts of German-speaking Switzerland, they are never likely to forget Zermatt, with its undying asssociations with the conquest of the Alps by English-

for perhaps no one is less fit than the average Swiss town-dweller to attempt a guideless ascent of a high mountain, as the long list of this year's Alpine accidents already sufficiently proves.

"Had the Swiss Consular officials in London not put so many difficulties in the way of obtaining visas to passports, and had it not been rumoured that food scarcity prevailed in Switzerland, Zermatt at any rate would probably have had a very fair number of British tourists this year, even although perhaps not a single other Swiss summer resort might have had any. Judging by the accounts of those few British who have succeded in getting here, however, a visa is not easy to obtain, and travelling is trying in many respects. Moreover, there is now the additional complication that the traveller must leave Switzerland by the same frontier as that by which he entered it, while the duration of his stay in the country is strictly limited. Finally, any climber who wishes to traverse the Matterhorn or cross the Théodule Pass leading into Italy cannot now do so without risking imprisonment so soon as he reaches the other side of the Alps.

"As for food conditions in Switzerland, one who has been domiciled in the country since before the war is in as good a position as possible to know what they are. Food in Zermatt itself is abundant and excellent, although here, as of course everywhere, hotel charges have been raised from fifty to one hundred per cent. But in such a place as this, where the chief hotel-keepers have their own farms, there is no lack of anything. In certain parts of Switzerland, however, there is still not too much dairy produce. A British Colonel and an Oxford don staying at my hotel both assure me that never since the beginning of the war have they enjoyed such wholesome and plentiful food as here; but of course what is true of Zermatt is not true of all Switzerland. Thus, in May last I was staying in one of the best town hotels in the country, and the food was so meagre and so poor that after dinner I had to ask the head-waiter for some bread and cheese to satisfy my hunger. In short, food conditions in Switzerland cannot be said to be bad, and are tending steadily to improve.

"As for the conditions during this year's climbing season, in Zermatt they have been extraordinarily favourable. So favourable a year, indeed, there has not been since 1911. In other parts of the Swiss Alps, however, the weather was bad in July, although it has since improved. Last winter was not only snowy but late—in the higher mountains snow fell until nearly the end of June. Consequently the quantity of snow still lying on the Zermatt ranges and glaciers at the end of July

THE CLIMBING SEASON IN THE ALPS.

The following article, which appeared in the "Spectator," No. 4,757, Aug. 30, 1919, being of no little interest to the readers of our Journal, we take liberty of re-printing the whole in the following pages.... [Ed.]

"FOR the first time since 1914 Zermatt is having a summer season slightly recalling those of pre-war days. It may not be positively crowded with visitors, but most of the hotels are well filled. Only a few of the guests are British, the decided majority of them being Swiss. Quite half Zermatt's visitors, indeed, are French-Swiss, many of whom have probably never before had an opportunity of seeing this mountain resort. Really, it is one of the minor but not least curious results of the war that many Swiss are now for the first time able to afford to visit some of their own best-known summer resorts.

"Before the war Zermatt was reputed among Swiss to be only for "the rich English." Now, however, the physiognomy of its summer visitors crowd has wholly changed. Among the rich Swiss who are usurping the place of the rich English in Zermatt this year are a number of war "profiteers" who have made their money in various ways, avowable and unavowable; and even certain German-Swiss journalists, who, since August, 1914, and perhaps even before then, put their pens at the service of the German General Staff. No assemblage, indeed, could be more miscellaneous than that of this year's visitors to Zermatt. It includes a surprising number of statesmen and diplomatists, who at one time were in the first rank, but who now ask nothing save to be left in peace to read their papers and thus keep track of the more or less depressing fortunes of their respective countries. For the first time in Zermatt's history there is also a sprinkling of Asiatics, among them some Japanese.

"The hotel-keepers are well enough satisfied with these guests. Not so, however, the guides, who of course prefer English visitors, and who, after five lean years, are only too anxious for a fat year. But most of the *Herrsfchaften* here this summer either cannot climb, or do not wish to climb, or cannot afford to do so. At most only about a dozen members of the Alpine Club have come to Switzerland this year; and, as is well known, the Swiss themselves very often do not employ guides, which is the main reason for the great frequency of accidents to Swiss climbers,

(THE JAPANESE ALPINE CLUB.)

Fujimichô IV: 6, Kôjimachi-ku, Tôkyô.
Postal Transfer Account: No. 4829 Tôkyô.

List of the Officers (Honorary).
Elected Nov. 26th, 1919.

General Secretaries.

N. Takatô, Esq. Dr. H. Takeda.

Recording Secretary & Treasurer.

Prof. C. Umezawa.

Librarian.

T. Takano, Esq.

Editors.

R. Kogure, Esq. S. Nakamura, Esq. Prof. J. Tanabe.

Council.

Hon. K. Jô.	M. Saigusa, Esq.	Dr. M. Tsujimoto.
R. Kogure, Esq.	T. Takano, Esq.	I. Tsujimura, Esq.
K. Kojima, Esq.	N. Takatô, Esq.	Prof. C. Umezawa.
S. Kondô, Esq.	Dr. H. Takeda.	S. Yamakawa, Esq.
S. Nakamura, Esq.	Prof. J. Tanabe.	

The object of the Club being promotion and diffusion of the knowledge of mountains, and everything concerning mountains, it always welcomes to its membership those anxious to further this object by their interest and support.

An applicant for admission into the Club must be proposed and seconded by three of the members, one of whom must be a Member of the Council, and it is necessary that he should fill up an official form with particulars of ascents made or nature of the work accomplished by himself, and send it in to the Club. The admission will be decided at a Meeting of the Officers.

Members are required, on their admission into the Club, to pay Yen 5 as entrance fee, and Yen 3 as subscription for the current year, and thereafter an annual subscription of Yen 3, payable in advance on the 1st of January in each year. Payments to the Club are to be made through Postal Transfer Account or by P.O.O. Neither cash nor cheques are accepted.

Members are entitled to receive the Club's Periodical Publications. They may also attend the Ordinary Meetings of the Club and have access to the books and maps in the Club Library.

Every member shall receive a Club Badge on loan, which must be returned, on his resignation of membership.

Members who are away more than twelve months may, at their request, apply to be registered as "Absent Members" on payment of Yen 2 for fee. Absent Members may keep Club Badge; need not pay subscription; shall not get any of the Club's Publications; are not privileged to be present at any of the Club's Meetings; nor are they entitled to vote. When returned they should pay the arrears for the period of absence, and then shall receive the Club's Publications issued during their absence. In case their absence be prolonged more than three years, they have to resign membership, and return the Club Badge. If, however, they wish to rejoin the Club hereafter, they have the privilege of being admitted through an introduction by a Member of the Council only.

All communications should be addressed to the General Secretary. Enquiries equiring a reply should enclose return postage.

SANGAKU

Vol. XIV April 1920 No. 2

(English Supplement)

CONTENTS

	PAGE.
The Climbing Season in the Alps	1
About Club Necktie	4
Club Library	4
The International Congress of Alpinists	5
The New Club Badge	6
Proceeding of the Club	7
The Japanese Part of the Journal	7
Plates in the Japanese Part	7
Photographic Illustrations in the Japanese Part	8
The Annual Meeting for 1920	8

Tôkyô
Nippon Sangaku Kwai

The Journal of the Japanese Alpine Club

SANGAKU

Vol. XIV 1920 No. 2